

山草荷遺跡出土の弥生土器

新発田市指定有形文化財（考古資料）



2018

新発田市教育委員会

山草荷遺跡出土の弥生土器

新発田市指定有形文化財（考古資料）

2018

新発田市教育委員会

刊行にあたって

山草荷遺跡は、昭和11年に全国的な学術雑誌に紹介されて以来、新潟県の弥生時代を代表する遺跡として知られてきました。この遺跡は、市内の稻荷岡に在住の地域史研究家である大木金平氏が、弥生時代の遺跡として県内で初めて発掘調査を行ったもので、大きな渦が描かれた特徴的な壺の出土は、当時の弥生土器研究に多大な影響をもたらしました。そして、その資料的な価値は現在でもゆるぎない位置にあります。

このように、山草荷遺跡出土の弥生土器は学術的に貴重であるとともに、新発田市周辺に稻作がもたらされた黎明期の地域史という観点からも特筆される資料と言えます。のことから新発田市は、平成26年1月に市の文化財（有形文化財 考古資料）に指定し、平成27年2月には展示会を開催して多くの市民に御覧いただきました。

大木家は、金平・直枝・幹雄の各氏が三代に渡って、新発田市周辺の地域史の解明とその後世への継承に御尽力されてきました。直枝氏が「川東地方の考古学的考察」を著し、幹雄氏は市内の学術発掘調査「犀山岩陰遺跡調査」への参加や、金平氏の大著『郷土史概論』の復刊を行いました。幹雄氏は、山草荷遺跡出土土器の資料化の重要性を認識されていましたが、残念なことに、指定の決定とほぼ時を同じくしてこの世を去られ、本書を御覧いただくことはかないませんでした。ですがその後、幹雄氏の御令嬢夫妻からは、これらの土器を市教育委員会に寄託いただくなど、市の文化財普及活動に御協力を賜わっております。この場を借りて御礼申し上げます。

また、この資料集の刊行に向けてお集まり願った県内の弥生土器研究者の皆様には、御多用にもかかわらず、土器の図面化作業や原稿執筆に取り組んでいただくなど大変お世話になりました。誠にありがとうございました。

内容的には、やや難しい学術的な資料集ですが、土器の図や写真をながめるだけでも弥生時代の世界に触れることができるかと思います。この冊子が、地域史への関心が高まる契機となり、いろいろな場面で活用されることを期待します。

新発田市教育委員会

目 次

第Ⅰ章 山草荷遺跡の概要と整理作業

1 市文化財指定に至る経緯	1
2 遺跡の位置と立地	2
3 弥生時代中期後半の関係遺跡	2
4 大木金平の調査と研究の動向	7
5 既往文献からみた山草荷遺跡出土土器	9
6 資料の状態と整理作業	12

第Ⅱ章 山草荷遺跡出土の弥生土器

1 山草荷遺跡の土器概要	13
2 川原町口式系土器	14
3 宇津ノ台式土器	28
4 小松式・栗林式土器	34

第Ⅲ章 東日本における山草荷遺跡の位置付け

土器観察表	48
引用・参考文献	51
抄 錄	奥付け

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	3	第13図 川原町口式系土器(7)	23
第2図 調査地点の概略図	3	第14図 山草荷式の細別	25
第3図 弥生時代中期後半の遺跡	4	第15図 山草荷式と隣接する土器型式	25
第4図 「弥生式土器集成」掲載の実測図	10	第16図 宇津ノ台式Ⅱ群土器	29
第5図 「下谷地遺跡報告書」掲載の実測図	11	第17図 宇津ノ台式土器(1)	31
第6図 山草荷遺跡を構成する土器型式の広がり	13	第18図 宇津ノ台式土器(2)	33
第7図 川原町口式系土器(1)	15	第19図 小松式土器(1)	35
第8図 川原町口式系土器(2)	16	第20図 小松式土器(2)	36
第9図 川原町口式系土器(3)	17	第21図 小松式土器(3)・栗林式土器	37
第10図 川原町口式系土器(4)	19	第22図 小松式土器と栗林式土器の関連資料	
第11図 川原町口式系土器(5)	20	第23図 山草荷遺跡の土器群構造	42
第12図 川原町口式系土器(6)	21	第24図 山草荷遺跡を取り巻く地域の土器型式と 環濠集落・墓制	45

表 目 次

表1 山草荷遺跡の市指定土器一覧	1	表4 土器観察表(2) 宇津ノ台式・小松式・栗林式	
表2 各実測図・写真的対応関係一覧	9		49
表3 土器観察表(1)川原町口式系	48		

図 版 目 次

図版1 市指定土器(1)		図版9 川原町口式系土器(6)・宇津ノ台式土器(1)	
図版2 市指定土器(2)、山草荷遺跡の調査と景観		図版10 宇津ノ台式土器(2)	
図版3 遺物の保管状況(1957年と2013年)		図版11 宇津ノ台式土器(3)・小松式土器(1)	
図版4 川原町口式系土器(1)		図版12 小松式土器(2)	
図版5 川原町口式系土器(2)		図版13 小松式土器(3)	
図版6 川原町口式系土器(3)		図版14 小松式土器(4)	
図版7 川原町口式系土器(4)		図版15 小松式土器(5)・栗林式土器	
図版8 川原町口式系土器(5)			

例　　言

- 1 本書は、平成26年1月8日に新発田市指定有形文化財（考古資料）となった「山草荷遺跡出土弥生土器」及び同遺跡出土の指定外遺物を含む資料集である。現在これらの資料は、所有者である大木家から新発田市教育委員会（以下本書では、教育委員会は教委と省略）に寄託されている。
- 2 山草荷（やまそうか）遺跡の遺跡台帳名称は「山草荷Ⅰ遺跡」であるが、かつては「山草荷遺跡」「山草荷A遺跡」「草荷上ノ山遺跡」などの名称でも呼ばれていた。本書では、学史としての「山草荷遺跡」を用いる。
- 3 本遺跡の所在地は、新潟県新発田市草荷1127～1129番地ほかであり、平成17年の市町村合併以前は北蒲原郡加治川村草荷。旧字名は上ノ山である。
- 4 整理作業は、拓本と図化作業を平成25年度に、トレース・版下作成と原稿執筆を平成29年度に実施した。
- 5 遺物の実測及び本書の挿図作成は、阿部泰之・齋藤瑞穂・笹澤正史・瀧沢規朗・田中耕作・野田豊文・増子正三・渡邊裕之があたった。拓本・トレースと版下作成は、田中の指示で文化行政課理蔵文化財係の作業員が行った。
- 6 土器観察表は、各執筆者の原稿を田中が編集した。
- 7 遺物の写真は、外表紙と写真図版1～No55・66を小川忠博氏、ほかは田中が撮影した。
- 8 写真図版2の古写真は、大木家・長岡市立科学博物館（「中村孝三郎資料」）・新発田市立米子小学校から提供を受けた。写真図版3の白黒写真は、関 雅之氏が昭和32年に大木家で撮影されたものである。
- 9 本書の編集は、笹澤の協力を得て田中が行った。執筆は、第Ⅰ章1・2・6を田中、第Ⅰ章3と第Ⅱ章1を野田、第Ⅰ章4を鈴木 晚、第Ⅰ章5を渡邊、第Ⅱ章2を齋藤、第Ⅱ章3を野田（石川改稿）、第Ⅱ章4を笹澤、第Ⅲ章を石川日出志（明治大学文学部）で分担した。
- 10 整理作業と本書刊行に係わる事務は、市教委文化行政課の田中と鈴木が担当した。
- 11 本文で扱う考古学研究史の人名については、敬称を省略した。
- 12 本書では、山草荷遺跡の大きな溝状文の壺で代表される土器群を「川原町口式」の地方タイプとして「川原町口式系土器」と扱う。「山草荷式」は、複数の研究者が異なる内容に対して用いており、他の土器型式の扱いとともに、系統や位置付けの認識・解釈は執筆者の判断にゆだねて見解の統一はしていない。用語の選択も同様である。
- 13 本書の作成にあたり、下記の諸氏・機関から御協力を賜わった。記して感謝の意を表す次第である。
大木教子 大木尚樹 小熊博史 関 雅之 長岡市立科学博物館 新発田市立米子小学校（五十音順、敬称略）

凡　　例

- 1 山草荷遺跡の出土遺物は、挿図・写真図版とも同一の通し番号で示した。ただし、各執筆者が説明のために提示した図（第4・5・16図）の遺物番号は、その図の中で完結させており、数字の書体を変えて表示した。
- 2 表1の市指定土器の計測値は石膏復元の部分を含み、表3・4の土器観察表の数値とは一致しない。
- 3 川原町口式系土器の拓本で、1帯おきのミガキ部分は濃く表現した。赤彩はミガキのない方に施される。
- 4 遺物写真は、調整や質感の提示を優先させ、縮尺は揃えていない。
- 5 <引用・参考文献>では、発行者が町村（教委）の場合は県名を付し、論考には該当する頁を記した。

第Ⅰ章 山草荷遺跡の概要と整理作業

1 市文化財指定に至る経緯

新発田市は、平成15年に豊浦町と、平成17年には紫雲寺町・加治川村と合併した。その際、各町村の文化財調査審議会（以下、審議会）の委員から一人ずつ新発田市の審議会に加わっていただき、各町村の文化財情報を新発田市に継承してもらった。山草荷遺跡出土土器の所有者で、紫雲寺町の委員であった大木幹雄氏も、平成17・18年度に新発田市の委員を務められた。

各町村で文化財指定を行っていたが、指定の基準が異なっていることから、そのまま新発田市の指定文化財に移行することはせず、事例ごとに判断して市の指定文化財に加えていく方針が合併協議の中で確認されていた。

新発田市の指定文化財は、藩政資料が豊富なことから古文書の指定に偏っているため、多様な種別の文化財指定を目指しながら、合併した町村の文化財の再評価を行うことになった。平成22年5月の審議会で、教委事務局から「市指定文化財候補リスト」の作成を委員に要請、同年11月に43件が候補にあげられた。平成23年6月の審議会では、新任の委員にリストの追加を依頼して計59件となり、これが同年11月の審議会で11件に絞り込まれた。このうち、「山草荷遺跡出土弥生土器」は考古資料の最有力候補となり、県内弥生土器研究の原点として学史的に貴重な資料であるとともに、弥生土器研究の基礎資料として現在でも極めて高い価値を持っていることが評価された。そして、指定によってその保存と活用を図るために、指定の可否に対する所有者の意向を確認する方針が審議会で決定された。

平成24年8月10日、市教委はこれらの土器の所有者である大木幹雄氏に面会し、市指定文化財候補になった説明を行い、大木氏からも指定に対しての快諾を得ることができた。同年8月27日に大木家から資料を借用し、31日には審議会委員による指定候補の土器実見を行った。11月28日の審議会では、山草荷遺跡出土弥生土器が全委員の賛成で指定の調査対象に決まり、指定候補土器を選出するための資料作成を事務局で開始することになった。平成25年6月16日、大木家から遺物

を再度借用して、土器復元と写真撮影や図化作業を10月16日まで実施した。

同年12月10日、大木氏から指定の承諾書の提出があり、審議会の答申を受けた平成26年1月8日の定例教育委員会で、「山草荷遺跡出土弥生土器」が新発田市有形文化財（考古資料）に指定された。なお、この指定の数日前、体調を崩されていた大木幹雄氏が逝去された。

平成26年4月1日付けで、大木家から新発田市に山草荷遺跡出土土器が一括寄託された。平成27年2月21日～3月1日には、新発田市遺跡出土品展「新指定の山草荷遺跡出土弥生土器」を開催し、大木家の寄託の意思に沿うことができた。

表1 山草荷遺跡の市指定土器一覧

単位：cm

指定No.	実測No.	器種	形状・部位	口径	最大径	高さ
1	55	壺形土器	完形	16.5	34.4	46.1
2	66	壺形土器	完形復元		29.2	42.7
3	123	壺形土器	完形復元	5.8	14.0	16.5
4	117	壺形土器	口縁～肩部	10.5	21.8	7.6
5	14	壺形土器	口頭部	16.0		15.3
6	2	壺形土器	口頭部	9.7	15.5	11.5
7	60	壺形土器	口頭部	18.9		12.2
8	48	壺形土器	口頭部	10.0	17.2	8.3
9	40	壺形土器	肩部		21.2	13.5
10	46	壺形土器	肩部		16.5	10.6
11	119	壺形土器	口縁～肩部	13.6	18.0	8.6
12	142	壺形土器	完形復元	19.4	19.4	17.5
13	70	壺形土器	完形復元	18.3	19.8	24.0
14	87	壺形土器	体部上半		20.2	10.8
15	150	高杯形土器	体部（脚部欠）	19.2		7.7
16	149	台形土器	口縁～脚部	22.6		12.5
17	118	蓋形土器	完形復元		12.9	5.7
18	151	蓋形土器	完形復元		9.8	6.1
19	170	蓋形土器	完形復元		12.6	3.2

数値は、石膏での復元値であり、土器観察表の実測値とは異なる。

2 遺跡の位置と立地

新発田市中心部は新潟市の東方約25kmにあり、山草荷遺跡はそこから北北西へ5km、日本海東北自動車道が加治川を渡る橋の北西700mに位置する(第1図)。海岸までは直線で4.5kmである。

山草荷遺跡は、北東から南西方向に連なる新潟砂丘の最も内陸側、低地の中の砂丘列が浸食によって細長く鳥状に残った部分に立地する(第3図)。この砂丘列上に立地する遺跡は、北西からの強い季節風を避けるように、内陸側の水田低地を臨む砂丘縁辺に営まれる場合が多く、山草荷遺跡も東側緩斜面に立地する。砂丘の長さは700m、最大幅は200mである(第2図)。遺跡の標高は7m前後で、水田の低地とは1.5m近い比高差がある。この砂丘の大部分の標高は7~8mだが、図版2右下写真の左端に見える墓地の標高は約12mであり、その周辺も10mほどの高さが広がる。山草荷遺跡発見の契機となった住宅の建築時には、馬の背状の砂丘を削って砂を水田へ押し出したと伝えられており、本来の砂丘はもっと高かったと想定できる。

写真図版2の左下は、大木家が所蔵する山草荷遺跡の近景写真で、大正3年に新築された住宅が写り、水田が耕されていることから4月頃の撮影であろう。現在の家屋も、同じ位置で改築されたという。

山草荷遺跡から東を見ると、日本最小の山脈である柳形山脈、二王子岳を最高峰とする高知山山地、そしてその背後の飯豊山地を遠望できる。これらの山地・丘陵と砂丘との間は、現在新潟平野の水田地帯が広がっているが、微地形を見れば、第3図のように山間地から北西へ張り出した扇状地の存在が分かる。現在の加治川は、独立丘陵(五十公野丘陵)の北側を流れているが(第1図)。この河川が形成した開析谷や自然堤防は五十公野丘陵の南側でのみ見られ。平安時代以降の道路もこの自然堤防上に立地する。ただし、加治川が五十公野丘陵の北側へ流れを変えたのがいつかは分からぬ。大きな扇状地を形成した加治川・坂井川や胎内川は、砂丘に阻まれて直接日本海へ流れ出ることができず、低地は湿地帯となり、大小の湖沼が発達する。福島潟・塩津潟(紫雲寺潟)が著名であるが、陸軍歩兵第16連隊(新発田)が作成した明治24年版「二万分の一迅速測図 新発田町」(井口1982)には、中小の潟湖や湿地記号がいたるところに記されている。現在の加治川河口は、大正2(1913)年に砂丘を開削して日本海へ流したもので、弥生時代の山草荷遺跡の立地とは直接関係しない。阿賀野川も、人工的な砂丘掘削で享保16(1731)年に最短距離で海へ流出させるまでは、砂丘を削ることはできず、蛇行を繰り返して三日月湖や自然堤防を作り、信濃川と合流し日本海へ出ていた。下流域の河水流量で日本最大級の阿賀野川と日本最長の信濃川は、膨大な土砂を海に吐き出し、それが日本海の強風・波浪で岸に打ち寄せられることによって、長大な砂丘が作られ平野が広がる。それゆえ、この河口部に近いほど砂丘の形成は盛んで、海岸線は徐々に沖合へ伸び、砂丘列と砂丘間凹地が直線や弧状の列を交互に形成する。この新潟砂丘は、内陸側から「新砂丘Ⅰ~Ⅲ」と区分され(第3図)。山草荷遺跡はI~I列に立地する(新潟古砂丘グループ1974、鶴井はか2006)。

なお、この砂丘上の縄文遺跡は、大規模な遺跡がみられないものの、前期から晩期まで断続的に確認されている。山草荷遺跡からも前期末葉の土器がまとまって出土し、中期中葉と後期の土器も少量ある。

3 弥生時代中期後半の関係遺跡

本遺跡が立地する新潟砂丘は、新潟県最北部の村上市瀬波海岸から、新潟市南西部の角田山麓まで約80km通り、鳥取砂丘に次ぐ規模を誇る。この砂丘上には、山草荷遺跡と同時代の弥生時代中期後半から後期初頭の遺跡が集中的に分布し、内陸の丘陵や段丘にもわずかに散在する(第3図)。ここでは、新潟県北部(下越地方とも呼ぶ)に所在する弥生時代中期後半の代表的な遺跡について、北端の滝ノ前遺跡から概観していく。

滝ノ前遺跡(第3図1)(関1972・2016、滝沢はか2003) 村上市に所在し、三面川河口の右岸、眼前に日本海



第1図 遺跡の位置



第2図 調査地点の概略図（昭和58年頃）



第3図 弥生時代中期後半の道路

が広がる標高42mの段丘に立地する。海岸との比高差が著しく、防御的な選地と考えられている。弥生時代後期後半を主とする集落で、中期後半の宇津ノ台式土器と小松式土器、及び後期前半の天王山式土器が出土している。後期の円形堅穴住居3棟が検出され、アメリカ式石錨・有柄石錨・石匙・石錐・土錘などが出土している。

山元遺跡（第3図2）（流沢2009・吉井2013） 村上市に所在し、新潟平野を臨む標高37～40mの村上丘陵に立地する。弥生時代後期の高地性環濠集落で、谷を挟んで居住域と墓域が併存する。墓域からは、埋設土器やガラス小玉・筒形銅製品・小形鉄劍が出土しており、日本海沿岸の東北地方だけでなく、北陸以西の地域との交流も窺わせる遺跡である。ただし、アメリカ式石錨をはじめとする石器も多数出土し、利器が完全に金属器化されていない点は、ほかの東北地方の遺跡と共通している。出土土器の主体となる時期は弥生時代後期であるが、少量ながら弥生時代中期後半の土器群も確認できる。山草荷遺跡で多い東北南部の川原町口式土器や北陸系の小松式土器は少なく、日本海沿岸の東北北部の土器型式である宇津ノ台式土器が大半を占める。このように、山元遺跡は、近隣の遺跡の土器組成とは別様であると言える。

砂山遺跡（第3図4）（流沢はか2003） 村上市（旧 神林村）に所在し、新潟砂丘北端の内陸側縁辺に立地する。標高約5mで、背後には標高20m近い砂の山があり、遺跡発見時は砂が5mほど被っていた。弥生時代後期前半の土器が多く、それに前後する中期後半と後期後半の遺物も若干出土している。後期前半「砂山式」の標識遺跡である。土器以外では、アメリカ式石錨・石錐・磨製石斧や、紡錘車といった土製品が出土している。土器は、野田が砂山1～5群に分類し（野田2003）、石川日出志が後期前半の土器を砂山式1期・2期と型式学的に区分した（石川2004）。山草荷遺跡の時期に相当する東北系土器は、中期後半で宇津ノ台式の砂山1群と川原町口式の砂山2群（野田2003）、後期初頭で天王山式1期（石川2004）に並行する砂山式1期である。また、中期後半で北陸系の小松式土器と信州系の栗林式土器は、量的に少量である。砂山式は、日本海側の東北北部及び東北南部の土器群から強い影響を受けて成立したと考えられる。

道端遺跡（第3図6）（渡邊はか2003） 村上市（旧 荒川町）の荒川左岸に位置し、新潟砂丘縁辺に近い低地の微高地に立地する。標高は20～27mである。縄文時代後・晩期と古墳時代を主体とし、弥生時代や古代・中世の遺物も若干出土している。弥生時代の遺物は、中期後半から後期の土器のみで、出土量も少ない。新潟県北部では珍しく、川原町口式や宇津ノ台式土器といった東北系土器がなく、北陸系の小松式土器が比較的多いといった特徴がある。後期も、砂山式土器と断言できるものはない。出土量が少ないと、この土器系統の量比が遺跡本来の様相を示しているか定かでないが、日本海沿岸地域と北陸地方との関係性を示す状況は捉えられる。

兵衛遺跡（第3図9）（水澤1998） 胎内市（旧 中条町）に所在し、胎内川扇状地と加治川扇状地の中間地点に位置する。新潟砂丘の内陸側、山草荷遺跡と同列の島状砂丘列に立地し、遺物包含層上面の標高は3.5m前後である。縄文時代前期末、弥生時代後期、古代の遺構と遺物が出土している。弥生時代の土器は、後期前半の砂山式2期を主体とする。これに後北C1後半の続縄文土器が伴う。ただし、出土状況からは、砂山式土器と続縄文土器が共伴するのか、前後するのか判断できない。山草荷遺跡に後続する時期の遺跡ではあるが、北海道や東北北部地域との交流を示す重要な遺跡である。

王子山遺跡（第3図10）（渡邊はか2008） 新發田市（旧 紫雲寺町）に所在する。新潟砂丘の最も内陸側で、山草荷遺跡と同列の島状砂丘に立地する。南西へ0.9kmには環境を同じくする山草荷遺跡があり、眼前には旧紫雲寺潟の低地が望める。遺跡は、縄文時代晩期から弥生前期、弥生時代中期後半から後期、古墳時代、古代、中世と幅広い時期にわたる。弥生中期後半の土器は、宇津ノ台式・川原町口式・小松式で、後期は砂山式が出土している。石器は、この時期に特有のアメリカ式石錨がなく、縄文時代晩期の石器群との分別はつかない。宇津ノ台式土器は、崩れた重複形文や多段化する文様などであり、典型的な宇津ノ台式土器よりも新しい特徴を持つ土器群

であると考えられる。この状況は山草荷遺跡でも同様に認められる。しかし、王子山遺跡では砂山式土器の出土量が多く、山草荷遺跡よりも新しい時期まで活動が行われていた遺跡と言える。

金谷遺跡（第3図12）（鶴巻ほか1994） 新発田市に所在し、新潟平野内陸側の独立丘陵である五十公野丘陵北端に位置する。北西に開口する沢の奥の緩斜面、標高168mに立地する。縄文時代晩期が主体の遺跡であるが、弥生時代中期後半から後期の土器が出土している。北陸系の小松式土器や東北系の砂山式1期に並行する土器であるが、出土量は少ない。縄文時代に主流であった山地・丘陵の活動拠点が、弥生時代中期後半に多くが砂丘側へ移動しているなか、砂丘や沖積地以外での活動が行われていたことを示す立地の例として注目される。

松影A遺跡（第3図15）（加藤2001） 新潟市北区（旧 豊栄市）に所在する。加治川と阿賀野川のおよそ中間地点にある砂丘列の南端に位置する。遺物包含層の標高は0.8～1.3mで、縄文時代中期から晩期、弥生時代中期後半から後期、古墳時代、古代の遺物が出土している。遺構は土坑・ピットで、時期は特定できない。弥生時代中期後半から後期の土器は、東北系の宇津ノ台式と砂山式が主体で、北陸系の小松式は少量である。山草荷遺跡で多い川原町口式土器が出土していない状況は、ただ単に発掘調査地点の関係だけとも考えられるが、新潟県北部と東北地方日本海沿岸北部、東北地方南部、及び北陸地方との地域間交流が複雑であった可能性を示している。ほかに大形の銛先様尖頭器やアメリカ式石鏃といった石器が出土している。

石動遺跡（第3図17）（廣野1996） 新潟市東区に所在し、新潟砂丘の一部である石山砂丘の北端と、阿賀野川左岸の自然堤防上に広がる。遺跡の主体となる時期は、弥生時代中期後半から古墳時代である。山草荷遺跡と同時期の土器は、川原町口式土器、宇津ノ台式土器、小松式土器、栗林式土器、砂山式土器が出土している。割合的には、宇津ノ台式土器と砂山式土器が最も多く、川原町口式土器、小松式土器は少ない。なお、弥生時代中～後期の包含層上面の標高は、マイナス0.2mである。

狐塚遺跡（第3図21）（佐藤ほか2009） 阿賀野市に所在し、阿賀野川右岸沖積地の自然堤防上に立地する。標高11.1～12.3mで、周辺には三日月湖や旧河道と微高地が入り組んでいる。弥生時代中期後半と中世の遺構・遺物が検出された。弥生時代中期後半の遺構には、土坑墓11基、土器集中地点3ヵ所がある。遺物は土器のみで、東北系の宇津ノ台式土器と川原町口式土器、北陸系の小松式土器があり、また東北系土器に小松式土器や信州系の栗林式土器の要素を組み込んだ折衷土器も出土している。器種組成を見ると、壺は川原町口式土器、甕は小松式土器と宇津ノ台式土器が主体的で、器種を系統により選択していたようである。量的には宇津ノ台式土器が他の系統より多い。なお、当遺跡の土器は、山草荷遺跡や他の遺跡に比べて文様の描き方に難なものが多く、中期後半でも新しい時期に位置づけられる。また、土坑墓に副葬されたためか、比較的小ぶりで略完形の土器が多数を占め、この遺跡の土器の特徴として挙げられる。

阿賀野川は会津地方を源としており、東北南部に分布する川原町口式土器の標識遺跡が会津盆地にある。新潟県北部地域の遺跡で出土する川原町口式土器は、この阿賀野川ルートで新潟平野に流入してくる。阿賀野川下流域に系統の異なる土器群が混在する状況は、会津地域と日本海沿岸地域との頻繁な交流関係を窺わせる。

以上のように、阿賀野川以北の地域には弥生時代中期後半から後期の遺跡が多く分布しており、遺跡ごとにみられる土器組成の系統も様々である。このような多系統からなる各遺跡の土器組成は、東北地方、北陸地方といった遠隔地との地域間交流で形成されたものであろうが、各地域との繋がりは一様ではなく、一筋縄ではいかない状況が分かる。複雑な遠隔地交流が、新潟県北部の砂丘上で繰り広げられていたようである。そして、このような交流が後期以降も引き継がれて、山元遺跡のような東北系土器を主体とする高地性環濠集落を成立させたのであろう。

4 大木金平の調査と研究の動向

山草荷遺跡は、新潟県地域の弥生土器研究の嚆矢となったことでも知られる学史的な遺跡である。本項では、発掘調査の経過とそれに至る経緯を、現在知りうる文献等からたどる。

土地所有者の話によれば、山草荷遺跡で遺物が発見されたのは、大正時代はじめである。大正3年に住宅を新築し(図版2:左下)基礎を掘削した際に、完形土器を含む多量の土器が出土したとのことである。その土器は、叩き壊した後に穴を掘って埋めたと伝わる(大木1936、加治川村文化財調査審議会編 1978)。出土地は、もともと緩い馬背状の砂丘頂部であったが、住宅建設に伴って削平し残土を砂丘南東側斜面に押し出したとされる(昭和58年に田中耕作が土地所有者に聞き取り¹⁾)。ただし、この際に調査等は一切行われていない。

山草荷の地を遺跡として言及したのは、大木金平²⁾が最初である。著書の『郷土史概論』において「大正七年宮吉山草荷地内より土器漁業用網脚等の発掘」と記している。ただし、いわゆる「越後津波」³⁾により壊滅した古代集落とみており、当時の大木に、縄文・弥生遺跡との認識は見られない(大木1921)。

昭和になると、当地域の遺跡踏査を精力的に実施していた畠山佑二⁴⁾により遺物採集が盛んに行われた。畠山は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石錘・石鎌等を採集し、遺物の注記から昭和8年11月14日には遺跡の存在を確認し、昭和9年5月・昭和10年5月と継続的に遺物を採集している(畠山1934・1991、関1988b)。この踏査結果を踏まえ、山草荷を縄文・弥生時代の遺跡と位置付けている(畠山1934)。

畠山と同じ時期に山草荷遺跡の踏査を行った人物として、金塚友之丞⁵⁾がいる。金塚は、昭和8年4月から6月にかけて聖籠地区の砂丘地を中心に行なった。さらに8月までに紫雲寺地内の砂丘まで調査範囲を北に拡大している(金塚1934)。金塚の著した文献中に「山草荷」がはじめて登場するのは昭和11年だが(金塚1936b)、昭和8年に紫雲寺近隣の第I砂丘列で多数の遺物を採集(「砂丘地帯」と総称)していること(金塚1936a、金塚はか1936a・b)と、畠山は金塚の影響で遺跡踏査を始め、かつ、両氏は遺物散布地の情報や資料を交換していた⁶⁾(金塚1934、畠山1934、金塚はか1936a)ことからみて、近い時期に山草荷遺跡の存在を把握していたとしても不思議ではない。金塚の採集資料にも「山草荷」と注記された遺物があるが、採集時期は不明である。なお、金塚は昭和11年に山草荷の資料を八幡一郎に送付している⁷⁾(八幡1936)。

昭和12年に「新潟縣に於ける石器時代遺跡調査報告」(『新潟縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第7輯)が発刊された(斎藤編1937)。この冊子は、喜田貞吉・八幡一郎指導の下、斎藤秀平を中心とした新潟県の縄文時代遺跡を集成したもので、その中に山草荷遺跡も縄文土器・石器の出土地として掲載されている。本書の調査委員の一人に聖籠町在住の吉井八百吉⁸⁾がいるが、畠山は吉井の作業を補佐しており(畠山1991)、畠山の研究成果が同書にも反映されたと考えられる。また、同書には、山草荷遺跡の発掘を主宰した大木金平の資料が多数掲載されており、大木が同書成立の中心的な役割を担っていたと言える。

山草荷遺跡が学界に広く知られるようになるのは、当地域の地域史研究を牽引していた大木金平の調査以後である。昭和10年8月、大木は北蒲原郡城の考古学的な教示を得るために八幡一郎を招き、資料調査を実施した。八幡は、この際に山草荷出土の資料(礫石錘、縄文土器1片、弥生土器2~3片)を実見し、從来不明であった越後の弥生土器が含まれている点に気付いた。だが、少量で断片的であるため学界に報告することはなかった(八幡1936)。

大木は、昭和11年6月までの間に山草荷遺跡を発掘し、かつて土地所有者によって掘り出された後に埋められた土器を回収し(大木1936)、その遺物写真と土器の一部を八幡一郎に送った。これをうけ、八幡は山草荷遺跡の土器がそれまで不明であった越後地域の弥生土器であり、かつ特徴的な施文が見られる点を重視し資料紹介

を行っている（八幡1936）。

大木は、以降断続的に発掘を行い、同年10月14日には4～5人で比較的大規模に発掘し、完形土器等を得ている（中部考古學會1936c）。また、マツ等の移植に際しても発掘し、多数の土器が出土している（中部考古學會1936d）。調査は昭和12年も継続し、4月下旬の調査では完形土器を発掘している（大木1937、中部考古學會1937b）。さらに、昭和13年9月には中部考古學會の第2回大会が新潟郷土博物館ほかで開催され、大会3日目の9月25日に山草荷遺跡の発掘調査と大木所蔵の資料見学会が行われた。山草荷遺跡の3か所に穴が掘られたが少量の細片を出土したのみで、30分程度で発掘は打ち切られたという（中部考古學會1938、マ生（松木末吉）1938）。以後、山草荷で発掘が行われた記録はみられない。

この間、多くの考古学研究者が山草荷遺跡の資料調査を行っている。昭和11年9月に藤森栄一が土器の復元と実測を行い⁹⁾（大木1936、中部考古學會1936b）、同年11月には小林行雄が来訪し土器の実測を行っている¹⁰⁾（中部考古學會1936d）。また、昭和12年5月上旬には杉原莊介が来訪し実測している¹¹⁾（中部考古學會1937b、杉原1968）。藤森・小林・杉原の3名はいずれも東京考古學會の主要メンバーであるが、當時『彌生式土器聚成圖錄 正編』を編纂しており、新出の弥生土器に注目していたことが窺える。山草荷遺跡の資料は、昭和13年に発刊された『彌生式土器聚成圖錄 正編』に掲載され（森本・小林1938）、同解説において小林が「越後A様式」として提示している（小林1939）。

また、中部考古學會の大会の際には、八幡のほかに喜田貞吉・和鳥誠一・林魁一など考古學・古代史研究者のか、斎藤秀平・近藤篤三郎・中村孝三郎ら県内の考古学研究者も多数来歴しており（中部考古學會1938）、学界から高い注目を集めていたことが知られる。

- 1) 昭和58年10月に行われた、文化庁による「重要遺跡の資料調査」に対する回答。
- 2) 大木金平（1875～1952）は、小学校長、地域史研究者。大正年間頃から紫雲寺地区を中心とした北蒲原郡域の地域史研究に取り組み、大正10年『郷土史概論』を発刊した。同書では、文献史のみならず地理学・考古学・民俗学等の見地を踏まえた総合的な検討が行われ（大木1921）、高い評価を得た。考古学に関しては、同書の執筆に際し鳥居龍藏を招き指導を受けた（鳥居1925）ほか、昭和に入ってからは八幡一郎の指導を受けて研究を進めている（大木1935）。昭和12年からは山草荷遺跡の発掘を主宰し、中部考古學會新潟大会で中心的な役割を担うなど、昭和戦前期の新潟県考古学界をリードした。
- 3) 「越後津波」は、新潟県内に伝わる伝説のひとつで、大木が特に取り上げたのが「寛治年中の大津波」である。「寛治年中の大津波」は、「紫雲寺渴新田由来記」等に記されているもので、寛治6（1092）年8月3日に発生し、各地に大規模な地形変容や壊滅的な被害をもたらしたとされる。大木はこれを、大崩風雨により引き起された洪水と高潮が原因としている（大木1921）。この伝説は、「寛治園」「康平園」と呼ばれる越後古国の成立とも密接に関係し、古園については後に大木を中心とした研究者間で真剣の論争が繰り広げられた（金塚1935、大木1935）。
- 4) 岩山佑二（1901～1990）は、小学校で教員に立つ傍ら独学で考古学を学び、地域史研究に足跡を残した。昭和8年から9年にかけて踏査した記録が一覧にまとめてあり（岩山1934）、当時これほど詳細な記録は県内に無く学界に重要な情報を提供したと指摘されている（岡1988a）。なお、現在これらは資料は新潟市北区郷土博物館で一括保管されている。
- 5) 金塚友之丞（1890～1971）は、新潟県在住の高校教諭・民俗学者・地域史研究者。昭和8年から14年まで旧制新潟農中学校（現 新潟県立新潟農高学校）に勤務する一方、北蒲原郡内を中心に遺跡踏査を行い、低地に遺跡が多数分布することを明らかにすることも、その成果を基に大木金平との間で「康平・寛治園論争」を繰り広げた（岡1988a）。
- 6) 岩山コレクションには「金塚友之丞氏／昭和10年山草荷」と注記された石錐があり、また、岩山の調査メモである「岩山佑二氏考古資料採集記録帖」には、その石錐の図に添えて「金塚友之丞先生より／山草荷」と記されている。
- 7) 金塚は、八幡に対して山草荷資料以外にも織文前期土器の資料を提供しており（八幡1937）、接触があったといえる。
- 8) 吉井八百吉は、北蒲原郡聖籠町の豪封家で、慶應義塾を卒業した後に村会議員を務めた（岩山1991）。中部考古學會発足時からの会員で、新潟県在住者としては唯一創立大会にも出席している（中部考古學會1936a）。大木の共同研究者であり、大正9年に鳥居龍藏が大木を訪ねた際には、大木とともに近隣の遺跡を案内している（鳥居1925）。
- 9) 藤森は、大木採集資料の中に村杉遺跡出土の特徴的な石器（刃削刀形石器はか）の存在を見出し、資料紹介を行っている（藤森1937）。当時、旧石器とは位置づけられなかったものの学術的に意義のある資料と指摘されている（阿部1989）。
- 10) 小林は、その後の昭和18年に京都帝國大学文学部博物館に山草荷の弥生土器破片5点を寄贈している（京都大学文学部1960）。入手の経緯は不明だが、大木とのつながりが窺える。
- 11) 杉原は、この際に大木採集資料の阿賀野市六野瀬遺跡（瓶屋河渡）の弥生土器（大木1937）に注目した。翌昭和13年から14年にかけて大木らとともに六野瀬遺跡で三度の発掘調査を実施している（杉原1968）。

5 既往文献からみた山草荷遺跡出土土器

山草荷遺跡は、昭和11(1936)年の八幡一郎(八幡1936)、大木金平(大木1936)による報告以来、多くの文献にその名が登場するが、実測図あるいは写真として具体的な姿が示された文献は限られる。ここでは、山草荷遺跡出土土器を紹介した初期の5つの文献をもとに、当該土器群をめぐる認識の変化について触れたいと思う。

まず、山草荷遺跡出土土器の実測図が最初に掲載され、その特徴が記されたのは『彌生式土器聚成圖錄 正編』(以下、『聚成圖錄』と略する)においてである(森本ほか1938)。掲載された実測図は、昭和11・12(1936・37)年に大木金平宅を訪問した小林行雄・藤森栄一・杉原莊介らにより作図されたものであるらしく、その折に藤森は「縦紋ある彌生式の型式は他に例なく」と指摘している(大木1936、中部考古學會1936b・d、1937b)。『聚成圖錄』では、壺4点、甕3点、蓋3点が「中部高地地方」の図版に掲載されると共に、「特別な一つの様式を構成するものであることは疑ひ無いとしても、これが越後の彌生式土器としてどれほど普遍性をもつものであるかは全く知られてゐない」としながらも、仮称「越後A様式」としてひとつのまとまりを示す土器群として認識された(小林1939)。ただし、本来「蓋」と認定すべき土器を「鉢」として示したり(第4図24・25)、小松式土器の口縁部と川原町口式系土器の頸～胴部を図上接合して同一個体として作図する(同図21→第12図66)等、現在の認識からすれば、器種認定や図化方法等の点で問題があった。

その後、昭和43(1968)年には、『聚成圖錄』と同じ10点の実測図を再録(第4図)した『弥生式土器集成 本編2』(小林ほか編1968;以下『集成』と略す)が刊行された。特筆されるのは、『聚成圖錄』では、いまだ全容が分からぬ新潟県域における弥生土器の一例として扱われたに過ぎなかった山草荷遺跡出土資料が、「北陸地方II」の第II様式として編年的・型式学的な位置が与えられた点にある。さらに、福井県・石川県・富山県の3県を「北陸地方I」として括する一方、あえて新潟県域のみを「北陸地方II」として分離した経緯を勘案するならば、新潟県域における弥生土器に隣接地域と異なる様相を認めていた事をうかがわせる。

また、同書では、『聚成圖錄』と同様、山草荷遺跡以外では断片的な資料しか知られず、詳細は不明と記しながらも、①壺形土器は東北地方南部の「南御山式土器・梯形開式土器」にその系統がたどることができるとともに、甕形土器には、②胴上半部に菱形文や連続する山形文を施した福島・秋田・岩手県などの東北地方に多いものと、③櫛状工具で直線文や波状文を交互に重ねたものが並存する点を強調している。本書では、①は福島県方

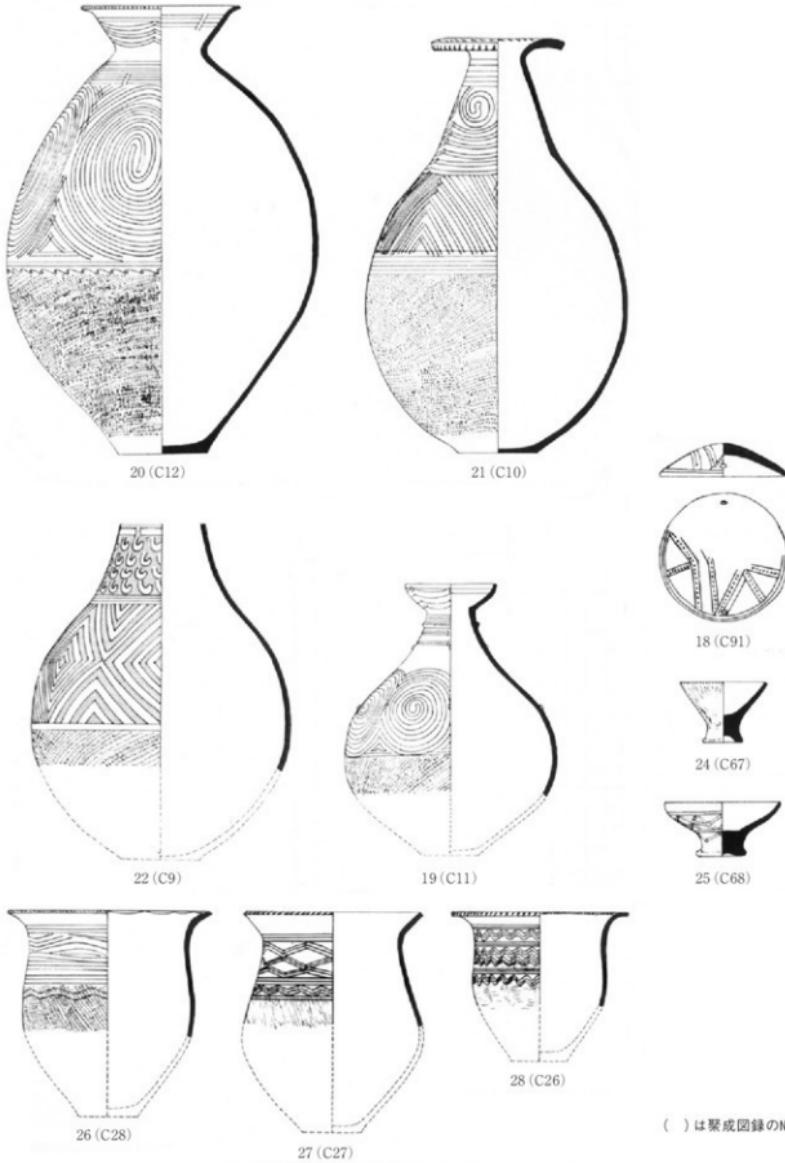
表2 各実測図・写真的対応関係一覧

器種	本書	聚成圖錄	集成	下谷地	県史
壺	2	C 11	19		485 - 2
甕	12			2	
壺	14				485 - 1
壺	40				485 - 5
壺	46			1	485 - 6
壺	47	C 9	22		
壺	48				485 - 3
壺	55	C 12	20		484 - 2
壺	66・156?	C 10	21		484 - 3
甕	70			3	484 - 4
甕	87	C 27	27	7・8	486 - 上
甕	90・94	C 28	26	6	
甕	92・99			4	
甕	106・110			5	
壺	114			11	
無頭甕	117				485 - 4

器種	本書	聚成圖錄	集成	下谷地	県史
蓋	118	C 68	25		485 - 8
甕	120				21
壺	121				10
壺	122				12
壺	123				16 484 - 1
壺	125				14 486 - 下
甕	129				13 486 - 下
甕	133				19
甕	136				20
甕	142	C 26	28	17	485 - 7
蓋	151	C 67	24		485 - 9
壺	152				15 486 - 下
鉢	169				22
蓋	170	C 91	18		
壺	171				9
甕	—				18

※文献：『聚成圖錄』：『彌生式土器聚成圖錄 正編』(1983) 東京考古学会
『集成』：『弥生式土器集成 本編 2』(1968) 東京堂出版

【下谷地】：『下谷地』：『下谷地遺跡発掘調査報告書』(1959) 新潟県教委
【県史】：『新潟県史』資料編1 原始・古代一 (1983) 新潟県

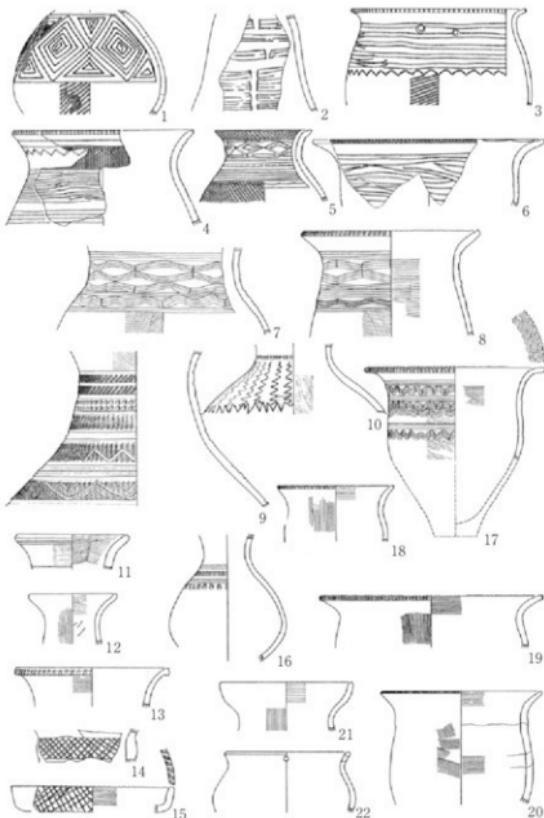


第4図 「弥生式土器集成」掲載の実測図 (1 / 5)

面の川原町口式系、②は宇津ノ台式、③は小松式の特徴と判断していることから、山草荷遺跡出土土器が複数の系統で構成されていることが当時からすでに認識されていたことが分かる。一方、「集成図録」で掲載した実測図が未修正のまま転載されたため、該当出土器の特徴について誤った認識が広く周知される結果となり、後世の混乱の要因ともなってしまった点は否めない。

『集成』刊行の2年後、福島県会津地方を中心に東北地方の弥生土器編年を精力的に推進してきた中村五郎により、「山草荷式土器」の編年位置と広域にわたる影響関係を扱う論考(大木・中村1970)が発表され、『集成』で示された土器の拓影と未公表資料の実測図(拓影19点、実測図1点)が掲載された。中村は本論文のなかで、昭和30・34年の2回にわたる大木家所蔵資料の観察から、「集成図録」及び「集成」で示された壺(第4図21)が、「壺の頭部以下が保存されているのみで、それに接合される口縁部は見当たらない」とことを確認すると共に、「山草荷1・2式」の型式学的分析を通して実測図の不備を指摘した。一方、本書の作成過程で判明した別個体の土器片を接合した例(大木・中村1970:第1図16→本書:第17図94・103)について指摘がなかった点については、掲載された拓影図から見てとれるとおり、座布団に糸で括りつけられたままで探査せざるを得なかった当時の状況を考慮するべきかも知れない。いずれにしても拓影図の提示によって、施文具の特徴や施文の癖、器面調整や縄文の特徴等、実測図だけでは分からなかった情報が公にされたことは、以降の当該土器群の理解に与えた影響は大きかったと言えよう。

その後、本県の弥生中期後半を代表する集落遺跡である柏崎市下谷地遺跡発掘調査報告(高橋ほか1979)のなかで、山草荷遺跡出土土器が大木家から借用され、上記2つの集成図録掲載の資料を中心に実測・掲載された(本書:第5図)。今回の整理作業の過程において点検作業を実施したところ、別個体の土器が同一個体として接合されていたものをそのまま図化したり(第5図4・5)、逆に同一個体を別個体とする(第5図7・8)等の誤認があつ



第5図 「下谷地遺跡報告書」掲載の実測図(1/5)

た(表2)ものの、実測技術の向上と表現方法の改訂により、「聚成図録」・「集成」に比べて土器の特徴が明瞭になった効果は大きい。また、山草荷遺跡資料の中から栗林式土器を抽出したことにより、4つの系統(東北南部の満文土器、北陸西部の柳描文土器、信州の栗林系土器、東北北部の宇津ノ台系土器)の共伴を具体的に指摘した点が評価される。

昭和58年には『新潟県史』資料編1が刊行され(新潟県 1983)、山草荷遺跡出土土器33点(接合復元資料13点、破片20点(同一個体含む))の写真が掲載された。これにより、「聚成図録」・「集成」の復元の誤り(本書:第4回19・21)が改めて明らかとなり、山草荷遺跡出土土器の特徴を検証する機運が醸成されることになった。

6 資料の状態と整理作業

平成25年6月16日、大木家から埋蔵文化財整理室に遺物を搬入し、整理作業に先立って現状の記録と全体把握を行った。整理作業の目的は、石膏で復元されている土器以外の指定文化財候補の確認・選出と、考古資料として活用するための図化作業である。完形土器を除く遺物の大部分は平箱に納められ、かつ座布団に木縄糸で縫い付けられていたため、箱に仮の連番を、座布団には枝番を付けて撮影を行った。山草荷遺跡の遺物が収納された平箱は36箱、そのうち繩文土器と石器(明確な弥生時代石器はない)が5箱のため、弥生土器は31箱である。平箱の大きさは、外寸平面425×30.5cmで統一され、外寸高6.0~7.0cmが24箱、9.5cmが2箱、14.0cmが3箱、15.0cmが2箱で、高さ6.5cmが最も多い。弥生土器の座布団は44枚で、1箱に1~4枚(多くは1~2枚)が入っていた。未洗浄の土器細片も2箱あった。立体的に接合された土器は、深めの平箱に入れられ、No55と66の完形壺(第11-12図)は、土器の大きさに合わせて作られた木箱に納められていた。また、石膏復元されたNo70・123・142などは、既製のダンボール箱に入れられていた。使用された接着剤は2種類あるようで、セメダイン系と木工ボンドのようなものがある。後者は、隙間があってもブリッジのように浮かせて接合できることから、本来は接合しない破片も浮いた状態で接合されていた(図版3-4b・6bなど)。また、大きめの土器片は、補強のためか内面に帯状の和紙が和欄で貼り付けられていた(図版13-136、図版14-149)。

山草荷遺跡の遺物は、昭和53年の新潟県教委による下谷地遺跡整理作業時に、参考資料として大木家から借り出された。この時に器形復元と石膏充填が行われ、座布団縫じの遺物も再縫い付けがされている。その後は、大木家から不出のため、今回の搬入における遺物の収納状態が、下谷地遺跡の整理作業を反映していると言える。整理作業に当たり、関 雅之氏から、昭和32年に大木宅で撮影した山草荷遺跡の遺物写真の提供を受け、その一部を今回搬入時の状態(カラー写真)と対比する形で図版3に掲載した。4a~9bの上下6組の座布団と、10~12の接合土器である。関氏撮影の座布団縫じの遺物の状態が、大木金平によって抽出された群といえ、同一個体や似た文様の土器が集められている。当時と現在を比較すると、復元のため抜かれた遺物を別にすれば、縫い付けの位置や糸の掛け方に異なりはあるものの、座布団単位では内容がおおよそ同じであった。

整理作業に当たっては、糸を切って座布団から土器を外すこと、間違っている接合部分は離すこと、復元できる個体は接合し石膏を入れることの承諾を大木家からいただいていた。その結果、5点を指定候補に加えることができた。整理作業は、主に県内の弥生土器の研究者に協力を仰ぎ、器形や断面の実測作業と観察を行った。作業は平成25年7月7日から10月16日の間(延べ17日)である。拓本は当市教委埋蔵文化財係の作業員による。また、本書に関わる挿図や観察表の作成は、執筆者を中心に平成29年度に実施した。

第Ⅱ章 山草荷遺跡出土の弥生土器

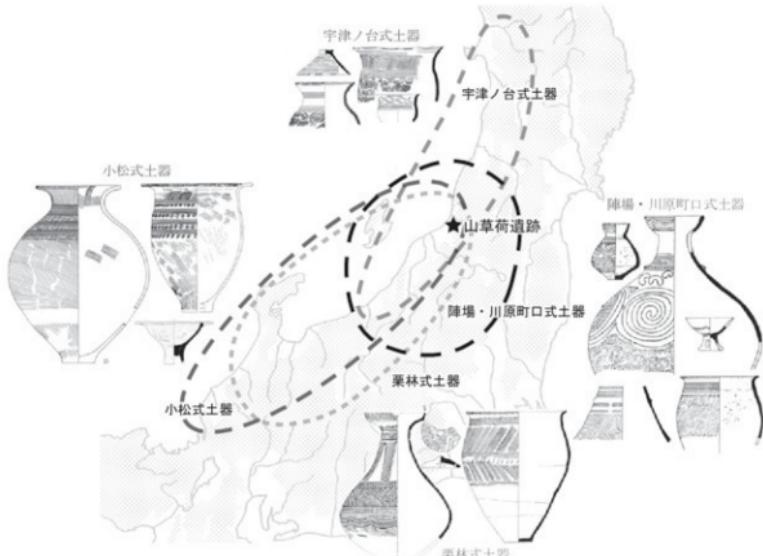
1 山草荷遺跡の土器概要

本遺跡からは、東北地方や北陸・中部地方といった遠隔地および隣接地域の特徴を有した土器群が確認されている。それらの構成は、東北日本海側に分布する宇津ノ台式土器、東北南部の内陸に広がりを持つ川原町口式土器、北陸地方の小松式土器、信州北部を中心分布する栗林式土器の4型式に由来する土器群からなる。第Ⅱ章では、「宇津ノ台式土器」、東北南部で似通った一群の「川原町口式系土器」、「小松式・栗林式土器」に三大別し、各担当者が記述する。

さて、山草荷遺跡出土土器については、すでに中村五郎が詳細に検討し、報告している（大木・中村1970）。はじめに、中村が報告した概要を紹介し、次いで現在の視点から各土器型式の特徴と構成比率について記す。

中村は、本遺跡出土土器を山草荷1式土器と山草荷2式土器とに大別した。山草荷1式土器は壺を主体とし、磨消繩文が少なく、平行沈線文系に属する土器群であり、川原町口式土器に相当すると位置づけた。また、山草荷2式土器は、壺が器種の大半を占め、壺は1割にも満たない指摘した。壺の特徴は、ゆるやかに大きく外反する口縁部をなし、文様は菱形文・連弧文が中心で、縱走する繩文とハケ調整が残されたとした。壺は破片のために全体像を確認できないとするものの、文様は格子目文・波状文が主文様となる。

そして中村は、山草荷1式土器はほぼ川原町口式土器であり、壺の特徴も後期の天王山式土器に受け継がれる要素を持っているとした。山草荷2式土器は天王山式土器と比較すると類似点が多く、壺の器形、鋸歯文、縱走



第6図 山草荷遺跡を構成する土器型式の広がり

する縄文といった特徴は、それに引き継がれる要素であると評した。そして、山草荷1・2式の間に天王山式土器を位置づけた。以上が、中村によってまとめられた本遺跡出土土器の概要である。

次に、当該期の資料が増加した現在の目で改めて本遺跡出土の土器を観察すると、中村の指摘を裏付けるものもあれば、中村が指摘しなかったいくつかの系統の土器もあることが分かった。

はじめに、系統について見ていく。最も多く出土し、本遺跡出土土器を代表する2点の壺(第11図55・第12図66)を含め、72点を図化した土器群が川原町口式系土器である。中村の山草荷1式土器に相当する。この土器群は、1本・2本描き沈線や平行沈線間のミガキの有無などの特徴から、さらに細分されると考えられる。なお、底部のうち、小松式以外は型式同定が困難であるが、縄文施文土器が多いことから便宜的にここで扱った。布痕・木葉痕・模痕・ナデがあり、14点である。

次は、宇津ノ台式土器(須藤1970)で、小松式との折衷も含め掲載点数は30点である。この土器群も細分できる可能性がある。新潟県阿賀野市狐塚遺跡(佐藤ほか2009)出土の中期末の「狐塚式」(鈴木2014b)に属する可能性が高い土器も含まれるからである。また、宇津ノ台式土器に後続し、新潟県北部地域を中心に分布する後期初頭の紗山式(石川2004)に類似する土器も認められる。特徴的な交互刺突文が確認できない点から、砂山式に含めるべきか意見が分かれよう。

中村が山草荷2式とした中に、北陸系の小松式土器が認められる。掲載点数は、他型式との折衷土器を含め44点である。この小松式も最低2時期以上の細分が可能である。

最後に、栗林式土器がある。出土点数は3点と少なく、すべて掲載した。壺・蓋のみで壺がないなど、器種に偏りがみられる。

以上、総掲載点数は171点である。戸水B式か猫橋式の器台1点と所属型式不明の底部14点を除外した156点の系統別の割合は、川原町口式系土器が46%、宇津ノ台式土器が14%、小松式土器が28%、小松式と東北系・宇津ノ台式との折衷が10%、栗林式土器が2%となる。本書掲載土器の選出に当たっては、同種多量の川原町口式系土器をかなり削り、また、無文や器面の荒れた壺や甕も掲載を見送った。反面、小片でも特徴的な小松式や宇津ノ台式土器などは優先している。そのため、掲載資料の各型式の割合が、出土土器全体を正確には反映していない。しかし、その傾向は概ねつかめるものと考える。つまり、川原町口式系土器の系統が主体で、客体として小松式土器と宇津ノ台式土器が入り込む形であり、栗林式土器は少量ながらこの遠隔地まで北上してきていることが読み取れるのである。この傾向は、山草荷遺跡の中期末に一部並行し、さらに後続する後期が主体の砂山遺跡(浅沢ほか2003)でも同様である。

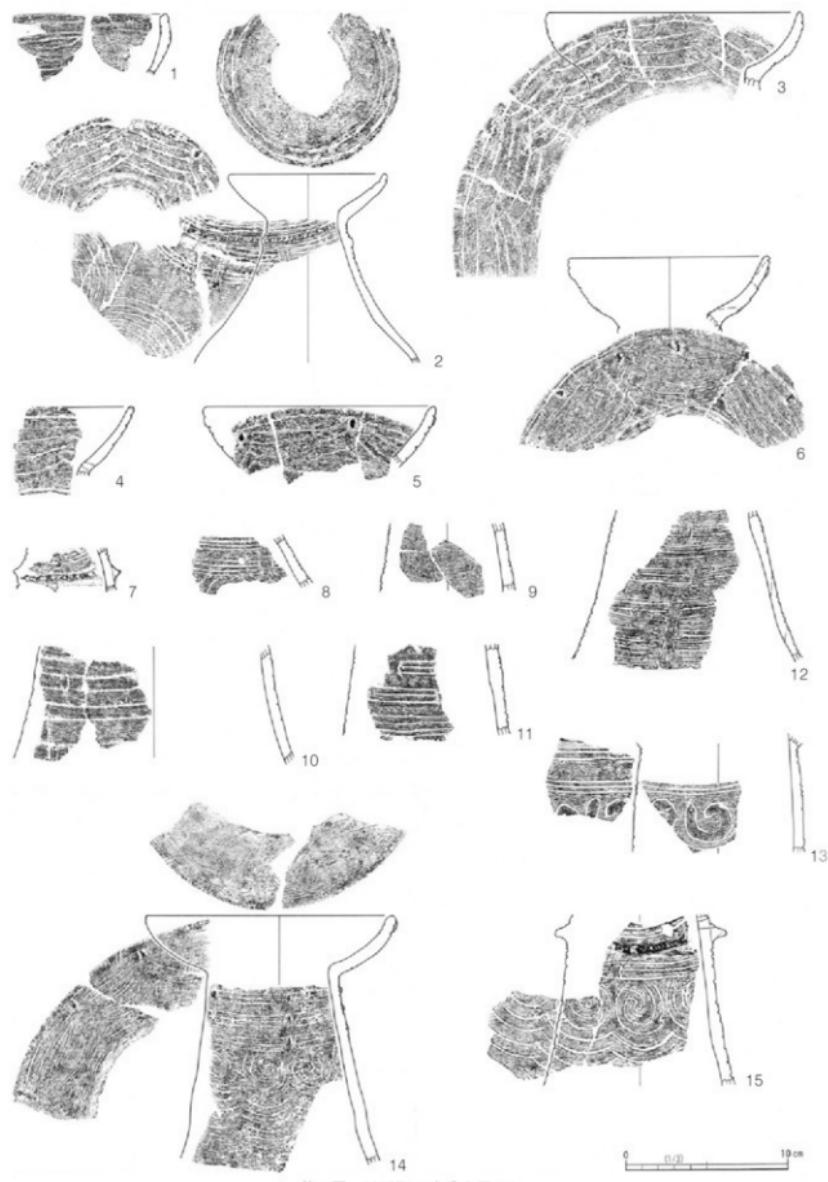
新潟砂丘上に立地する弥生時代中期後半から後期の遺跡では、北陸系土器と東北系土器が混在する状況を確認できること、関 雅之がすでに指摘している(関1971)。本遺跡のこの状況は、砂山遺跡をはじめ当該期の中曾根遺跡(青木ほか2006)・王子山遺跡(渡邊ほか2008)・石動遺跡(廣野1996)なども同様で、新潟県北部地域の普遍的な姿を示しているのであろう。

2 川原町口式系土器

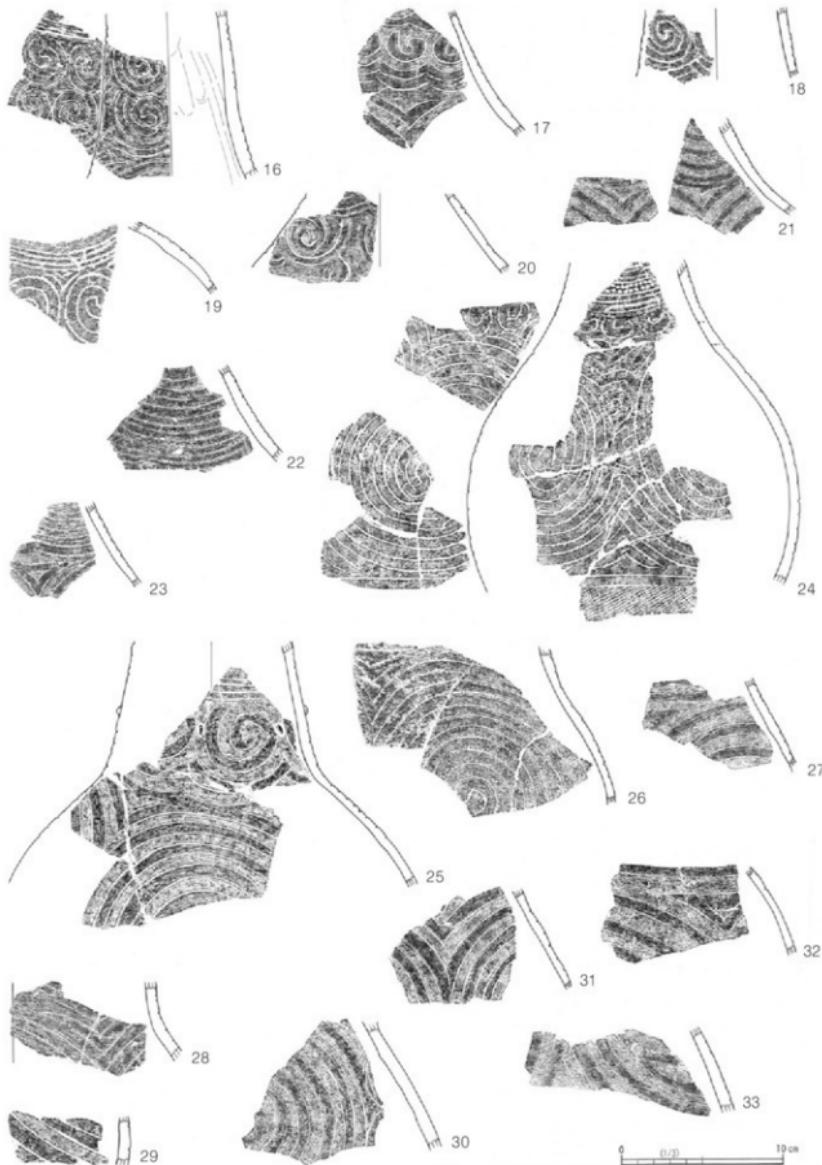
東北地方南部の弥生時代中期後半の土器と関連する一群を、本書では川原町口式系の土器と呼んでいる。該当資料のうち、文様モチーフを1条ずつ描く(範描き)精製の壺を第7図～第10図に、2条を同時に描く壺を第11・12図に掲げ、他の器種や底部などを第13図にまとめた。

(1) 1本描き手法の壺

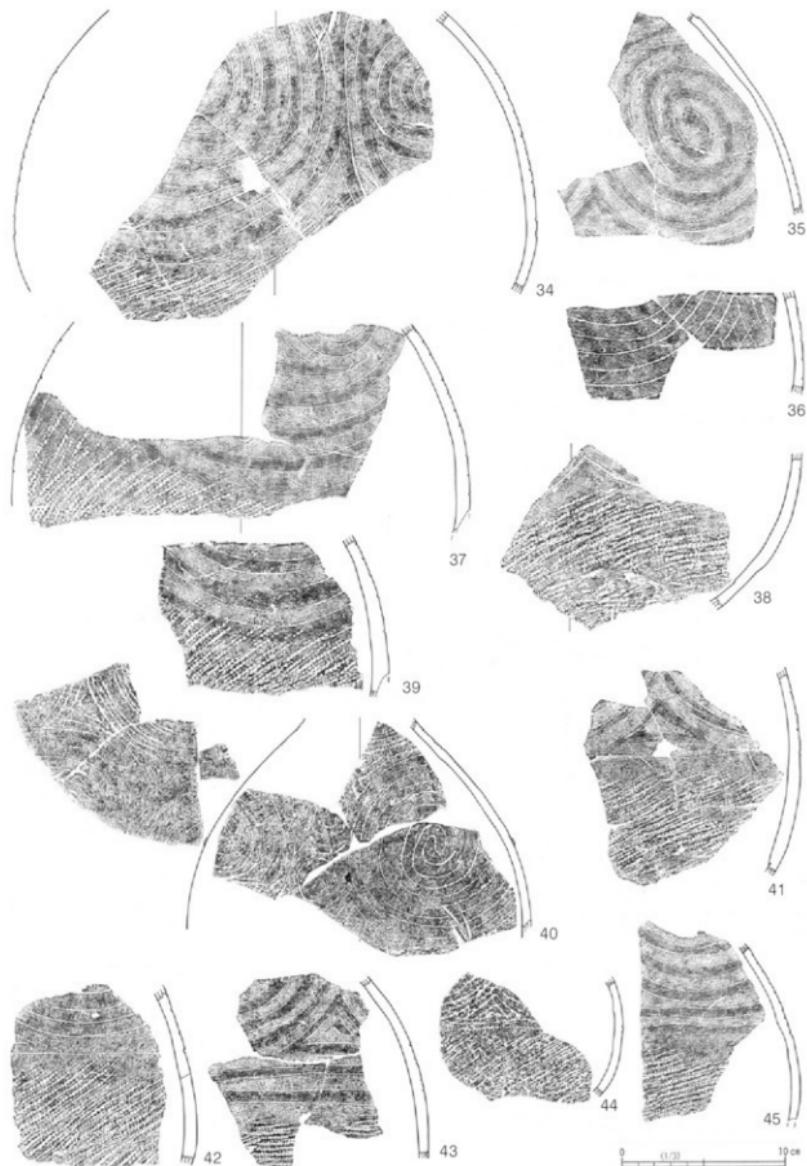
第7図1～6は口縁部の特徴が確認できる資料である。上方の1・2条横線の下を上開きの連弧文で飾るのが



第7図 川原町口式系土器(1)



第8図 川原町口式系土器(2)



第9図 川原町口式系土器 (3)

基本形で、1は「上弦重弧文」(鈴木2012)を作り出す。2は『聚成図録』のC11、「集成」の19で(表2、第4図)、両集成では胴部渦文の下の縄文部も表現されているが、現在は胴部渦文の上部までしか確認できない。口縁部に1条の横線文と4条の連弧文を配し、連弧文の頂点に瘤を付す。頭部は1条の突帯の下に、綫スリットを備えた横線文を置き、スリットの直下に瘤を付す。胴上半部には渦文を描く。1や2が口縁部内面に横線を描くのに対して、3～5はそれを欠く。5は連弧文間の空隙を三角文で填める。6は連弧文が5条に達し、瘤が連弧文の頂点間にも配置され、他との違いが甚しい。外面全面と内湾する口縁部内面を赤彩する。

7～18は長頭壺の頭部である。7はスリット文様に挟まれた突帯部分で、突帯の上に刻みを加え、スリット部分を丁寧にナデ消す。8～12はスリット文様を重ねたもので、スリット部を上下でずらす例と、綫に描える例とがある。前者は二ツ釜式と(中村1959)、後者は陣場式と共通するらしい(馬目ほか1971)。9は文様の描線が著しく細い。赤彩は全面に及び、塗り分けしたようではない。10は横線の間隔が広い。8や9と違ってスリットの位置をずらし、綫は綫にスリットの位置を描える。施文後、乾燥が不十分なうちにミガキを加えたらしく、描線の一部が消えている。11と比べて丁寧さに欠ける。10～12に赤彩の痕跡が残る。

13～18は頭部下半を渦文で飾る例で、13は上端の突帯の下に、無文帯の上下に横線3条、その下に小渦文帯を置く。14は口縁部にやや変容した上弦重弧文を描き、5と同様に空隙を三角文で填める。頭部との境を2条の横線文で画し、頭部の上部は、綫位置を描えた3段のスリット文様を配する。陣場式と同じく瘤をスリット部に付し、その下方は対応する単巻きの小渦文と、渦文を受けるように置いた8条の重連弧文で飾る。沈線内に赤色顔料が広く残るが、赤彩が沈線のみなのか、全面に赤彩したのが沈線内だけ残ったのか判断できない。口縁内部にもスリット文様が描かれる。15もまた対応する単巻の小渦文で飾った例で、突帯が張り出し、その上下を横線文で挟む。突帯は刻みを加え、渦文を4条の連弧文で受ける。第8図16は対応する渦文を2段重ね、渦文の内部は筋状にミガキをかける。渦文を受ける連弧文は、2条と少ない。沈線内に赤色の顔料が残る。17は半巻の小渦文を3条の連弧文が受けける。胴上半部の渦文と渦文との間に生じた肩部の空隙を、ハート形の文様で充填する。文様の内部に丁寧なミガキが残る。18も、単巻の渦文を連弧文が受けている。

19～23は壺の肩部で、19・20は短頭、21～23は長頭形であろう。19はスリットになるはずの部分をナデ消していない。20は弧文と2段の渦文で飾る。上の渦文は単巻、下は半巻であるらしい。赤彩しており、上半分は顔料が沈線の外にまで及ぶ。21は連弧文と渦文の1帯おきにミガキが加わるが、丁寧ではない。線間が狭いゆえか、筋状に引く程度にとどまる。23は赤彩の痕跡がある。

24は頭部から胴部にかけての文様構成がわかる例で、スリット文様が2段の刺突列を挟む。綫位置を描えてあるものの、スリット部はナデ消していない。肩部に半巻の小渦文を、胴部に大型の渦文を配する。胴部の渦文間に置かれたC字状の半巻渦文は、割り付けの空隙を充たす措置であろう。半巻渦文脇に瘤を付す。2条の横線文で装饰帯の下限を画すが、下半部の単巻LR繩文がはみ出た部分はナデ消されていない。25は、頭部中ほどに4条の横線文に弧線を架したスリット文様を置くが、スリット部はナデ消されない。その下方は単巻の小渦文で飾り、瘤を付して連結する。この小渦文を3条の連弧文で受け、胴部も大型の渦文で飾る。これらの渦文は、1帯おきに丁寧なミガキを加えて仕上げる。赤彩の形跡が頭部と肩部にみられる。

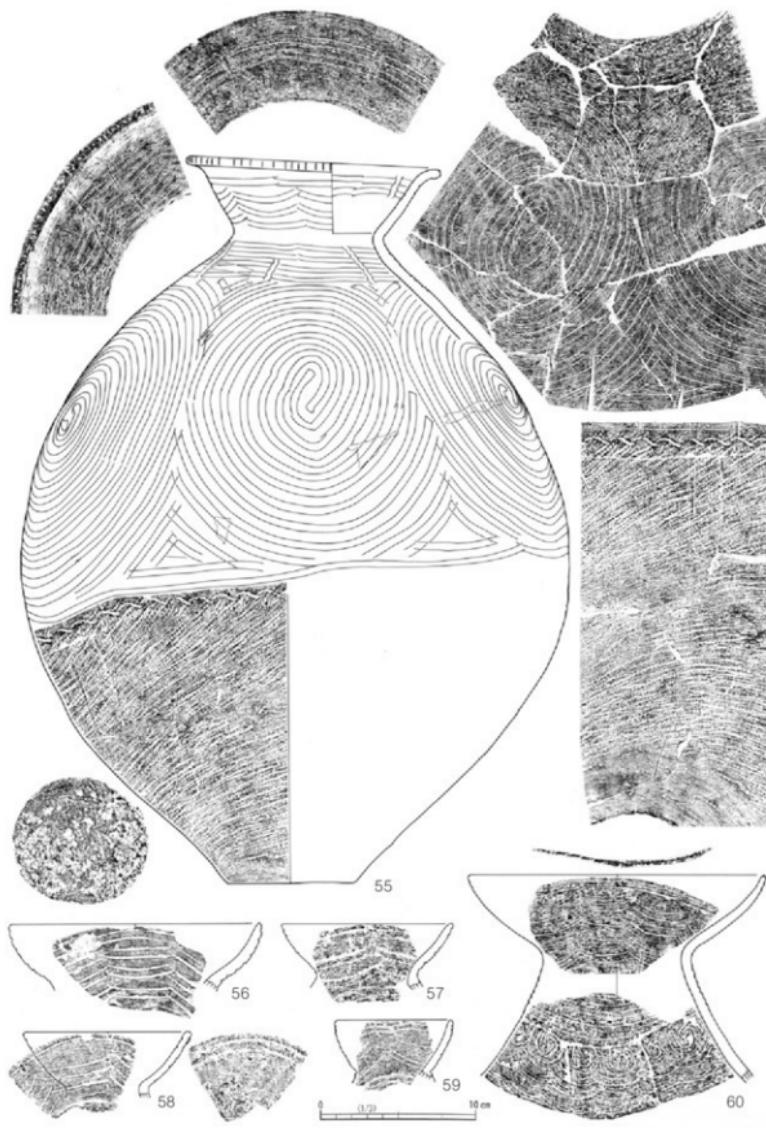
26～45は胴部に大型の渦文を描いた例を示した。1帯おきにミガキを施した例が多いが、その程度は一定でない。27は1帯おきのミガキが丁寧である。沈線内に赤彩の痕跡が残る。28もわずかに赤彩の痕跡がみとめられる。29はミガキと赤彩とを1帯おきに行うが、ミガキは線と線の間全面ではなく筋状を呈する。30も丁寧でなく、ミガキが隨所で線上を跨ぎ、文様の一部が消えてしまっている。沈線内に赤彩の痕跡が残る。31も筋状のミガキ。これに対して32は比較的丁寧なミガキで線間を充たす。渦文間に生じた上側の空隙を、ハート形文

様でなく重三角文で填めてあるのは珍しい。33は筋状のミガキ。第9図34・35は、1帯おきに丁寧なミガキで充たし、赤彩して仕上げる。このうち35は、一帯おきにミガキを施し、ミガキのない帯に赤彩を加えたことがよく観察できる。一方、37のミガキは筋状で、わずかに赤彩の痕跡がある。34と37～39の縄文原体は直前段多条である。40は短頸壺であろう。肩部に縦に描ったスリット文様を置く。胴部を渦文で飾り、瘤で連結する。41は渦文の間に生じる空隙部分で、丁寧なミガキで仕上げた重三角文を充たす。横線文1条で装飾帶下端を画し、やや間隔をあけて直前段多条の縄文を施す。文様部にわずかに赤彩の痕跡が残る。42もおそらく三角文を充填した例で、ミガキは比較的丁寧に行われる。43・44は渦文間三角文の内部に逆ハート形の文様を充たす。45は装飾帶を画する横線の条数が多い。以上のように、1条ずつ渦文を描く土器には、胴部の装飾帶の上下を横線文によって画する例と、そうでない例とがある。後者は二ツ釜式や陣場式と共に通する。

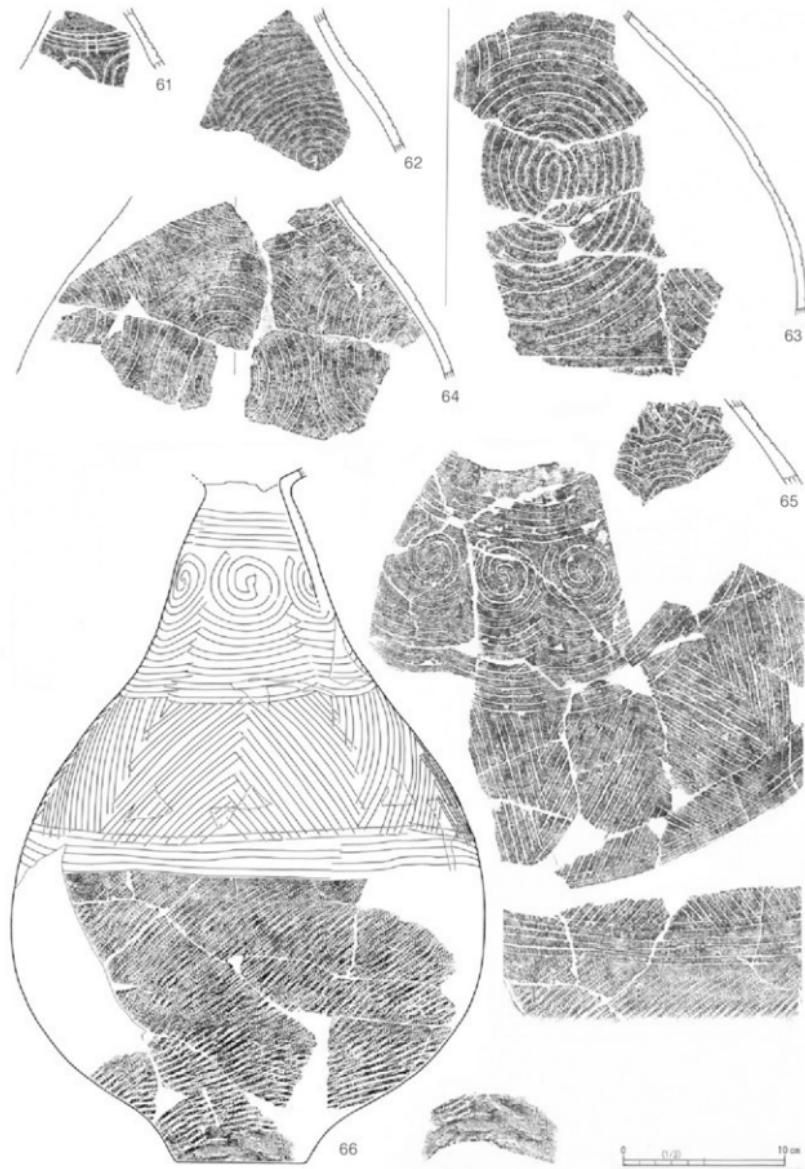
ここまで示してきた例の主たる文様が渦形を基調としていたものに対して、第10図に挙げたのは、菱形や三角



第10図 川原町口式系土器(4)



第11図 川原町口式系土器(5)



第12図 川原町口式系土器(6)

0 10 cm

など有角の文様からなる一群である。46は、中村五郎が山草荷1式として掲げた1例で(大木・中村 1970)、1本ずつの沈線で重菱形文を描き、1帯おきに丁寧なミガキを施す。横線文で装飾帶の上下限を区画し、装飾帶まではみ出した胴下半部のLR繩文はナデ消される。

47は、『聚成図録』のC 9、「集成」の22である(表2、第4図)。頭部上半に、位置をずらしたスリット文様、下半にJ字状の半巻小渦文を4段配する。3条の横線で頭部と胴部の境を画し、胴上部を重山形文、下部を直前段多条の繩文で飾る。スリットや小渦文はその内部に、重菱形文は1帯おきにそれぞれ調整を加えてあるが、しかしミガキでなく、指頭でなぞっただけにすぎない。器面が充分乾燥する前に行ったらしく、なぞった部分は凹み、文様の一部が消えてしまっている。これと赤彩とを1帯おきに施す。

48は短頭壺の口縁部から胴上半部で、口縁部を1条の横線文と4段の連弧文で、胴部を3条の横線文と重山形文でそれぞれ飾る。沈線はやや幅広く、浅い。ハケメをそのまま残しており、ナデやミガキで仕上げた痕跡はない。胴部と口唇部に単節LR繩文をまばらに転がした後に文様を描いたようである。49・50は重菱形文間に入れ込む重三角文であろう。49はモチーフに規制されることなく、全面をミガキで整える。他の例と違って、ガラス質の砂粒を多分に含む。51は重山形文の一部分で、1帯おきに丁寧なミガキを施す。52と53は横長の重菱形文を縱に重ねた同一の個体とみられ、53は上方に瘤をもつ。山形県の置賜盆地方面との関係が推測される例である(高桑ほか 2010)。54は、48と同一個体の例になろうか。

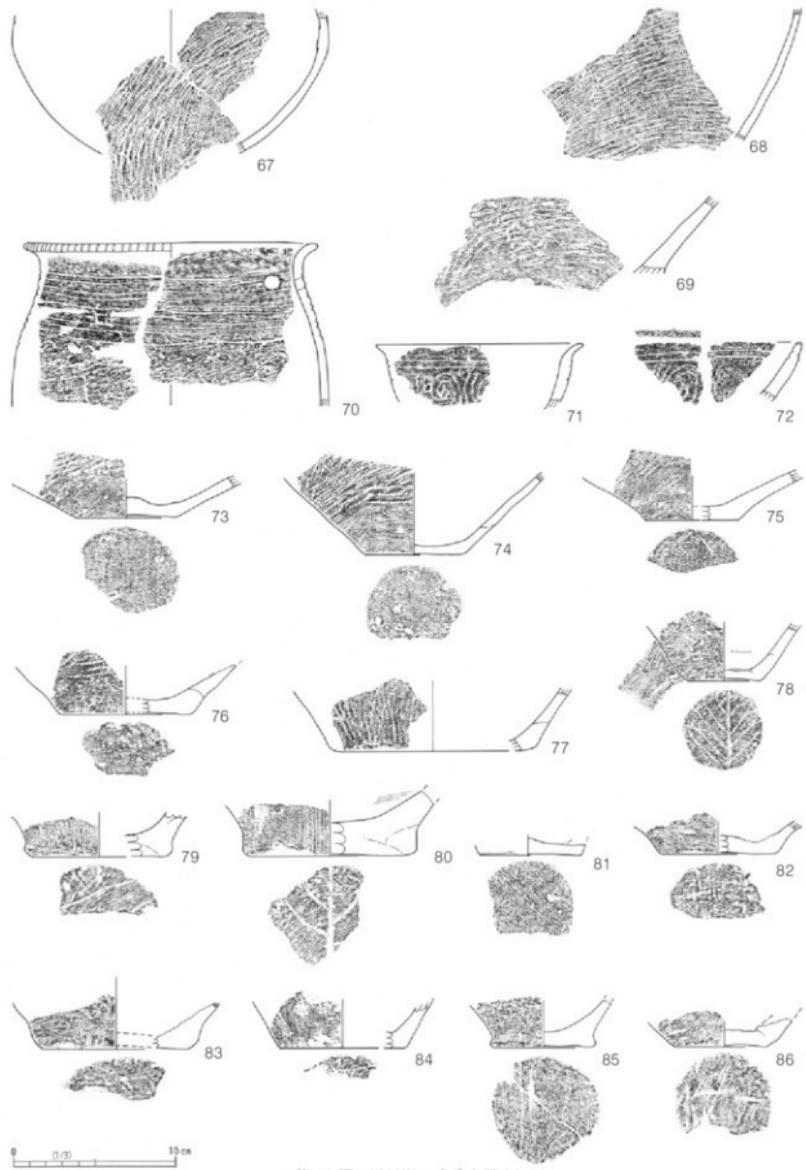
(2) 2本書き手法の一群

第11・12図に掲げたのは、沈線2本を同時に引いて文様を描く壺である。55は短頭の壺で、『聚成図録』のC12、「集成」の20である。口縁部は逆「八」の字に開いて突き出し、口唇部に刻みを加える。口縁部を2本×1段の横線文と2本×3段の重連弧文で飾り、肩部には継位置を描えた2本×4段のスリット文様を置く。同様のスリット文様を口縁部内にも施す。胴部には巻数の多い、込み入った渦文を描く。文様を1本の施工具で描き出す例では、渦文間に生じた上部の空隙をハート形の文様で充たす場合が多いが、本例では施工具の変更が影響してV字形に転じている。装飾帶下端を2本×1段の横線文とZ字状の結節文で画し、胴下半部を直前段多条の繩文で飾る。周辺の土器型式と同じく、繩文を底部付近までは施さない。

56～59は口縁部で、上端に2本×1段の横線文を配し、数段からなる重連弧文を重ねる。56は3段、57～59は2段の連弧文を重ね、58は連弧文の連結部に瘤を付す。59は口頭部境をも横線文で画し、かつ赤彩の痕跡がみとめられる。60は短頭の壺。口縁部は2本×1段の横線文と2本×5段の重連弧文で飾る。頭部は2本×4段の横線文に波線のスリットを架し、その下方に半巻の小渦文を配して、3段の重連弧文がそれを受けける。

第12図61～65は肩部・胴部の例で、61はスリット文様と小渦文の一部が残る。渦文の2線間とスリットのそれとは幅が等しく、一方スリットを架す4条の横線の沈線幅は狭い。その部分のみ異なる施工具を使ったと考えることも可能だが、1本目と3本目との、かつ2本目と4本目との間隔が他の部分のそれと一致している点をふまえると、先に引いた2線のうち1線を跨いで後の2線を引いた可能性も考えられてよい。62～64は渦文で飾った胴部片。渦文と渦文の間に生じる上下の空隙をV字形文様で充填する。62に赤彩の痕跡がみとめられる。65は肩部片。2段の山形文様と下開きの重連弧文3段を重ねている。ここまで掲げた例とは異質の構成で、系統が異なる可能性が高い。胎土中の金雲母が他と違ってことさら目立つのも、この推測を後押すする。

66は『聚成図録』のC10、「集成」の21である。両集成図では大きく外反する口縁部が描かれるが、現在はそれを確認できない。遺存状態のよい長頸の壺で、重心が胴下半部にある。頭部はスリットのない2本×3段の横線文と単巻の小渦文を配し、6段の重連弧文がそれを受けける。最下段の緩い連弧文が頭胴部の境を画する役割を担い¹¹⁾、胴部の重山形文がそのまま続く。重山形文は、長い斜線を先に描いたのちに中を充たしたようで、山形



第13図 川原町口式系土器(7)

に歪みや偏りはみられない。装飾帯の下限を $2\text{本} \times 3\text{段}$ の横線文で画す。胴下半部は直前段多条の縄文で飾る。第13図67~69は胴下半部で、67・68は2段反撫の縄。69も同様の可能性が高いが、器面が荒れていて詳らかでない。

70は壺で、東北地方南部では多く伴うが本遺跡では出現率がきわめて低く（中村 1959、大木・中村 1970）、図示できたのはこの1例にすぎない。口唇部に刺込みを加え、頭部を $2\text{本} \times 5\text{段}$ の横線文で飾る。2個一对の孔を、相対する2箇所に配する。横線文の直下にZ字状の結節文を配するのは、55と共通する特徴である。地文は2段反撫か。71は鉢。65と同じく胎土中の金雲母が目立つ。口縁部をヨコナデして、頭部に2本描きの横線文を配し、以下を小渦文で飾る。72は渦文内を赤彩した高杯。1本描きか2本同時施文かの判断が難しい。福島県大沼郡会津美里町油田遺跡に同種の例がみられる（中村ほか 2011）。

73~86は底部片。厳密な「川原町口式系」の根拠があつて選び出したわけではない。ただし、底部が厚く、外側がハケ整形の79・80は小松式系かもしれない。77が底部付近まで縄文を充たすが、空白を設ける例が多い（大木・中村 1970）。底面は布目（73・75・76・81・82・83）、本業（78・80・84・85）、笊業（79・86）がある。福島県域の場合と違つて（中村 1993）、布目ばかりでない。

（3）型式学的検討

さて、ここまで述べてきた土器群の型式学的検討は、戦前に越後A様式を設定した小林行雄以来の蓄積がある。戦後、東北南部の弥生土器編年に着手した中村五郎は、会津若松市神指町二ツ釜遺跡や同市湯川町川原町口遺跡の土器と、山草荷遺跡の土器との違いを気に掛けている（中村 1955・1959、中村・穴沢 1958）。そうして、「弥生式聚成図録に掲載された山草荷遺跡の土器を二ツ釜・川原町口遺跡と比較して奇異に感じるのは、壺形土器が会津盆地の二遺跡の例と大差がないに対し、壺形土器が全く異なっている事である。今後詳しく述べる心算で居るが、壺形土器は二ツ釜・川原町口両遺跡のいずれかと平行した時期のものであり、壺形土器等はその直後、弥生式後期初頭のもので、石川県小松出土土器と間違を持つものでないかと考えて居る」（中村 1959）と述べ、違いの要因を山草荷遺跡における器種間の年代差に求めた。

この器種間の年代差は、山草荷遺跡出土土器の実査を経て1970年に山草荷1式と2式と具体化された（大木・中村 1970）²⁾。本節でとりあげてきた一群はこの1式に相当する。特に、「南御山2式に後続する二ツ釜・川原町口・天ヶの3時期のうち、山草荷1式は川原町口式とほとんど同一の内容の型式と思われる」という発言は、その後に大きな影響を残した。川原町口式を提唱し、かつ山草荷遺跡出土品を実査した中村によるこの発言が、以後の山草荷式土器研究の基調となる。

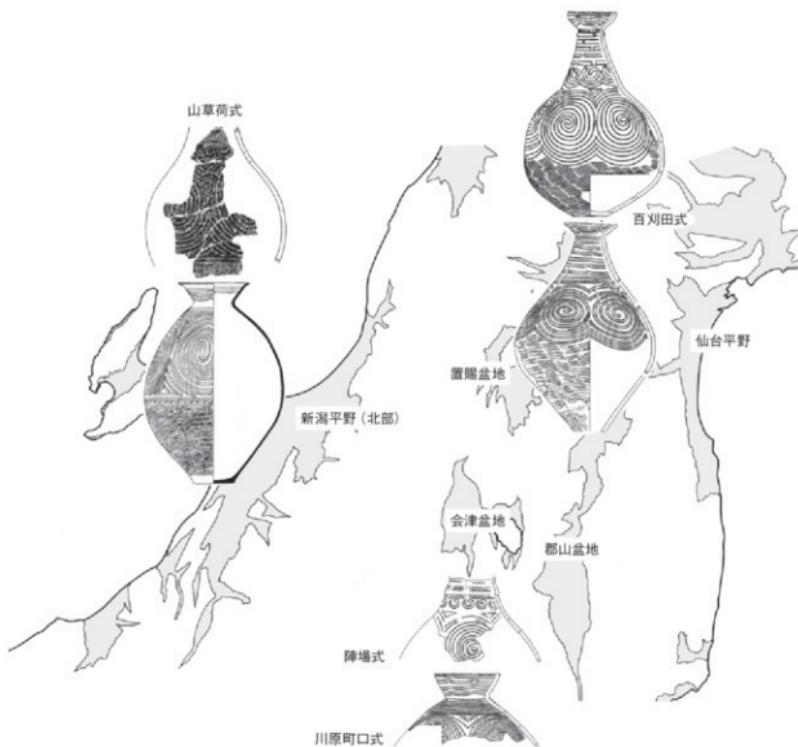
資料の蓄積が新潟県側で進まなかった（関 1971）一方で、福島県側ではこの種の土器が次々に報告されていった（小瀧・皆川 1963、梅宮ほか 1969、馬目ほか 1971、須藤 1972など）。そうして、違いの意味を尊重した丁寧な検討が馬目順一の手で推進され、【二ツ釜】→本宮市荒井【陣場】→会津若松市神指町【いたみ堂】→安達郡大玉村【下高野】→【川原町口】の序列が提案される（馬目 1978）。そのうえで馬目もまた、「福島県会津における川原町口遺跡の土器」は「越後A様式、すなわち山草荷式土器の壺に酷似する」と評し、「山草荷式土器＝川原町口式土器」と表現する。このようにして山草荷式をめぐる説得力のある発言は、ほとんどの場合に福島側から投げかけられた。しかし、他の型式と内容を異にした、一定の形態と装飾を持っていなければ、土器型式とは言い得ない。研究が進み、前後の姿も明らかになっている土器型式とイコールで結ばれたことで、何を山草荷式と呼ぶのか、山草荷式存立の意義がどこにあるかに、議論は進んでいく（石川 2004）。

これに対して、山草荷式＝川原町口式という前提に立ち返って異を唱えたのは鈴木正博であった（鈴木 2012）。『聚成図録』や『集成』に掲載され、中村の山草荷1式の標式になっている壺4例を、

山草荷（古）式・・・『聚成図録』C11／『集成』19／本書第7図2

	山草荷(初)式	山草荷(古)式	山草荷(中)式	山草荷(新)式	内野手
有角					
渦文					

第14図 山草荷式の細別（縮尺不同）



第15図 山草荷式と隣接する土器型式

- (中) 式・・・『聚成図録』C 9 ／『集成』22／本書第10図47
- (新) 式・・・『聚成図録』C12・10／『集成』20・21／本書第11図55・第12図66

の3段階に細別し、各段階を【陣場(古・新)式】→【川原町口1式】→【川原町口2式】という福島方面の変遷とそれぞれ対置させたのである。加えて、三条市大字上野原内野手遺跡の方形周溝墓北溝出土品(金子 1999)を、山草荷式に連なる「(内野手)」階段として、(新)式直後に位置づけた(鈴木 2014b)。

鈴木の検討結果をふまえれば、本節で行わなければならぬ作業は、

①菱形土器の変遷過程の検証

②山草荷式=川原町口式説と、山草荷式≠川原町口式説の正否判定

の2点に自ずと集約される。ところが、本節で総覽してきた「川原町口式系」の諸例がどのように出土したか等々の基本情報は、残念ながら明らかでない。そこで一旦、山草荷遺跡を離れ、遺構出土品である内野手遺跡例に眼を転じると、2線を同時に刻んで溝文を描いた短頭壺と、同じようにして重山形文を描いた短頭壺の出土が知られる(第14図)。2種の文様の併存が、ひとまず確かめられるわけである。

あらためて山草荷遺跡に立ち返り、同時に刻む2本書きの土器を見直すと(第11・12図)、やはり同じようにして溝文と山形文との両種が存在するのをみてとれる。山草荷(新)式とされた2例はその代表と言え、これらと内野手遺跡の出土品との比較から、変遷過程の検証を始めていこう。

溝文土器の違いは明瞭である。山草荷例(55)が溝文をスリット文様の下方に配するのに対して、内野手例ではスリット文様と溝文の施文部分が重なりをみせる。スリットを架す横線文の条数も違って、山草荷例が2本×4段の8条を施す一方、内野手例では2本×6段+1条の計13条に及ぶ。横線の多条化は内野手遺跡の山形文土器でも観察され、同土器では2本×10段の20条に達しているから、この現象は山草荷遺跡以後の方向性と受け取って差し支えない。

もう1点注意を引くのは、口縁部文様の動向である。山草荷例(55)は、2本×1段の横線文と2本×3段の重連弧文で飾る。内野手遺跡の溝文土器ではこの構成が継承されるが、山形文土器の場合は1段目の連弧文の内部にさらに弧文を加えてある。また、瘤が2個一対になり、あるいは横線文の上に飛び出し、配置が規則的でなくなっていて、これは山草荷遺跡でみあたらない。いざれにせよ、山草荷遺跡の諸例より新しいらしい一括資料において、溝文と、菱形や三角など有角文様との2種があり、それは山草荷遺跡の諸例に先行する二ツ釜式においても同様である(芳賀ほか 1988)。したがって、その中間の山草荷遺跡において両種が始終併存していたであろうことは、ほぼ確実とみてよい。

さて、2本書きの一群の成立を考えるうえで、鈴木が山草荷(中)式と定めた47の菱形文土器は、確かに母体の最有力候補である。1本書き・2本書きという違いがあるものの、頭部のかなり高い位置にまで溝文が進出するなど、構造上の共通性がみうけられるからであるが、しかし工具の本数だけが異なっているわけではない。すなわち、胴部の装飾帯の下限を、47では2条の横線文のみで画するのに対して、55ではこれに結節文が加わり、他方66では3段6条に増す。残念ながら内野手遺跡の例ではその部分が観察できないが、さらに新しい阿賀野市大字熊居狐塚遺跡例で区画文の多条化を確認できる(佐藤ほか 2009)。

そうして47の文様の仕上げが、一帯おきに指頭でなぞるのみで、工程の簡略化が図られている点をふまえれば、さらに先行する段階の存在を考えられてよく、中村が山草荷1式の標式として例示した46の菱形文土器は、その候補として最もふさわしい。両者の相違として、指でなぞったか、丁寧にミガキを行ったかが眼を引くが、菱形と菱形と挟まれた部分にも注目すると、46が上下の対向する三角文で充填するのに対して、省力化がみとめられる47は対向するV字を挟む。これを、【1本書き・三角充填】→【1本書き・V字充填】→【2本書き・V字

メイン＝山形文】の順に推移するとみれば、型式学的に理解しやすく、前後の土器型式とも調和的である。

他方、これらと組み合う溝文土器には、どのような違いがみてとれるだろうか。陣場式との比較を通じて鈴木が着目したのは、長頸壺における溝文の上方進出であった。すなわち、47や66は、頸部のかなり高い位置まで溝文が進出する一方、山草荷(古)式とされた2は、同じ器種であっても、頸部に溝文がみあたらない。しかしこれだけでは、いささか唐突な印象を受ける。

24の溝文土器はこの中間に位置する好例で、肩部に小溝文が進出する。2ではスリット文様が突帯を挟むが、24ではナデ消しを省略し、弧線化したスリットが刺突列を挟むように転じている。したがって、【1本描き・溝文未進出】→【1本描き・肩部進出】と整理でき、次いで47の菱形文土器と同様に【1本描き・頸部進出】した14のような例が続くとみてよい。

加えて、溝文の空隙部分に眼をやれば、三角形を形成せず、逆V字形に下方が開放されている点に気がつく。2がこの部分を欠く点に憾みが残るが(第7図)。しかし、有角文様の場合における【1本描き・三角充填】→【1本描き・V字充填】の変化を参照するならば、【三角充填】した菱形文土器46の位置は、少なくともすでに【V字充填】に転じた溝文土器24よりも前に位置をあたえておくのが、今は穩当なところであろう³⁾。以上から、山草荷遺跡の「川原町口式系」の土器は、

<有角> 【二ツ釜】 → 46 → → 47 → 66 → 【内野手】

<溝文> 【二ツ釜】 → 2 → 24 → (14) → 55 → 【内野手】

の4段階の推移として把握することができるであろう。それぞれ山草荷(初)・(古)・(中)・(新)式と呼んでおこう(第14図)。東北地方南部の土器型式(鈴木編年:鈴木 2012・2014)とは

【山草荷(初)】 → 【山草荷(古)】 → 【山草荷(中)】 → 【山草荷(新)】

【陣場(古)】 → 【陣場(新)】 → 【川原町口1】 → 【川原町口2】

という対比関係で整理される。このうち山草荷(古)・(初)式と陣場式には共通点があり、(中)・(新)式と川原町口式にも共通する点はある。しかし、2条の横線文を基本の単位として胴部上・下半を画するのは、古くから指摘されてきたように山草荷式特有の特徴である(馬目ほか 1971、馬目 1978)し、V字充填の発達は川原町口式との著しい違いである。瘤によって溝文を連結することはあっても、例えば会津若松市いたみ堂遺跡例(小瀧ほか 1963)や、川原町口遺跡例(中村ほか 1958)など会津地方の土器型式でみられるような横スリットでは決してそれを行わない。

以上により、中村の「山草荷1式」は、馬目の「陣場式」を土台とした鈴木の3段階細別を経て、4段階の小細別に到る。この土器群は、陣場式と共通の母体を持ちながらも、陣場式とも、かつ、同式に後続する川原町口式とも異なる独自の変遷を辿った。この個性ある軌道を山草荷式と呼ぶ。

1) この区画の作法が、三条市内野手遺跡の溝文土器に継承されている(第14図、金子 1999)。

2) 細別型式名の初出は、中村・高橋(1960)である。

3) 菱形文土器46に後続し、溝文土器24に先行する例として、長岡市寺泊小豆曾根草庵遺跡例が候補にのぼる(加藤ほか 2011)。

3 宇津ノ台式土器

(1) 宇津ノ台式土器の特徴 山草荷遺跡では、秋田県域など東北地方日本海側に分布する宇津ノ台式土器、およびその系統の土器群が明瞭である。宇津ノ台式出土土器を詳細に検討した須藤隆は、磨消繩文が顯著なⅠ群土器と、文様構図を描くのに磨消繩文手法がない沈線による文様構図が目立つⅡ群土器に二分した(須藤1970)が、本遺跡の土器群はこのⅡ群土器と共通する特徴がある。

須藤は宇津ノ台式Ⅱ群土器と分類した資料の代表例を第16図に抜粋・掲示した。須藤のⅡ群土器は、各種沈線文図形を描くB類(第16図1~14)・J類(15~20・23)と、ハケ調整が顯著で北陸地域との関係が強いC・D類(21・22)を含む(須藤1970)。山草荷遺跡出土土器を見る前に、宇津ノ台式Ⅱ群土器の特徴を確認しておく。

器種は、壺(1~3)、鉢(4~9)、高杯(10)、蓋(11~14)、甕(15~20・23)で、甕が多い。壺は、肩部の破片のみで、全形は不詳である。鉢は、仙台平野の楕円形開口式などと似た器形と文様の4や、7のような甕を小形化したものがある。蓋も楕円形開口式に似る台付鉢を伏せた形のもの(第16図11~13)と、円板状のもの(14)がある。甕は、口縁部が筒形の頭部から屈折して強く外傾し、内面に明瞭な稜がつくれられる(15・16・18)。頭部から胴部へ移行する部分も、口縁部はほどではないが屈折し、胴上部がゆるやかに張る。

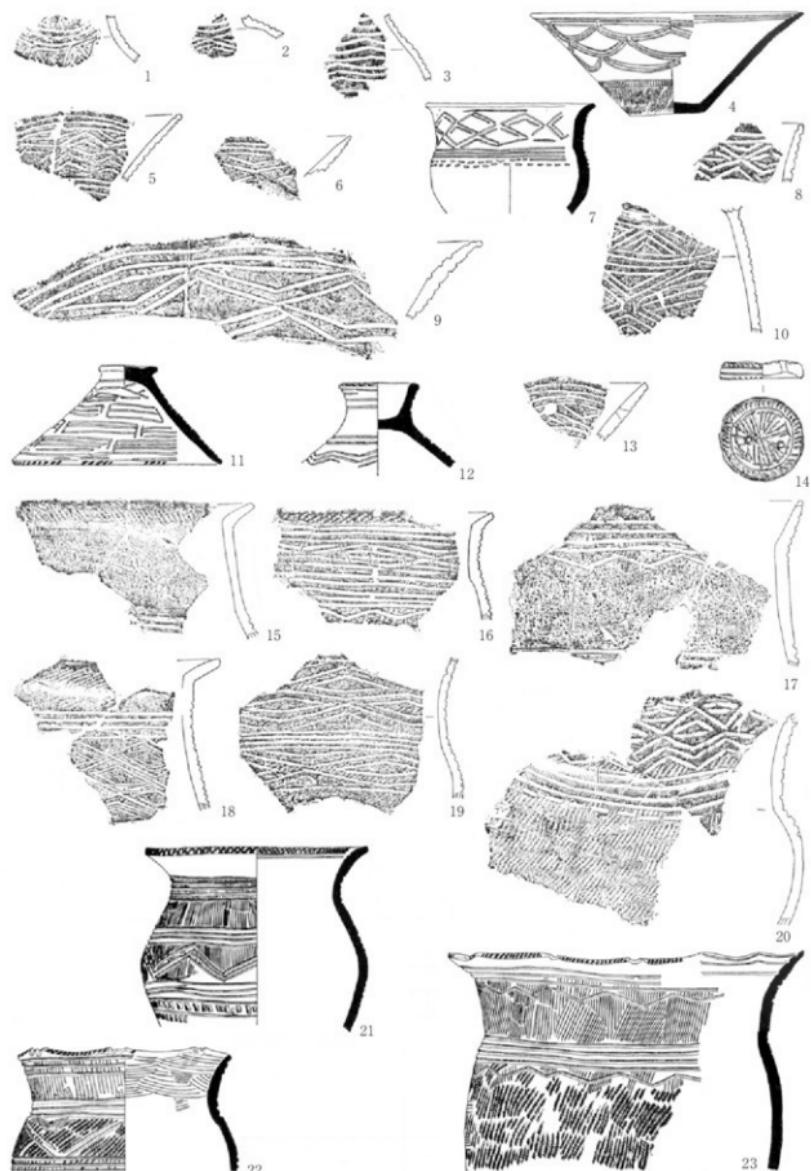
文様帶配置は器種によって異なるが、文様は共通する部分が多い。鉢や蓋では、外面に幅広い文様帯が設けられ、文様帯の上下を1~数条の沈線で区画して、菱形文(5~9)や連弧文(4)、連続山形文(12・13)・矩形文(11)が施す。内面文横帯として1~数条の横線を入れる例もある(4・5・8・9)。甕では、口縁内外面・頭部を主な文様帯とする。口縁部は外面(17・21~23)と内面(19・20・23)に沈線数条を施すものと、外面に繩文を施しただけの例(15・16・18)がある。このうち口縁部に文様帯を置くものでは、口縁端部に繩文を施し、波状口縁の波頂部を刻む例(22・23)もある。頭部は、文様帯とするもの(16~20・23)と無文のもの(15・22)がある。頭部を文様帯とするものは、全面を重菱形文で充たす(16~20)か、上部の文様帶区画線の下に1条の連続山形文を添える(17・23)。19は、頭部文様帯の重菱形文と同じ装飾の帯が、胴上部にも配置されるまれな例である。その他、頭部文様帯の下を区画する数条の沈線文の下に連続山形文(16・23)や点列(20)を添える例があり、後者の点列は須藤が鉢に分類した7にも認められ、7が甕を小型化したものだということが分かる。

器面調整はナデが主であるが、ハケメを頭部周辺(17・21~23)と内面(22)に施す一群も明瞭である。繩文はLRの斜め回転施文が多数を占めるが、条が重層する傾向をもつもの(16・20・23)があることや、弥生時代後期の砂山式や天王山式で主流となるRLが散見されること(15)は注意を要する。

須藤が、北陸地域との関連を指摘したC類は21、D類は22である。須藤は、ハケメ調整が顯著な点は北陸北部地域との関係性が強いと指摘し、C・D類を本来の宇津ノ台式Ⅱ群(B・J類)と区別した。しかし、J類との口縁内面へのハケ手法の共通点から、C・D類も大きな括りでは宇津ノ台式Ⅱ群の範疇に含まれるとした。

21と22の器形と文様帶・文様を確認しよう。21は、頭部が筒形ではなく滑らかに外反するため、文様帶配置も上記の宇津ノ台式の特徴とは異なる。上下を沈線4~5条で区画する帯を2帯重ね、上の帯は無文とする一方、下の帯は3条の沈線による連続山形文を充填しており。装飾性の高い帯が胴部最大径の位置にくる。同様の実例は19にもあるが、一般的ではない。21の口縁端面と口縁内面に沈線による斜格子文が施される文様は、小松式に由来する。22は器形と文様帶配置は上記の宇津ノ台式と共に多いが、頭部から口縁部へと屈折せず滑らかに移行する点と、21と同様に胴部上部に装飾的な文様帯が配置される点は異なる。

須藤は、宇津ノ台式Ⅱ群土器は、東北北部の田舎館式土器や志賀沢式土器との関連性があり、東北南部と関連するⅠ群土器より若干新しいと判断した。山草荷遺跡では北陸系土器との関係も窺えることを指摘した。



第16図 宇津ノ台式II群土器（出典：須藤1970）

(2) 山草荷遺跡出土土器の特徴 以上の点を踏まえて、宇津ノ台式土器ととかわる本遺跡の土器を検討する。本遺跡の宇津ノ台式は、すでに中村五郎が山草荷2式として詳細に検討している(大木・中村1970)。ただし、中村は座布団に縫じられた状態で観察・拓本・実測するなどの制約があったことにも留意が必要である。今回の作業では、誤った接合を外し、施工具・繩文原体・調整工具、胎土内の砂粒の大きさの異同から個体識別を行った。中村論文掲載図との対応は、中村論文第1図12-13が本書第18図116の頭部、中村第1図15は本書第17図90の一部と未掲載の同一個体、中村第1図16は、本書第17図94と103が誤接合されたものである。他に、中村論文の11・17・24が本書の109・92・105である。器種は、壺・壺・蓋があるので、器種ごとに特徴を確認する。

壺(第17図87～108、第18図109～113)

器形は、頭部が筒形を呈するが宇津ノ台遺跡ほど直線的ではなく、外反する口縁部との境の屈折も弱く、内面の棱も不明瞭である。頭部から胴部への移行も宇津ノ台遺跡に比べると滑らかで、胴部も膨らむ傾向がある。

文様帶は、口縁内・外面、頭部、胴上部に配置される。口縁部文様帶では、口縁端部に刻み(87)、繩文(88～90・103)、沈線(91)が施される。口縁部外面は、繩文施文のみ(89・103・106)か無文のもの(87・88・90)と、沈線2条の下に鋸歯文の装飾を施すもの(92)がある。口縁内面には、連弧文(90)、沈線1条(89)、連弧文の下を沈線で画すもの(88)、押圧列(91)がある。

頭部文様帶は、上下を数条の沈線か櫛描き直線で区画し、その中に鋸歯文や連続山形文と直線文を施すもの(87・93・101)と菱形文を充填するものの2群がある。菱形文の構図は、沈線1条で輪郭を描く単純な菱形文(97・105)と、菱形が入れ子状になる重菱形文があり、重菱形文は、比較的太めの沈線で描かれた大ぶりでやや乱雑なもの(88・90・94・96)と、沈線が細めで菱形が明確なもの(103・106～108)がある。さらに、細線による重菱形文では、菱形の頂点で描線が反転する例(107・108)がみられる。頭部文様帶の下を区画する部位は、数条の沈線だけの例が多いが、105・109では沈線間に横長の刺突列が充填されている。

頭部文様帶の下に連弧文や連続山形文・鋸歯文・波状文を添える例(94・95・102・104・105・110)が目立つ。また、頭部文様帶と胴部文様は明確に区分される例が多いが、頭部の筒形が失われた器形では、胴部が文様帶になる例(100)や、頭部から胴部まで数条の直線文と連弧文が重ねられるもの(104)がみられる。

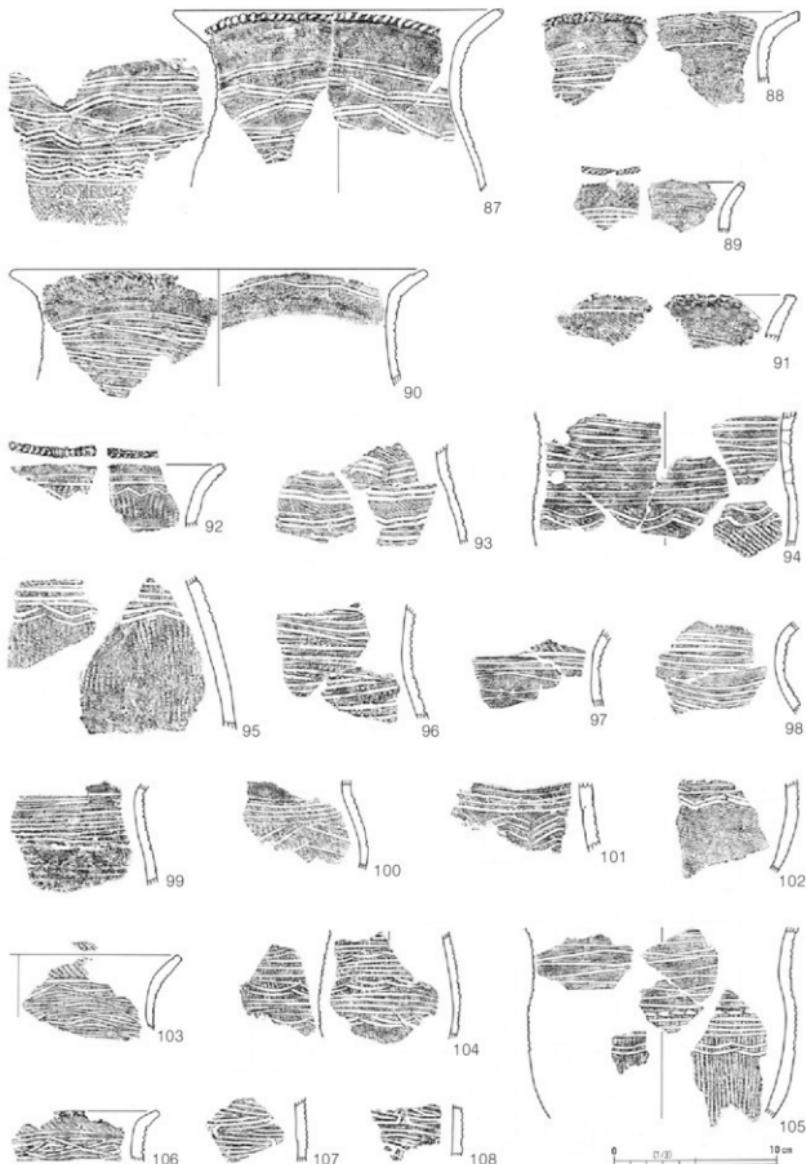
文様の施文は、ヘラ状具による1本描き(88～90・92・94～100・103～105)と2・3条の同時施文・櫛描き手法(87・93・101・102・109)。ヘラ描施文具には、先端が丸く、比較的浅く線が施されるもの(94・95・107)と、先端が鋭く、線が深く描かれるもの(88・89・99など)がある。

繩文原体は、土器の系統を考える際の重要な指標で、東北南部では繩文晩期以来L Rがほとんどであるが、東青森以北ではR Lしが卓越する。山草荷遺跡の宇津ノ台式ではL R(88・89)よりもR L(92・94～96・103・106・110)が多い。92・95・96のように条が縱走するのも北方に由来する手法である。外面調整では、ハケ調整もしくはハケ調整後のナデ調整が明瞭(87～91・93・102・104・105・109・110)で、胴部にハケメが縱走する105は繩文R Lの条縱走と類似する。内面調整は、口縁部から頭部にかけて横ハケを整然と施すものが多く、胴部から底部まではナデ調整を基本とする。ハケ調整用の工具は、北陸系土器と比べると条線間が広い傾向がある。

壺(第18図114～117)

例数は少ないが胴部はいずれも球形で、頭部から口縁が外反するもの(114～116)と無頭壺(117)がある。

文様帶の規則性は不詳である。114～116から頭部の上下に文様帶区画線、116・117から胴上部に幅広い文様帶があることが分かる。各文様帶の区画部位にヘラや櫛描きで数条の直線を描き、その下に波状文や鋸歯文(115～117)を添えるほか、117は大ぶりの圓形が描かれる。116はL RにLを巻き付けた付加条繩文で、むしろ川原町口式などに一般的な原体である。施文はヘラ描き(116)、2本描き(114・115)、櫛描き(117)の3種がある。



第17図 宇津ノ台式土器(1)

器面調整では、外面の調整として、縦ハケを残すものと、ハケ調整の後にナデ調整を施すものが認められる。内面調整は、横ハケ調整(114)とナデ調整(114～117)である。

蓋(第18図118)

器形は、つまみ部が上から押しつぶされたように周囲にはみ出し、体部は山笠状に緩やかに湾曲する。器面調整は、外面はハケ調整の後に軽いミガキ、内面はナデ調整である。体部外面全面に2本描きによる文様が施される。体部下端と上部に横線区画線を置き、そのつまみ側に連続山形文(鋸歯文)、体部に乱雜な斜線を重ね、一部は緩く蛇行する横線となる。口端には刻み列が認められる。

(3) 宇津ノ台式と山草荷遺跡 以上、山草荷遺跡の宇津ノ台式について、器種の構成、文様帶構成、文様構図や施文法の特徴、調整手法を確認したので、次に、型式学的特徴の要点を確認し、その特色や編年観を確認したい。ただし、宇津ノ台式土器は、秋田県域とその周辺に分布する弥生時代中期後半の土器型式であるが、宇津ノ台遺跡以外にまとまった資料が乏しく、その全体像や時・空の差異に関する検討はまだ極めて不十分である。

本遺跡で出土した宇津ノ台式関連資料は、須藤が宇津ノ台遺跡でB・J類としたと関連する土器群と、宇津ノ台遺跡でC・D類とした北陸・小松式土器系統のハケメ調整・器形・文様要素を合わせても土器群からなる。それぞれを1類・2類とする。

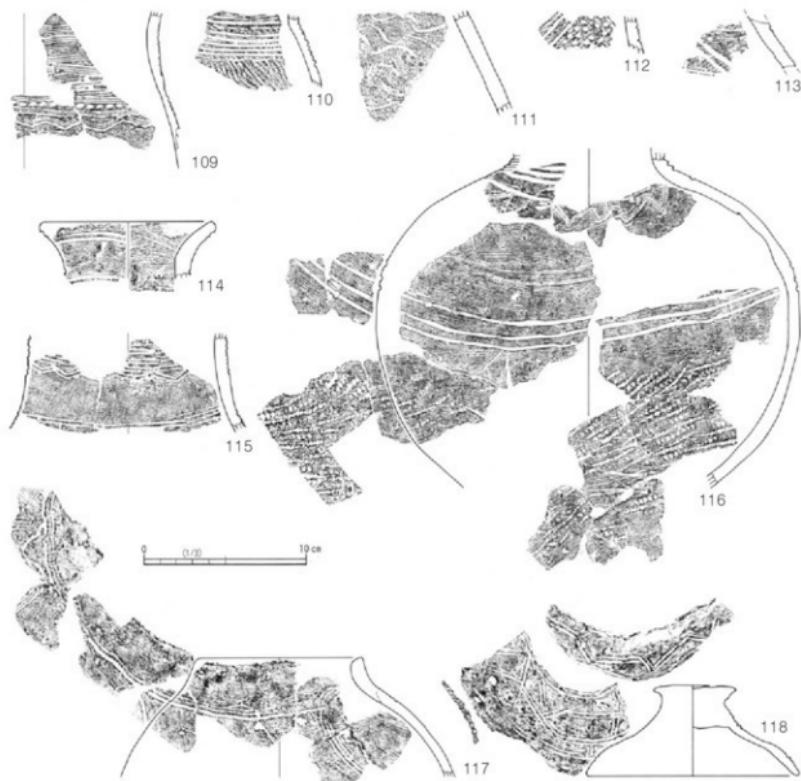
1類(第17図88～90・92・94・99・103～105) 基本的には器面調整にハケメは採用せず、宇津ノ台式と同様、要是頭部が筒形を呈する傾向があり、頭部を中心に、沈線1本描きで各種文様を施す一群である。口頭部の屈曲は宇津ノ台遺跡より不明瞭だが、内面にかろうじて軽い稜をもつ(88～90・97～99・106)。もっとも装飾性ある文様帶である頭部は、菱形文や重菱形文が顕著である。その描線と構図の相関をみてみると、やや太めの沈線を用いて頭部に大ぶりの菱形・重菱形文を描く一群(a群:88～90・94～96・98・99・104)と、やや細い沈線で、頭部に菱形文(97・105)や重菱形文(103・106～108)を描く一群(b群)からなる。口縁部破片で、細めの沈線で鋸歯文を描く92は、頭部文様の如何にかかわらずb類に属す。亮がほとんどである。

2類(第17図87・91・93・101・102・109・114～118) 器面調整にハケメを用い、文様を描くのに2・3条を同時に描く櫛描文に通じる手法を採用した土器群である。これらのハケ調整や櫛描き手法は北陸の小松式土器の土器製作技術を採用したものと考えられる。宇津ノ台式土器は、主に秋田県域で形成された土器型式であるが、秋田県域で本格的にハケ調整が採用されるのは中期前葉の横長根A式からであり、ハケ調整自体は中期前葉以西の秋田県域の器面調整技法とみなすことは可能である。なので、ハケ調整をもなながら1類と同様の沈線描出法をとる104や竪描きで多条の沈線文中に横長の点列を入れる110は、横長根A式以来の伝統で理解することは可能である。しかし文様を櫛描きで表現する手法は、小松式土器が新潟方面に進出しない限り出現し得ない。秋田県宇津ノ台遺跡に櫛描き手法は認められないが、第16図21の口縁端部と口縁内面に間隔が密な斜格子文は、小松式土器の影響がなくては理解できないから、山草荷遺跡の2類と一連のものと理解るべきである。

(4) 編年の位置づけ 以上、山草荷遺跡の宇津ノ台式土器にかかる資料の特徴を確認してきた。須藤の宇津ノ台Ⅱ群土器に対比すべき本遺跡の1類は、基本的には共通する特徴を持ちながらも、異なる点がいくつか認められる。まず器形面で、宇津ノ台Ⅱ群土器に比べて頭部の筒形が緩やかで、宇津ノ台式に顕著な、口縁部と頭部の境の屈曲と内面の棱形成も甘い。そして、縄文原体が宇津ノ台遺跡以上に、北方的要素であるR Lが明瞭であることも注目される。頭部の菱形・重菱形文も、宇津ノ台式よりも山草荷遺跡に構図の亂れが目立っている。山草荷遺跡ではR L縄文が多数派を占めるから、宇津ノ台式と山草荷遺跡の同系統土器を単純に比較すれば、山草荷遺跡により新しい特徴が明瞭なのは明らかである。しかし、他の特徴も同様に考え得るであろうか。北陸・小松式土器の影響で形成された2類土器が、いわば同じ出現経緯にある宇津ノ台C・D類と比べて、本遺跡でははる

かに高い比率であり、小松式の影響が本遺跡では色濃いことに十分留意する必要がある。

本遺跡の宇津ノ台式系統の1類の中で、やや細い沈線で頭部に菱形文や重菱形文を描く一群をb群として抽出した。このb群は下越地方の後期初頭の土器型式と考えられる砂山式と、現時点では明確な岐別が難しい一群である。しかし、砂山式では、すでに文様帶区画に天王山式土器特有の交互刺突文やその先行形が存在し、口縁部文様帯に上開き連弧文が盛行するなど日本海側の天王山式の特徴が明確であるのに、本遺跡では1例も認められない。宇津ノ台遺跡資料の中にも、第16図21の胴部文様帯下端に砂山式に類似する大ぶりの点列がある。山草荷遺跡出土資料の中に、砂山式と接点をもつほどに近いものを含むことを認めつつも、秋田県域から新潟平野までの当該土器群の詳細が未確定な現在、これ以上の編年の問題を掘り下げるとは今後の課題とするにとどめておきたい。



第18図 宇津ノ台式土器(2)

4 小松式・栗林式土器

(1) 山草荷遺跡から出土した小松式・栗林式土器の概要

山草荷遺跡から出土した小松式土器と栗林式土器は、以下の出土傾向と特徴が認められる。

- a 両型式の土器は、ともに出土量に比べて土器組成が多様である。
- b 小松式土器の出土量は壺が蓋を上回るが、栗林式土器は壺が認められない。
- c 小松式土器には、宇津ノ台式土器との折衷、ないしは施文要素を取り込んだ器種が存在する。
- d 両型式の土器は、ともに弥生時代中期中葉～後半に比定できる。

上記の特徴は、北陸地方から遠隔地であるという地理的勾配や、海岸沿岸部に立地するといった状況が、遺跡の成り立ちや遺跡内での集団構成に一定程度の作用をもたらした可能性がある。

(2) 小松式土器について

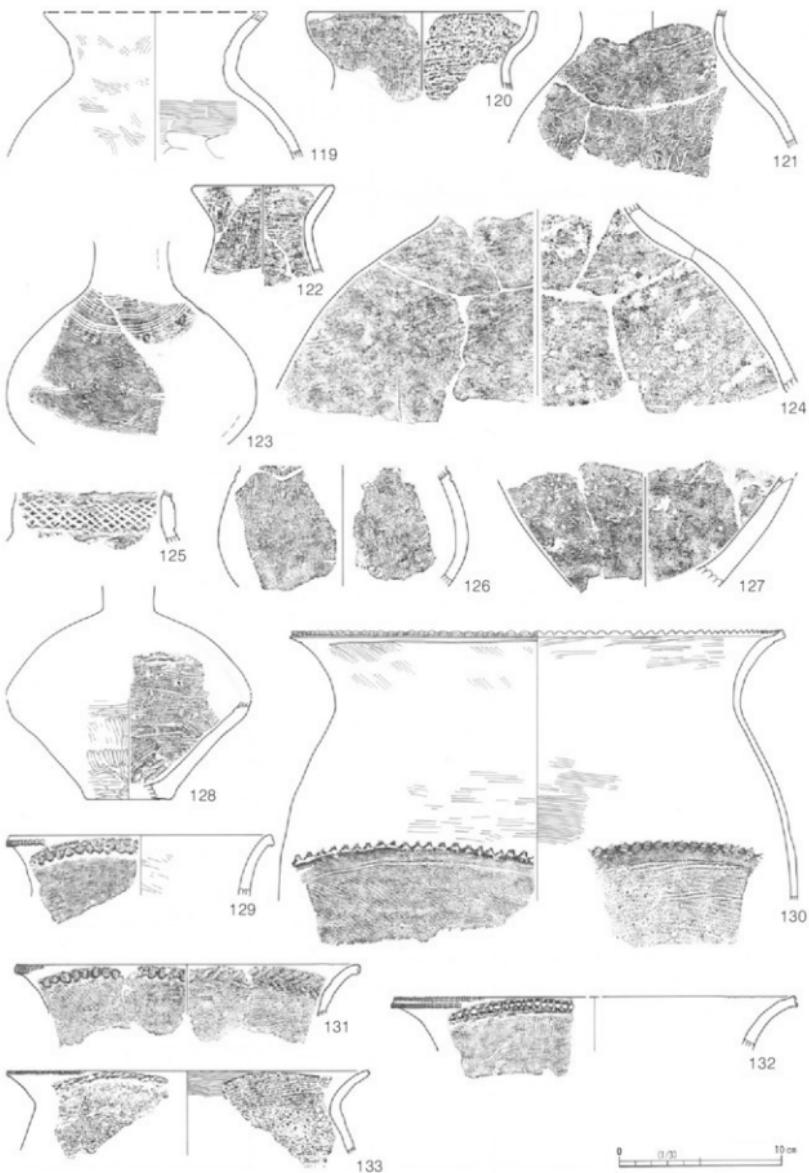
先述したように、壺の比率が高い。これは、小松式土器が主体となる上・中越地方の遺跡(高橋1979・笠澤ほか2006)とも共通している。器種は、壺、壺、高杯、器台？、蓋があり、当該期の主要な器種がそろっている。以下、器種ごとに説明する。

A 壺(第19図119～128、第21図152～155)

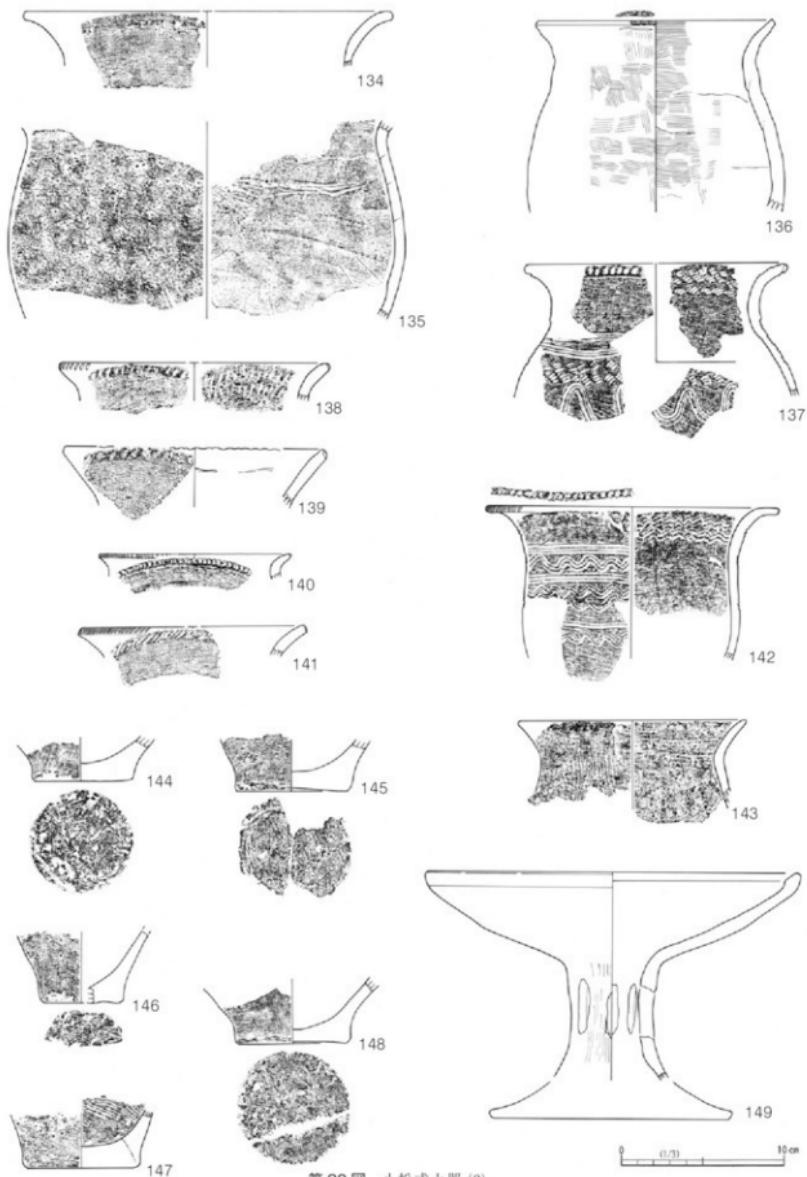
壺は、胴部を加飾する121・123などもあるが、大半が口縁部内外面のみを加飾している。口縁端部への指押圧による加飾は確認できず、ハケメ工具によるキザミもしくは羽状キザミ(153)が主体となる。口縁帶に一条の沈線を施し、上下端にキザミを加える153・155は、施文手法的に古い要素をもつ。一方、受口状口縁(152)と頭部の貼付凸帯にキザミによる斜格子文を施す125・154は、新しい施文要素で、北陸で凹線文土器が出現する段階以降に下る可能性が高い。頭部に1帯の纏状文を施し、肩部にジグザグのヘラ描き垂下文と、胴部を山形文風のヘラガキ波状文で加飾する126は、文様帶構成が平田遺跡(坂上ほか2000)図版37～87や吹上遺跡(笠澤ほか2006)図版103～937と共通するが、施文具が櫛齒状工具ではなく、竹管とヘラである点は、宇津ノ台式土器の施文手法が取り入れられている。126の山形文風のヘラ描き波状文も同様であろう。時期的には、八日市地方編年(福海2003・下濱ほか2016)に対比すれば北陸での凹線文土器出現期に当たる9期以降に比定できよう。123の文様帶構成は、肩部に直線文を3帯施し、直線文帶下に肩形文を付加するもので、一見古相を示すが、直線文帶間がやや乱れ、施文具の幅が狭く条線が浅いなどの特徴は新しい施文手法と捉えられ、八日市地方8期もしくは9期並行であろう。

B 壺(第19図129～148、第21図156～168)

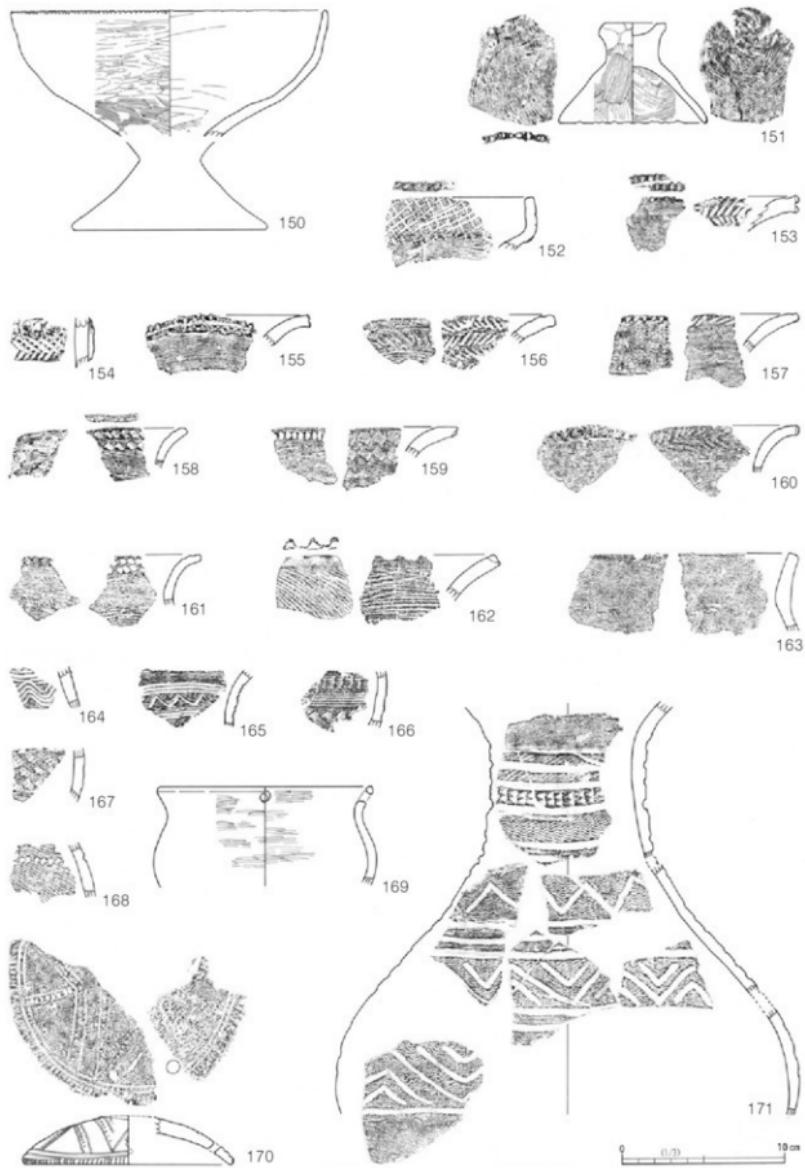
壺は、口縁部内面や胴部の加飾に斜行短線文(137・158・159・166・167)が多用されており、小松式土器盛行期の特徴を示すものが幾つか存在する。ただし、斜行短線文そのものは、条線が浅く小振りであり、施文要素としては新しいので、これらの土器が八日市地方8期を通過することはなく、8～9期並行に収まるとみるのが妥当であろう。137は、胴部に大振りの波状文を施すが、この波状文は北陸への凹線文土器波及期に新たに出現するタイプのもの(楠2000)で、八日市地方9期並行に位置づけられる。142は、口縁部が大きく開き、胴部があまり張らず、胴部文様帶を直線文と波状文の交互施文とし、口縁部内面に波状文が施される。八日市地方6～7期に盛行する文様帶構成で、古相を示す。施文具が3本一組で、波状文がやや大振りな点は、宇津ノ台式土器との折衷とされた石動遺跡の壺(第22図)と共通する。石川日出志は、石動遺跡の壺が少条で粗い櫛齒原体を使用しており、直線文と波状文の交互施文であることから、小松式土器の古い段階に並行する(石川2000b)とした。しかし、3本一組の太い施文具を使用した波状文は、上・中越地方では稀で下越地方に偏在しており、宇津ノ台式土器の山



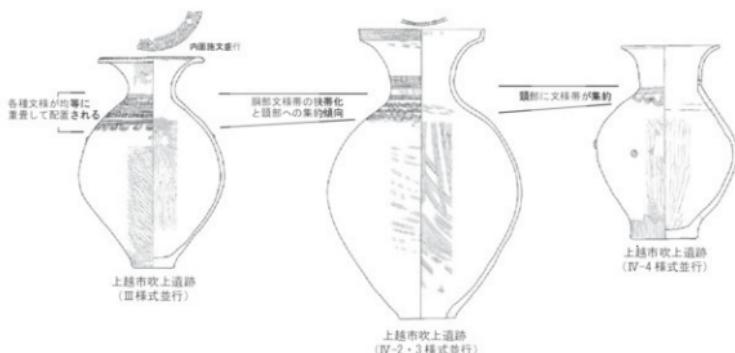
第19図 小松式土器(1)



第20図 小松式土器(2)



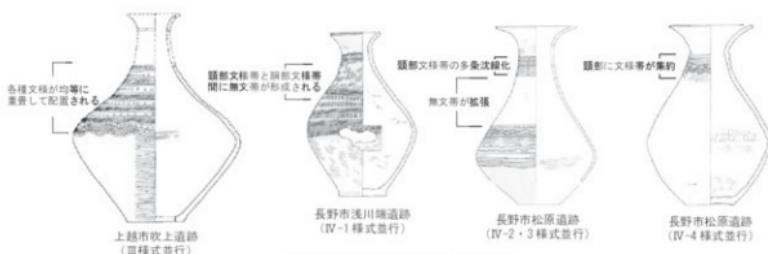
第21図 小松式土器(3)・栗林式土器



<小松式土器壺の文様帯の変化>



<小松式土器壺の文様帯の変化>



<栗林式土器壺の文様帯の変化>



<宇津ノ台式土器と下越地方の小松式土器および折衷土器>

第 22 図 小松式土器と栗林式土器の関連資料

形文もしくは鋸歯文との親和性からこのような施文具が採用されたと見るべきで、これらの要素をだけを持って古相と見ることはできない。142の壺が、石動遺跡例より時期的に先行することは確実だが、上・中越地方の状況を鑑みれば、八日市地方7期新相を通過することはなく、口縁部の伸長と開き具合を勘案すれば八日市地方8期並行とするのが妥当であろう。胴部無文の壺は、壺同様口縁部への指押圧施文がなく、口縁端部の面が狭くてキザミの条線が浅いものが多いなど、新しい施文手法が目立つ。ただし、大半の壺に口縁部へのキザミが認められるので、時期的に八日市地方10期以降に下るものはないと考えられ、加賀壺同様8～10期並行とするのが妥当であろう。

他には、胴部の直線文帯間に山形文風のヘラ描き波状文を施す、宇津ノ台式土器との折衷的な壺(165)も出土している。

C 高杯・器台(第20図149、第21図150)

2点確認している。149は、受部内面に円盤充填の痕跡が認められなかつたため器台として扱ったが、県内及び周辺部に類例を見ない。脚部の楕円形透かしは、陣場式土器など東北南部地域の中期以降の土器に類例がある。脚部接合部への円盤充填を省略したと考えれば、本例を高杯として中期後半に位置づけることも可能かもしれないが、皿状の受部で棒状脚となる器形から、後期の器台としたほうが良いかもしれない。150は、低脚が付く高杯の杯部片である。口縁部にキザミが巡らされており、ハケメ調整後、粗いミガキ調整される。八日市地方8期以降に位置付けられる。

D 蓋(第21図151)

小形の蓋が1点出土している。ミガキ調整されず、摘み部が輪台状となり、口縁部にキザミが巡ることから、小松式土器の蓋と判断した。

(3) 栗林式土器について

壺と蓋がある。たまたまかもしれないが、壺が1点も確認できなかつた点が、県内の他の遺跡と比べて違和感を覚えるが、能登半島以西の北陸地方では、壺よりも壺の出土例が目立ち(久田2009)、村上市砂山・瀧ノ前遺跡例(笹澤ほか2003)を考慮すれば、遠隔地では意図的に器種を選択した可能性も考えられる。

A 壺(第21図169・171)

169は、丁寧なミガキ調整する無文の小形壺である。この手の壺は、本来赤彩されるのが一般的であるが、本例は無彩である。無文の精製小形壺は、栗林II式(笹澤 浩1996)以降に出現する器種(笹澤正史2012・2013)で、弥生時代後期後半、八日市地方9期以降に位置付けられる。171は、細頸の壺である。頸部から胴部まで隙間なく文様が充填され、かつ肩部以下の文様をヘラ描き沈線文で均等に区画している点は、栗林I式(笹澤1996)の文様帶構成と共通する。ただし、頸部文様帶の沈線が多条化し、胴部の複合鋸歯文が簡略化されて鋸歯文間に爪形文が充填されない点は新しい要素であり、栗林II式古段階(笹澤1996)に位置付けるのが妥当であろう。なお、栗林式土器は、本来縄文地文とするのが通例であり、本例のように波状文地文とするのは、小松式土器の影響と思われ、ほかに類例を見ない。下越の小松式土器や、小松式土器と宇津ノ台式土器との折衷土器に波状文を多用する状況が、本例にも反映されたと思われる。

B 蓋(第21図170)

ヘラ描き沈線文画内に爪形文を充填した三角形文を、3ないし4単位蓋の表面に加飾している。三角形文の頂点から口縁にかけては、ヘラ描き沈線文画内に爪形文が充填された垂下文を施文する。口縁端部には、キザミ風の爪形文を巡らす。文様の充填度は高いが、沈線が浅く区画も狭いなど文様の簡略化傾向が認められるので、171の壺と同時期としてよいであろう。

第Ⅲ章 東日本における山草荷遺跡の位置付け

1 山草荷遺跡の発見と学界の関心

新発田市山草荷遺跡は、戦前から新潟県域を代表する弥生時代遺跡として広く知られており、現在も山草荷遺跡に触れずに新潟県域の弥生文化の特色を語るのは難しいほどである。しかし、その資料の全容は本報告書によつて初めて公表されるのであり、本報告書の刊行は新潟県域における考古学の歴史の上でも意義深いと言えよう。

この山草荷遺跡が注目されるのは、1935年頃、家屋新築の際に多数の土器が出土したのを、近隣の稻荷岡在住の大木金平が収集したことによる。當時縄文土器研究を推進し、翌年の中部考古學會設立を主導する八幡一郎が、1935年に大木の招きで北蒲原地方の調査を行った際に山草荷遺跡の土器群を実見し、當時まだ不詳であった「越後の弥生式」土器として注目した。そして『中部考古學會彙報』第1年第2号に大木からの写真1葉を掲載して土器の特徴を示しつつ、「種々なる点で下野の野沢や陸前の樹形圓の土器に一脈の類似を有する」と評価した(八幡1936)。大木はただちに同会に入会して、同誌第1年第3号から第2年第5号までこの遺跡の調査成果を逐次紹介する(大木1936-1937、中部考古學會1936c-d)。そして1937年9月に新潟で開催された同会第2回大会の3日目に参会者一同で一小時間ほど山草荷遺跡を発掘する機会がもたらされた(中部考古學會1938)。

これら一連の紹介以上に重要なのは、當時弥生土器の全国的な集成と体系化を進めていた小林行雄が1936年に本遺跡出土土器を検討し、「弥生式土器聚成図録」(森本・小林1938、小林1939)において、一括して「越後A様式」として新潟地方の弥生土器の1様式と認めたことである。新潟県域のみならず北陸で最初に設定された土器様式(土器型式)である。小林は、壺4点(うち2点は杉原莊介実測¹⁾)・甕3点・小型鉢2点・蓋1点を精緻な実測図で示して、明言はないが野沢・舟形圓筒遺跡との類似を認めつつ、中部高地第1・2様式(現在の栗林式・箱清水式)と対比できる土器も存在することも指摘した(森本・小林1938、小林1939)。こうして「越後の弥生土器に山草荷あり」という認識が広く共有されるようになった。

戦後、新潟県内で弥生土器が少しづつ蓄積され、検討が重ねられる(寺村1953、小出1955、閔1963、上原・磯崎1968など)なかで、山草荷遺跡出土土器の重要性に強く注意を喚起したのが中村五郎である(大木・中村1970)。中村は、1950年代後半に、会津盆地を主とする諸遺跡の土器群を比較検討して、渦巻き文などをもつ一連の弥生土器を南御山2式→二ツ釜式→川原町口式→天ヶ式と型式編年し、交互刺突文が特徴的な天王山式をそれに後続させた(中村1955-1959ほか)。中村は、これら福島県域における編年整備を進めるなか1955-59年に山草荷遺跡資料を実査して比較を行う。その結果、川原町口式の壺が山草荷遺跡に明瞭である一方で、甕が全く様相を異にする点に注目し、両者に相互関係が見いだせないことから時期差と判断する。小林が図示した壺4点を山草荷1式として川原町口式に対比させる一方、甕3点は北陸の小松式や秋田方面の宇津ノ台式と関連するものとみなして山草荷2式として天王山式に後続させた²⁾。小林が詳細な検討が困難だとして暫定的に一つの様式と判断したのを、中村は山草荷遺跡で欠落する天王山式段階を挟む前後2時期で、全く系統の異なる土器群が本遺跡で展開すると見た。福島県域を基軸とする中村の弥生土器編年は、関東から北海道(縄文土器)まで及ぶ広域で詳細に及ぶものであり、その後の各地の弥生土器編年研究の基礎となつた点で重要な成果であった。しかし、その後に各地で蓄積された弥生土器をもとに検討を進めようになる私たちは、山草荷遺跡出土土器に関しては、異系統の土器を時期差とみなす方法論の問題、および小松式と宇津ノ台式と関係する山草荷2式を天王山式に後続させる判断の2点は、とうてい承服し得るものではなかった。次に、現在の理解の概要を述べよう。

2 山草荷遺跡出土弥生土器群の構造

山草荷遺跡の土器群が複雑な内容をもつことは、小林行雄もすでに「越後 A 様式」を設定した時点で気付いている。つまり、壺は、頭部や胴部に渦状文・擬流文文・重弧文を1本ずつ、もしくは2本同時に描き、赤彩が施され、胴下部は特殊な縄文を施す。壺は、胴上部に竈描きか櫛描きで直線文帯か波状文帯を置き、胴下部は縄文となる。この壺と壺のほかに小型鉢と蓋もこの様式を構成するとみなす。小林の論述で特に注意を要することが2点ある。第1は、越後 A 様式の壺の「口縁部内面には櫛描の羽状文・波状文(C26)」があることを明記した点である。第2は、越後 A 様式の「考慮の外に置く」とするものの、中部高地第1様式(のちの栗林式)や同第2様式(のちの箱清水式)に似る壺があるとした点である。第1の「口縁部内面の櫛描の羽状文」とは現在の小松式壺の特徴を指す。また、「中部高地第2様式に相当すると思われる櫛描文塗丹の壺」とは本報告の壺123のことであり、これも本報告では小松式と判断している。小林は、当時すでに近畿およびその周辺、さらに中部高地まで櫛描文の弥生土器が分布することを熟知していた。しかし当時、北陸では福井平野に断片的に櫛描文土器が確認されていたもの(上田1921)、石川県域以北では類例が見られなかったために、櫛描文の壺123と壺の「口縁部内面の櫛描の羽状文」を一つのまとまりと理解するまでには至らなかった。すなわち、小林は山草荷遺跡の土器群に複雑な系統の重なりに気付きながらも、解決を将来に委ねざるを得なかった。

現在、山草荷遺跡出土土器群を、第23図のような系統ごとの関係として理解している。すなわち、山草荷遺跡の土器群は、川原町口式系・栗林式系・小松式系・宇津ノ台式系の4系統から成りたち、このうち宇津ノ台式系と小松式系は両者が複合した一群が明瞭だという特徴がある。これらは、器形や器面調整、文様とその施文法、縄文原体の種類だけでなく、胎土や色調の点でもおおむね識別できる。

川原町口式系 右下の一群が、会津をはじめ東北地方南部の二ツ釜式～川原町口式の系統にある土器群である。壺が圧倒的多数を占め、装飾壺や鉢(高杯の可能性もある)はそれぞれ数点しかなく、会津・中通りで普遍的な外反口縁・縄文施文の壺は全く見られない。長頸壺と、頭部がくの字形に屈折する広口壺があり、長頸壺には細口と中広口の2種がある。近年、編年細分の試みがあり(鈴木2012・2014b)、本報告でも細別試案が示されているが、川原町口式をどの範疇とみるか研究者間で意見の差異がある。描線を1本ずつ描くものから2本描きへ、沈線2条間を一帯ごとにミガキ分けるものからミガキ原体を1・2条当てるだけに簡略化されたものを経てさらにはミガキが省略されるものへ、赤彩も一帯おきから全面へ、沈線間隔が広いものから狭いものへ、それぞれの変化の方向性は合意されている。しかし、これが実際にどのように組み合はさって変遷するのかを遺跡データで検証できるまでには至っていない。山草荷遺跡では、筆者が川原町口式装飾帶と呼ぶ、頭部装飾帶と胴部の渦文等の間を充たす装飾帶がよくまとまっており、ここでは第23図を川原町口式の範疇と広くとらえておく。胴下部の縄文は、2段右撚りを基本とする付加条系の縄文原体を横回転施文する。器面の整形にハケメを用いない点も基本的特徴である。

栗林式系 左下の一群は中部高地の栗林式系統の土器群である。壺(大型壺・小型広口壺)と壺用蓋がある。無頭壺や鉢も組成するが、本遺跡では確認できなかった。ハケメ整形が定着した土器型式である。本遺跡では3点しか確認できない。高杯149の脚部の透し孔も栗林式系要素か。村上市紗山遺跡に赤彩された無文鉢がある。

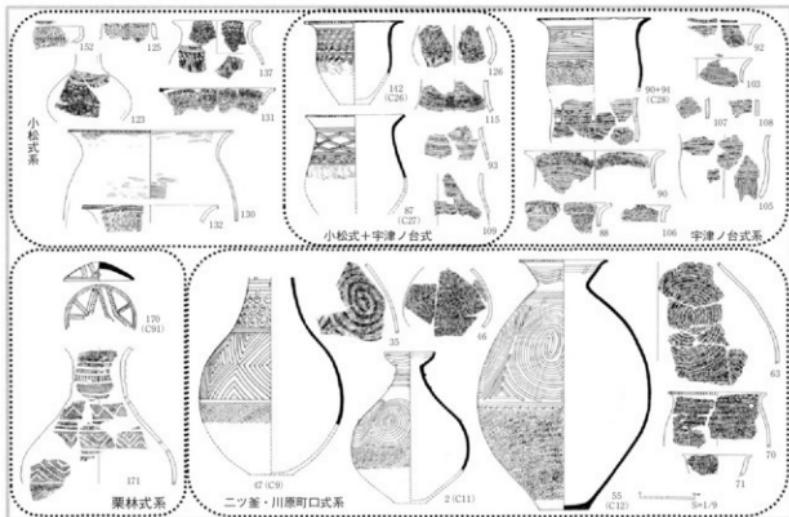
小松式系 上段左側が北陸系の小松式土器である。壺(大型～小型、広口～細口)と壺がほとんどで、高杯も少數みられる。ハケメで土器表面を仕上げる整形技法が徹底した土器群で、壺の肩部に櫛描きによる直線文・簾状文・波状文・短斜線文、壺の内面に櫛描きによる短斜線文・羽状刺突文が施される。櫛描文土器型式に属するが、櫛描文の比率は高くない。受口状大型壺では口縁外面と頭部突帯に竈描き斜格子文を施す例もある。他遺跡では無

頭壺も明瞭である。

宇津ノ台式系 上段右側が秋田方面に分布の中心がある宇津ノ台式土器の一群である。ハケメ調整が少數派の型式である。壺・甕・鉢・高杯・蓋の各器種で構成される。頭部は筒形を呈する傾向が明瞭で、頭部上端で口縁部が外方に折れ、内面に稜をつくる。筒形をなす頭部の下で緩やかに肩が張る。筒形の頭部を主装飾帯とし、範描きで、上下を横線で画した中に大ぶりの山形文・菱形文を充填し、頭部装飾帯の下方に連弧文や連続山形文を置く。強く外反した口縁の内面に1・2条の速弧文をもつ点も特徴的である。口縁端面と胴部に繩文を施文するが、2段左寄り(RL)が卓越し、胴部では斜めに回転施文して条が縱走する。こうした特徴は、從来から東北地方北部から北海道方面との関係が説かれている。

系統間関係をどうみるか このように、本遺跡の土器群は、その出自をみると、南東北系・中部高地系・北陸系・秋田系の東西南北4系統で構成されている。そして重要なのがその系統間の相互関係である。上段中央に「小松式+宇津ノ台式」とまとめたように、宇津ノ台式系要素(属性)を主とし、小松式系を従とする出自複合土器群のまとまりがある。本遺跡に特徴的なこの一群を山草荷タイプ³⁾と呼ぶ。山草荷タイプを構成する宇津ノ台式系属性とは、器形面では、筒形頭部と外反口縁、頭部と口縁部間の内面の稜形成、装飾面では、筒形頭部を主装飾帯として重菱形文や、大ぶりの連続山形文を多用し、装飾帯下端に山形～波状文を置く点が挙げられる。115で頭部下半を無文帯とし、上半に装飾を配置してその下端に連続山形文を置くのも宇津ノ台式やそれ以前の北方と繋がる要素である。小松式系属性とは、ハケメ整形、3～2条と条数は少ないが範描き手法が該当し、87のような胴部の張出しや頭部から口縁への外反なども小松式に由来する。こうした小松式系と宇津ノ台式系および山草荷タイプの組合せは、中村五郎の山草荷2式に相当する。

これに対して、川原町口式系と栗林式系は、基本的には他系統と複合することがないよう見える。これこそが中村が山草荷遺跡出土土器を1式と2式に分離する糸口となつた点である。しかし、山草荷タイプ属性と川原



第23図 山草荷遺跡の土器群構造

町口式系を併せ持つ土器が存在する。第10図48がそれで、長頸部を持たず、球形の胴部に内清口縁が直接する広口壺は川原町口式の壺の基本器種のひとつであり、口縁部と胴部の文様構図も川原町口式に由来することは明らかである。しかし、本例の文様抽出は、先端が細く鋭い川原町口式特有の施文具ではなく、第17図104などと同様に幅広く先端が丸みをもつ特徴がある。ハケメによる器面調整も、その上にLR縞文をまばらに施す点も、施文具の特徴とともに、山草荷タイプ土器群と共通する。また、阿賀野市狐塚遺跡に3点ある川原町口式系統の小型壺に採用されたハケメ整形や波状沈線文は山草荷タイプの属性である。すなわち、中村の山草荷1式と2式の間には、顕著ではないまでも相互関係が認められるのであり、時期差とみる必要はない。

さらに、本書II-3でも指摘があるように、本遺跡の宇津ノ台式系も型式学的には時期幅をもつと考えられる。第23図上段右端に後続する天王山式土器形成期・紗山式との分離が難しい一群を抽出したように、宇津ノ台式系でも天王山式に至る変遷を見出すことができる。つまり、本遺跡の宇津ノ台式系も川原町口式系も、ともに天王山式土器に先行し、系統を異にする土器群として併行する土器群とみなすことができる。しかも、これら小松式系、宇津ノ台式系、山草荷タイプ、川原町口式系の4種の土器群は、次項で挙げる新潟平野北部の各遺跡でことごとく共存している。

類例の広がり 以上確認してきたような、山草荷遺跡と同様な構成の土器群はどのような広がりをもつであろうか。新潟平野で中期後半～末の土器群を出土した遺跡の中で、本遺跡は現在でももっとも資料的にまとまりをもつ遺跡であるが、次の諸遺跡でも確認することができる。北から村上市の滝ノ前遺跡(閔1972・滝沢ほか2003・閔2016)、山元遺跡(滝沢2009・吉井2013)、砂山遺跡(上原・磯崎1968・滝沢ほか2003)、長松遺跡(田辺1991)、道端遺跡(渡邊ほか2003)、胎内市乙遺跡(閔1988b・石川2000b)、新発田市王子山遺跡(渡邊ほか2008)、新潟市東区石動遺跡(廣野1996・石川2000b)、阿賀野市狐塚遺跡(佐藤ほか2009)である。阿賀野川左岸南端に位置する石動遺跡でも同様の組成が確認できるので、それよりも北側に位置する新潟市北区(旧農榮市)の松影A遺跡(加藤2001)・引越遺跡(閔1988b)・城山遺跡(閔1988b)も、一部の系統土器を欠くものの、本来は同様の構成だと考えてよかろう。新潟市でも江南区の旧亀田町西郷遺跡(土橋ほか2009)や旧横越村山ん家遺跡(川上1993)では小松式がより高い比率を占めるようである。

さらに西南方の新潟市西蒲区(旧巻町)山谷古墳(甘柏ほか1984)や長岡市(旧和鳥村)松ノ脇遺跡(丸山1998)・大武遺跡(春日ほか2014)でも宇津ノ台式系や山草荷タイプが少數ながら明瞭に認められる。佐渡でも、平田遺跡(坂上ほか2000)などに宇津ノ台式系や川原町口式系が少數認められるが、中越沿岸部の松ノ脇遺跡や大武遺跡と同様、山草荷遺跡周辺に比べてその組成比は著しく低く、小松式の比率が高い。一方、北に目を向けると、村上市滝ノ前遺跡から三面川をわずか約6km遡った堂の前遺跡(石川ほか2010)では、宇津ノ台式系と山草荷タイプが明瞭なのに小松式も川原町口式もみられない。さらに北方へ行くと、秋田県横手市宇津ノ台遺跡で宇津ノ台式以外に宇津ノ台式・小松式複合土器がみられるが、ごく少數である。以上のことから、山草荷遺跡のような土器群構成は阿賀野川下流域から三面川河口周辺までの砂丘地帯と周辺の平野部に限られると考えられる。

3 山草荷遺跡の性格

さて、それでは山草荷遺跡はどのような性格の遺跡なのであろうか。従来、川原町口式がほとんど壺に限られる点に注目して墓地遺跡の可能性を想定する意見が出されてきた。例えば中村は、「山草荷1式の場合、特殊な小堅穴の造構から、これら壺類が集中的に発見されたのではないか。福島県の南御山遺跡をはじめ、この性格の遺跡では、壺の個体数が、深鉢・甕の出土個体数をはるかに上回っている」(大木・中村1970:42頁)と述べる。この「特殊な小堅穴」とは現在の壺再葬墓のことである。南御山遺跡を調査した際に、杉原莊介も中期後半まで壺

再葬墓が営まれたと考えていた。しかし、現在は南御山2式以後の壺再葬墓の確かな事例はない（石川2009）。会津若松市一ノ塚B遺跡のような二ツ釜型の土坑墓でも壺再葬墓の伝統をひくように多数の土器を伴うが、壺類もかなり伴うので、川原町口式の壺の欠落を根拠に墓地遺跡と想定するのは無理がある。山草荷遺跡では、川原町口式の壺は第13図70の1例だけだが、新潟市東区石動遺跡（石川2000b）と三条市藤橋遺跡（家田1983）でも70と同類の有文壺がみられるものの、川原町口式で多数派を占める顎部以下が全面縄文となる壺はみられない。阿賀野市狐塚遺跡の土坑墓でも川原町口式系の壺はあるものの壺は見られない。むしろ、山草荷遺跡および当地域の弥生時代中期後半～末の土器群は、前項で述べたように東西南北4系統の土器で構成されること自体が常態であることから、通常の集落遺跡と考えるのが適切である。

集落遺跡であれば、打製石鎌・打製石鏃・スクレイバー類やその製作にかかる剥片類や磨製石斧などが伴うはずだという意見もある。しかし、当地域では弥生時代中期遺跡では石器類の出土は多くないので、たまたま採集されなかったにすぎないと考えても問題はない。

4 山草荷遺跡など下越の遺跡群をとりまく4つの地域

次に、この山草荷遺跡や下越の平野部にある遺跡群を、新潟県域や東日本の弥生文化のなかでどのように位置づけて理解できるのかを考える。土器の系譜と周辺諸地域とのかかわりから確認しよう（第24図左）。

各系譜土器の広がり　まず、山草荷遺跡でもっとも注目されてきた川原町口式系土器から見ると、縄文時代の各時期を通じて当地域は阿賀野川沿いの交流が重ねられているので、会津系の弥生土器型式が新潟平野に進出することは何ら不思議ではない。会津地方では、弥生中期前半の磨削縄文土器群がその伝統を一部保持しながらも、次の段階に仙台平野の高田B式土器の強い影響を受けて、成形技術・器種・文様構図・施文手法・縄文原体など劇的な変革が起こり、南御山2式土器が成立する。この南御山2式土器は成立後、ただちに新潟平野にも広がる。阿賀野川が山間部を抜けて平野部に出た位置にある阿賀野市六野瀬遺跡に明瞭であるほか、新潟市江南区山ん家遺跡・西郷遺跡、東区石動遺跡、胎内市乙遺跡でも少数ながら確認でき（石川2000）。山草荷遺跡段階の川原町口式系土器の広がりと一致することが分かる。川原町口式は、山草荷遺跡と同様に、壺が圧倒的多数を占め、有文壺が少数伴う。さらに、川原町口式土器は佐渡島の平田遺跡など新発遺跡群にまで広がっている。

次に、中部高地系である栗林式土器を確認しよう。新潟県域における栗林式土器を考える時、注意を要するのは、高田平野南部域と南・中魚沼両郡域は栗林式土器の分布圏であるという点である。上越市吹上遺跡は栗林式土器と小松式土器の分布圏が重なる地点に位置しており、両型式の中繼点と言ってよい。中魚沼郡域の北西にあたる旧小国町から柏崎市域（下谷地遺跡・小丸山遺跡）にかけても栗林式土器が明瞭で、小松式に次ぐ組成率を占める。柏崎から海岸沿いを北上した旧三島郡域でも大武遺跡や松ノ脇遺跡で明瞭である。佐渡でも平田遺跡など新発遺跡群で少數みられるが、上越市域から旧三島郡域を経由してもたらされたと考えられる。中越では、三条市の山間部にあたる旧下田村の藤平遺跡（家田1983・下田村教委1987）や小外谷遺跡A地点（下田村教委1987）では栗林式土器が明瞭で、信濃川沿いとは別に魚沼郡域から山間部沿いに北方に分布を広げている状況が分かる。信濃川流域では詳らかではないが、急速に組成率を減じる可能性がある。そして阿賀野川左岸の新潟市江南区山ん家遺跡・小丸山遺跡でも少數みられ、さらに北方の山草荷遺跡、そして村上市の砂山遺跡にまで広がっている。信濃川沿いのルートでの交流が重ねられたと考えられる。

北陸系の小松式土器は、上越市吹上遺跡や旧三島郡域の長岡市大武遺跡、新潟市江南区西郷遺跡で八日市地方7・8期の小松式土器が見られ、小松式成立後、早い段階に新潟県域各地に分布を拡大したことが分かる。糸魚川市域ではいまだ確認されていないが、上越市域・柏崎市域・旧三島郡域、さらに西蒲原・北蒲原郡域、佐渡島国

仲平野の多くの遺跡で小松式土器が定着していることが確認できる。明らかに日本海沿いに北へと分布を広げており、村上市溝ノ前遺跡を北限とする。一方、会津盆地では会津坂下町中開津遺跡と西会津町塩喰岩陰遺跡で各1点知られるのみなので、内陸部への進出は顕著ではない。

秋田県域で形成された宇津ノ台式土器は、山形県庄内地方では鶴岡市宮ノ前遺跡でしか確認されていないが、新潟県域の状況を見るとその分布圏内であることは確実である。そして新潟平野の海岸部沿いに南へ分布を広げており、阿賀野市狐塚遺跡の土坑墓群出土土器では宇津ノ台式系と山草荷タイプが圧倒的多数を占めており、宇津ノ台式系の定着度の高さを知ることができる。宇津ノ台式系土器は、さらに佐渡島の新穗遺跡群や、旧相川町の浜端洞穴遺跡で認められ、さらに能登半島の石川県羽咋郡志賀町（旧富来町）高田遺跡まで類例がある。

このように、山草荷遺跡を構成する各系統土器の分布状況を点検してみると、この新潟平野を介して東西南北の諸地域が相互に密な交流を重ねる状況が明瞭である。あたかも弥生文化が展開する交差点の様相を呈する。

5 東日本弥生文化のなかの当地域

北陸との関係 かつては、縄文時代から弥生時代への移行期に本格的な稻作農耕社会への転換が始まったと、漠然と考えられてきた。しかし、そうしたイメージは、社会変化を検討するためのデータが不足であることに由来するもので、現在では、東日本では弥生時代前期から中期初頭までは稻作が実施されても試験的な段階にとどまり、中部・関東地方ではむしろアワ・キビなどの雑穀類の栽培が盛んで、縄文時代以来の各種堅果類を組合せた複合的な食料獲得が行われた状況だと判明しつつある。そして北陸地方では、中期前葉から中頃にかけて、石川県南部を中心に山陰・北近畿や濃尾平野、および飛驒等山間部の複数系統の土器が再編成されて小松式土器という新しい構造文土器型式が形成された段階に、本格的な稻作農耕社会が成立する。地域の拠点となる集落は数々クタールの規模をもち、居住域の周間に濠を巡らす環濠集落という姿となる。住居は濃尾平野方面に由来する平地式住居構造を採用して、低地仕様の防湿機能を装備する。墓地も濃尾平野に由来する四隅土橋型の方形周溝墓が採用される。さらに、遠く朝鮮半島に由来する緑色凝灰岩製の管玉という装身具を盛んに製作・保有する習俗・



第24図 山草荷遺跡を取り巻く地域の土器型式と環濠集落・墓制

活動も盛んとなる。この新たな小松式土器を指標とする本格的農耕社会の文化が、中期中頃から東方へと分布を拡大する。この文化動向が新潟県域にどのように定着しているかを見てみよう。

まず集落形態をみると、環濠集落は上越市吹上遺跡(笠澤ほか2006)と佐渡市平田遺跡(坂上ほか2000)で環濠が確認されている。吹上遺跡はやや起伏が顕著である一方、平田遺跡は起伏が少なく緩やかな、ともに扇状地性地形の上に占地する大規模集落である。ところが、新潟県域では両地域以外で弥生時代中期中頃～後半に環濠集落が営まれたかは疑わしい。小松式を主体とするやや大規模な集落である柏崎市下谷地遺跡(高橋ほか1979)では、南北約120mの範囲に遺構群が検出され、東西方向にはそれと同程度かそれ以上の居住域の広がりがある1～2万m²の集落と推定されるにもかかわらず環濠は検出されなかった。下谷地遺跡よりも大規模な集落遺跡が中期後半に新潟平野内に存在した可能性は低いであろう。

方形周溝墓はどうであろうか。中期後半の方形周溝墓は、上越市吹上遺跡・柏崎市下谷地遺跡と三条市内野手遺跡で検出されており、いずれも四隅土橋形で北陸・小松式系の墓制である。内野手遺跡では小松式土器が出土していない中で方形周溝墓が確認されたことから考えると、今後小松式土器が出土する阿賀野川以北の新潟平野でも検出される可能性がないとは言えないが、さてどうであろうか。同時期の東北地方中・南部の墓制は土坑墓が主流となっており(第24図右)、新潟平野でも、阿賀野市孤塚遺跡で小型壺の副葬を伴う土坑墓群が確認されている。こうした土坑墓が下越に普遍的なのか、今後の重要な検討課題である。

管玉製作は、上越市吹上遺跡・柏崎市下谷地遺跡、佐渡の新穂遺跡群・平田遺跡で盛んに実施されていることがあらためて言うまでもなかろう。新潟市江南区西郷遺跡でも管玉生産が盛んであることが確認されている。阿賀野川以北の小松式土器を出土する遺跡でも、胎内市乙遺跡で擦切痕ある緑色凝灰岩製管玉製作途上品、村上市道端遺跡で擦切具が出土しているので、管玉製作は山草荷遺跡周辺でも行われてはいるものの、きわめて小規模な状況にあったと考えてよからう。

遺跡立地の問題 山草荷遺跡を理解する場合、遺跡の立地にも注目する必要がある。第3図に阿賀野川下流域から三面川下流域までの弥生時代中期後半の遺跡の位置をプロットした。この地域は砂丘列の発達が著しく、内陸側から大きく第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ砂丘群に大別され、それぞれ4・3・2列の細分が認識されている(新潟古砂丘グループ1974・青木ほか1979・鶴井ほか2006)。この時期の遺跡の立地をみると、村上市砂山遺跡から新発田市山草荷遺跡まではもっとも内側のⅠ-1の内陸寄りに立地して南北に並び、Ⅰ-1が南部で地表下に埋没する地区的二本松遺跡はⅠ-2に、さらに南側にいくとⅠ-2からⅡ-2までの各砂丘列の間隔が広がり、Ⅰ-2・3・4・Ⅱ-2の上に遺跡が形成されるようになる。

実は、山陰から北陸までの日本海側の平野部に立地する弥生時代遺跡は、砂丘の内側に形成された潟湖(ラグーン)地帯に立地する事例が多い。特に潟湖の内陸側に形成された砂堆や微高地に立地する傾向が明瞭である。それは、海岸側よりも広い水田可耕地を確保することが可能であるだけでなく、内陸側からの用水の水量と水流を確保する上で有利だと考えられる。ところが、この新潟平野では、海岸寄りの砂丘間に遺跡が形成されている例が多い。こうした地形では、上流側からの河水は砂丘列に阻まれて排水されにくく、滞水状態となり、砂丘側の湧水を利用するには水量に限りがある。こうした海岸側砂丘地帯に集落を構えたとしても、十分な耕地を確保する上でも、イネの生育に合わせて水田を干すのにも困難が伴う。砂丘地帯南部の新潟市北区や東区・江南区の遺跡群の立地も排水能力に問題がある。道端遺跡・中曾根遺跡は砂丘よりも内陸側の平野部にあり、こうした地形環境にある遺跡が今後発見される可能性はあるものの、それでも新潟平野における弥生時代集落が砂丘列上に立地する点は特徴的であることに変わりない。

このような遺跡立地は北陸以西にはみられないが、北方に目を移すと、秋田県の男鹿半島南部には認められる

(石川2012)。八郎潟の南側に大別3列の天王砂丘が形成されており、弥生時代中期に限って、内側のI・II砂丘列に小規模な遺跡が点在する。西郷遺跡で横長根A式土器が出土しているように、新潟平野で小規模ながらも農耕集落が出現する中期前葉に、これと連動するように集落群が出現し、中期末の宇津ノ台式段階まで遺跡が形成される。八郎潟の南側の砂丘列であるから、灌漑用水の取・排水には制約があり、山草荷遺跡周辺の遺跡群と条件がよく似る。ただし、男鹿地域の弥生中期遺跡で注目すべきなのは、砂丘列だけではなく、男鹿半島側の潟西台地上にも同時に遺跡が形成されている点である。翻って下越地方を見ると、村上市溝ノ前遺跡と山元遺跡のように中期後半～末から台地・丘陵上に立地する遺跡も形成されている。ともに宇津ノ台式土器が分布するように、いまだ遺跡の状況がつかめない庄内平野や本荘平野の遺跡群を介してであろうが、相互の地域間で交流が重ねられたことの証左であろう。

おわりに

山草荷遺跡は1936年に学界に登場してからすでに80年あまりの時間が経過した。現在に至るまで新潟県域の弥生時代を語るには、山草荷遺跡に触れない訳にはいかない状況は変わらなかった。しかし、その具体的な内容が公表されないために、議論に大きな制約となってきた。それが、本報告書で初めて詳細が公表されることになった。そして、山草荷遺跡出土土器の検討を進め、さらにはこれまで周辺地域で蓄積された資料を考慮しながら、山草荷遺跡の理解を深めようと試みた。山草荷遺跡は、単に新潟平野の弥生時代中期を語るだけではなく、北陸から東北地方までの広い範囲の弥生時代中～後期の歴史動向を探る際に重要な手がかりを与えてくれる遺跡であることに触れたつもりである。もちろんそれは不十分であり、今後、本書を手にされる諸賢がこのデータをもとに検討を進められ、本遺跡の歴史的意義を高められるよう、切にお願いを申し上げたい。

-
- 1) 杉原莊介も1937年5月に山草荷遺跡を訪れ、翌年調査する阿賀野市(当時保田村)六野瀬遺跡の情報も大木から得た(杉原1968)。大木所蔵資料中に杉原が寄贈した弥生町式土器らしき赤彩壺破片が1点あることもこれを裏付ける。
 - 2) 中村はその後、新潟県で「畿内第Ⅳ様式に対比できる資料は、山草荷2式→下谷地→砂山(天王山)に細別できる」と述べ(中村1983:522頁)。山草荷2式と天王山式の編年序列を逆転させた。しかし、その根据は何も示されていない。それ以上に、中村はここで小松式系土器の編年対比だけに触れるものの、山草荷2式を天王山式以前と修正するならば、1式との関係にも触れないと1970年論文との整合性が保てなくなる。
 - 3) 2012年にこの一群をこそ山草荷式と呼ぶべきだと主張したこと(石川2012)が厳しく批判されている(鈴木2014b)。小松式と宇津ノ台式の2型式の複合状態を中村が山草荷2式と理解したことは評価するものの、小松式と宇津ノ台式それぞれとは別に、両型式の複合による土器群のまとまりが明確であるからそれに型式名称という記号を付すことに問題はなかろう。しかも、次項で示すように独自の分布を示し、しかも村上市堂の前遺跡では出土土器のうち多数派を占める。山草荷式という記号が從来の議論に混乱をきたす可能性はあり得るので、ここでは山草荷タイプと呼び改める。

表3 土器観察表(1) 川原町口式系

No.	器種	計測値			文様	沈縫 工具 本数	ミカキ		赤彩 厚薄 内外	貼着	網織	系統	備考
		口径	脚部径	脚部高			全面	1面 おき					
1	壺				横縞文+上弦縦文	1	○						川原町口式系
2	壺	9.5	4.9		口縫文 横縞文+清潔文, 頸部スリット 脚部 滴文	1		○	○	○			川原町口式系 指定No.6
3	壺	15.4	10.4		横縞文+上弦縦文	1		○					川原町口式系
4	壺				横縞文+上弦縦文	1		○					川原町口式系
5	壺	14.0			横縞文+上弦縦文(△角先端)	組1	○			○			川原町口式系
6	壺	12.1	6.4		横縞文+上弦縦文	1		○	内・外	○			川原町口式系
7	壺				安楽(スリット)(擬縞)	1					不明		川原町口式系
8	壺				スリット(擬縞), 小溝文	組1		○					川原町口式系
9	壺				スリット(擬縞)	1			外			彩色のため 未確認	川原町口式系
10	壺				スリット(擬縞)	1		○	外				川原町口式系
11	壺				スリット(擬縞)	1		○	外				川原町口式系
12	壺				横縞文+スリット(擬縞)	1	○		外				川原町口式系
13	壺				横縞文+半円小溝文	1		○			ハケ		川原町口式系
14	壺	15.0	8.1		口縫文, 横縞文+上弦縦文(△角先端) 脚部スリット(擬縞+組), 半巻小溝文+清潔文	1		○	内・外	○			川原町口式系 指定No.6
15	壺				安楽(スリット) 半巻小溝文+清潔文	1			○				川原町口式系
16	壺				小溝2段目+清潔文	1	○	○					川原町口式系
17	壺				半巻小溝文+清潔文, 清潔文(ハート形)模光彫	1	○						川原町口式系
18	壺				小溝文+清潔文	1	○						川原町口式系
19	壺				スリット(擬縞) (ハート形)模光彫	1		○					川原町口式系
20	壺				連弧文+相手小溝文28	1		○	外				川原町口式系
21	壺				連弧文+清潔文(ハート形)模光彫	組1	○	○					川原町口式系
22	壺				連弧文	組1	○	○					川原町口式系
23	壺				連弧文+清潔文(ハート形)模光彫	組1		○	外				川原町口式系
24	壺				スリット(擬縞), 小竹葉利奥9段目+11段, 清潔(ハート形) 文模光彫, 横縞区画	1		○					川原町口式系
25	壺				横縞スリット+相手半巻小溝文(清潔文)複数段目+連弧文 脚部スリット(ハート形)模光彫	1	○	○	外	○			川原町口式系
26	壺				清潔文(ハート形)模光彫	1			○				川原町口式系
27	壺				清潔文(三角形)模光彫	1	○		外				川原町口式系
28	壺				清潔文(ハート形)模光彫	組1	○		外				川原町口式系
29	壺				清潔文	1	○	○	外				川原町口式系
30	壺				清潔文	1	○	○	外				川原町口式系
31	壺				清潔文	1	○	○					川原町口式系
32	壺				清潔文(三角形)模光彫	1	○						川原町口式系
33	壺				清潔文	1	○	○	外				川原町口式系
34	壺				清潔文(下端を横縞で区画しない) 清潔文直筋段多条	1	○		外				川原町口式系
35	壺				清潔文	1	○		外				川原町口式系
36	壺				清潔文	1	○	○					川原町口式系
37	壺				清潔文(下端を横縞で区画しない) 清潔文直筋段多条	1	○	○	外				川原町口式系
38	壺				清潔文(下端を横縞で区画しない) 清潔文直筋段多条	1			外				川原町口式系
39	壺				清潔文(下端を横縞で区画しない)	1					不明		川原町口式系
40	壺				スリット(文模光彫), 清潔(ハート形)模光彫	1		○		○			川原町口式系 指定No.6
41	壺				清潔文(三角形)模光彫 清潔文直筋段多条	1	○		外				川原町口式系
42	壺				清潔文(三角形)模光彫	1	○						川原町口式系
43	壺				清潔文(三角形)模光彫, 壺内にハート形(含む)+横縞区画 清潔文直筋段	組1		○					川原町口式系
44	壺				清潔文(ハート形)模光彫+横縞区画 清潔文直筋段多条	組1		○					川原町口式系
45	壺				清潔文(横縞) 清潔文直筋段	1	○		外				川原町口式系
46	壺				重豪文(三角形)模光彫	1		○					川原町口式系
47	壺				横縞スリット(直筋)+反巻小溝文4段 脚部: 重豪文(文字模光彫)	1	○	○	外				川原町口式系
48	壺	9.6	6.1		口縫文 横縞文+清潔文4段 脚部: 重豪文+重豪文L形	1		○			ハケ		川原町口式系 指定No.6
49	壺				三角形 滴文	組1	○		外				川原町口式系
50	壺				三角形 滴文	組1		○					川原町口式系
51	壺				重山形文	組1		○					川原町口式系
52	壺				重豪文	組1	○						川原町口式系
53	壺				重豪文	組1		○		○			川原町口式系
54	壺				重山形文か 清潔文直筋L形	1		○			ハケ		川原町口式系
55	壺	16.3	9.5	35.0	46.5 8.3~ 8.7	口縫文 横縞文+清潔文4段 脚部: 横縞文+清潔文3段 重豪文(スリット様) 模光彫 脚部: 清潔文(V字, なじ三角充填) 清潔文直筋段多条	2	○			ハケ		川原町口式系 指定No.6
56	壺	(16.0)	(10.4)		横縞文+清潔文3段	2		○					川原町口式系

No	路線	計測 備考					文様	式様 工具 本数	主手本			赤彩 内・外	貼籠	調整	系統	備考
		口径	銀部幅	銅部幅	基高	底径			全面	1号 おき	なし	厚減				
57	唐	(10.0)	(6.4)				横縞文+連弧文2段	2			○				川瀬町口式系	
58	唐	(10.4)	(5.2)				横縞文+連弧文2段	2		○		○			川瀬町口式系	
59	唐	(7.3)	(4.7)				横縞文+連弧文2段+横縞文	2				外			川瀬町口式系	
60	唐	19.0	8.8				□槽底・目紋 □縦縞・横縞文+連弧文10条 銀部:ズメ・トトゲ文・施縫波紋+半巻小渦文	2		○			ハケ		川瀬町口式系	既定No7
61	唐						スリット+小渦文	2		○					川瀬町口式系	
62	唐						渦文	2	○			外			川瀬町口式系	
63	唐						渦文	2			○				川瀬町口式系	
64	唐						連弧文2段+渦文	2		○					川瀬町口式系	
65	唐						山形22段↓下巻の山形22段↓下巻に小渦文2〜一部	2							川瀬町口式系	
66	唐	5.3	28.8	42.2	10.0		銀部:横縞文5条+小渦文+連弧文6段12条 銀部:書道形文	2		○					川瀬町口式系	既定No2
67	唐						織文・直段反対	2							川瀬町口式系	
68	唐						織文・直段反対	—							川瀬町口式系	
69	唐						織文・不明	—		○					川瀬町口式系	
70	唐	17.7	16.0	19.4			□槽底・目紋・隕部2個一対の孔・横縞文5條10条、 Z字結晶約3区画・纏文・直段反対	2		○					川瀬町口式系	既定No13
71	鉢						横縞文+单巻小渦文 □圓筒文(有輪かわら)ない	2		○					川瀬町口式系	
72	盖杯						□槽底・目紋内混・横縞文 銀部:横縞文・单巻小渦文	2	○			外			川瀬町口式系	
73	唐	6.2					表面:布底 織文・不明	—							裏面付近:ガタ	
74	唐	5.8					表面:ナデ 織文・直段多条	—								
75	唐	6.0					表面:ナデ 織文・不明	—								
76	唐	9.8					表面:布底 織文・直段多条	—								
77	唐						表面:ナデ 織文・单巻片	—								
78	唐	4.8					表面:木葉底 織文・单巻片	—							裏面付近:ガタ	
79	—	9.0					表面:布底	—							ハケ	
80	—	7.2					表面:木葉底	—							ハケ	
81	—	6.1					表面:布底	—								
82	—						(7.2):表面:布底	—								
83	—						9.0:表面:布底	—								
84	—						7.8:表面:木葉底	—						ハケ後:ナデ 洒し		
85	—						6.4:表面:木葉底	—								
86	—						5.8:表面:布底	—								

表4 土器観察表(2) 宇津ノ台式・小松式・栗林式

No	路線	計測 備考					文様	式様	調 整			系 統	備 考	
		口 径	銀部幅	銅部幅	基 高	底 径			全面	1号 おき	なし	厚 減		
87	唐	19.8	15.0				□縫縫目・折小糸 銀部:3段の平行波紋、3本同時菱形文、3本同時波紋文	ハケ後ナデ					小畠式と宇津ノ 台式との併用	既定No 14
88	唐	25.0	21.4				□縫縫目・横縞文LR □縫縫目・波底文、銀部:横縫・菱形形文	ハケ後ナデ					宇津ノ台式	
89	唐						C縫縫目・直縫 C縫縫目・直縫 銀部:平行波紋						宇津ノ台式	
90	唐						□縫縫目・折小糸 □縫縫目:波底文 銀部:擦れた菱形形文	ハケ後ナデ					宇津ノ台式	
91	唐						□縫縫目:波底縫、内側張から押羽絣 口縫・波縫	ハケ後ナデ					小畠式と宇津ノ 台式との併用	
92	唐						□縫縫目:折小糸 口縫・平行波縫、菱形文 銀部:織文RL						宇津ノ台式	
93	唐						3本同時平行波縫、3本同時菱形文 擦れた菱形形文、平行波縫、2本同時波紋文	ハケ					小畠式と宇津ノ 台式との併用	
94	唐						平行波縫、菱形形文 平行波縫、平行波縫、2本同時波紋文 銀部:織文RL、金合						宇津ノ台式	
95	唐						平行波縫、菱形形文 平行波縫、2本同時波紋文 銀部:菱形形文、平行波縫						宇津ノ台式	
96	唐						平行波縫、菱形形文 平行波縫、2本同時波紋文 銀部:菱形形文、平行波縫						宇津ノ台式	
97	唐						平行波縫、菱形形文 □縫縫目:波縫						宇津ノ台式	
98	唐						3本同時平行波縫						宇津ノ台式	
99	唐						平行波縫						宇津ノ台式	
100	唐						平行波縫、菱形形文	ハケ					宇津ノ台式	
101	唐						平行波縫、平行波縫文	ハケ					小畠式と宇津ノ 台式との併用	
102	唐						平行波縫、2本同時波紋文	ハケ					小畠式と宇津ノ 台式との併用	
103	唐						□縫縫目:菱形文 □縫縫目:波縫						宇津ノ台式	
104	唐						平行波縫、平行波縫文	ハケ後ナデ					宇津ノ台式	
105	唐						平行波縫、菱形文、口縫 銀部:織文RL、波縫文						宇津ノ台式	
106	唐						平行波縫、菱形形文 波縫文の菱形形文						宇津ノ台式	
107	唐						銀部:菱形形文						宇津ノ台式	
108	唐						銀部:菱形形文						宇津ノ台式	
109	唐						3本同時平行波縫、3本同時菱形形文、3本同時平行波縫間:構内形刺突列 3本同時波縫文	ハケ後ナデ					小畠式と宇津ノ 台式との併用	
110	唐						平行波縫、構内形波縫文 2本同時平行波縫、2本同時波縫、波縫文 銀部:織文RL						宇津ノ台式	

No.	器種	計測 寸径 横幅 縦幅 高さ 底径	文様	圖鑑	系統	備考	
111	參		波状文	ハケ後ナデ	平安式		
112	參		菱形または三角文内に円形剥開を有する		平安式		
113	參		平行双線形=2本同時の縦曲文 波線間に縦文LR		平安式		
114	參	10.8	2本同時平行波線	□縫上部：ナデ □縫内：横ハケ後ナデ □縫内面：横ハケ後ナデ	小松式/上津ノ 台式の折衷		
115	參		2本同時平行波線、2本同時縦曲文、平行文様	ハケ	小松式/上津ノ 台式の折衷		
116	參	26.0	肩部：八重織き平行波線、3本同時波状文 胸部：八重織き平行波線 脚部：付加的UHL	横ハケ後ナデ 内面：ナデ	小松式/上津ノ 台式の折衷		
117	參	10.0	肩部：半載竹管による平行文様 脚部：半載竹管による縦曲文	横ハケ後ナデ 内面：ナデ	小松式/上津ノ 台式の折衷	指定No.4	
118	參	12.9 3.9	5.5 5.1	つまみ足：半載竹管による縦曲文 脚部：半載竹管による平行文様、半載竹管による縦曲文が施された裏部文 直縫：丸み	ハケ後ナガキ 内面：ナガキ	小松式/上津ノ 台式の折衷	指定No.17
119	參	10.0		外面：ハケ後ナデ 内面：ナガ	小松式	指定No.11 胎土在地	
120	參 (13.8) (10.7)		縦部：被縫波状文 肩部：被縫波状文 脚部：1条へラ描き波状文	口縫：窓ハケ 脚部：窓ハケ後ハケ 脚部一側：横ハケ後ハケ 口縫内面：横ハケ 脚部内面：横ハケ 脚部下二段：横ハケ 脚部下二段	小松式	胎土在地	
121	參	8.2	縦部：被縫波状文 肩部：被縫波状文 脚部：1条へラ描き波状文	横ハケ後ナデ	小松式	瀬戸少？ 平田・秋 上通路に類似	
122	參			口縫：横ハケ 脚部：窓ハケ後ナデ 口縫内面：横ハケ後ナデ 脚部内面：ナガキ	小松式	胎土在地	
123	參	8.1 15.3	肩部：4束一組の被縫波状文 3束、4束一組の被縫波状文	外面：上矢 内面：ナガ	小松式	指定No.3 胎土在地	
124	參		平行波状文	ハケ後ナデ	小松式	胎土在地	
125	參	(10.0)	脚部：點付葉穿に八重織竹格子文	外面：ハケ後ナデ 内面：ナガ	小松式	胎土在地	
126	參	(15.4)	脚部：1条へラ描き波状文	外面：タテハケ後横ハラガキ 内面：横ハケ後コニナデ	小松式/東北系 胎土在地 美間石		
127	參			外面：ハケ後ナガキ 内面：ナガキ	小松式	124と同一個体か	
128	參	15.0	5.2	外面：窓、横ハラガキ 内面：筋、横ハケ	小松式	吉田式/被縫波 胎土在地	
129	參 (16.0)		口縫底部：キザ	外面：ナガ 内面：横ハケ	小松式	胎土在地	
130	參	30.0 24.8 31.8		口縫底部：1条へラ波線後内側からキザ	外面：別物のハケ後ナデ 内面：横ハケ後ナデ 内面：横ハケ後ナデ	小松式	胎土在地
131	參 (20.8)		口縫底部外面：キザ	外面：別物のハケ後ナデ 内面：横ハケ後ナデ	小松式		
132	參 (24.4)		口縫底部内面：別物キザ	外面：別物のハケ後ナデ 内面：横ハケ後ナデ	小松式	吉田式表示 胎土在地	
133	參 (22.0) (18.7)		口縫底部：キザ	外面：別物のハケ後ナデ 内面：横ハケ後ナデ	小松式	胎土在地	
134	參 (22.2)			外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	小松式		
135	參	24.3		外面：不明 内面：カズハジの横ハケ	小松式	胎土在地	
136	參	14.4 12.3 15.0		口縫底部：要曲工具による押引	口縫上部：窓上口目ヨコナデ 口縫下部：頭部・横ハケ後ナデ 口縫内面：横ナデ 脚部内面：横ハケ後ナデ	小松式/上津ノ 台式との折衷 口縫部は凹 縫繩文	胎土在地
137	參 (25.4) (12.6)		口縫底部：キザ	口縫底部：ヨコナデ 口縫内面：ヨコナデ	小松式	胎土在地	
138	參 (16.2)		口縫底部：3本一組の斜行被縫文2段 脚部：3本一組の直行被縫文2段、斜行被縫文2段、波状文	口縫底部：ヨコナデ 口縫内面：ヨコナデ	小松式		
139	參 (15.6)		口縫底部：キザ	外面：ヨコナデ被縫ハケ 内面：ナガ	小松式	胎土在地	
140	參 (11.6)		口縫底部：キザ	ヨコナデ	小松式		
141	參 (13.6)		口縫底部：キザ	ヨコナデ	小松式	チャート	
142	參	17.8 13.0 13.4		口縫底部：キザ 口縫内面：3本一組の被縫文の波状文2段 脚部：3本一組の直行被縫文2段 波状文と交互文、波状文 脚部内面大らし、アラカリ上・横ナ	口縫底部外面：ヨコナデ 口縫内面：横ハケ後ヨコナデ 脚部内面：横ハケ後ナデ	小松式/上津ノ 台式との折衷 口縫部は凹 縫繩文	胎土在地
143	參	14.0 11.2		口縫底部：キザ	口縫上部：横ナデ 口縫下部：頭部・横ハケ後ナデ 口縫内面：横ハケ後ナデ 脚部内面：ナガ	小松式	胎土在地
144	參		6.2		外面：横ハケ後ナデ 内面：ヘラナデ 底面：ヘラナデ	小松式	胎土在地
145	參		7.0	底面：ナデ	ナデ 底面：植物茎压痕・ナデ	小松式/東北系 との折衷か 美間石	
146	參		5.1		外面：ナガキ 内面：ナガ	小松式/東北系 との折衷か 美間石	
147	參		7.2		外面：ナガキ 内面：筋、横ハケ 底面：ナガ	小松式	胎土在地 美間石

No.	器種	計測値				文様	回数	系統	備考
		口径	縁幅	側面幅	底面				
148	唐				7.0				
149	器台	22.7	5.0						
150	高杯	19.2				台面：長楕円透かし	受組内：外面：ヘラジカ・赤羽根 台面外周：縦・横・カマヘルシヨウ・赤羽根	戸木式日本古 墳土在地	指定No.16 墳土在地 円筒形埴輪できず
151	蓋	9.1	3.2	6.1	4.2	口縁延展：キザ	外周：ハケ後ヘラジカ 内面：横・カマヘルシヨウ	小松式	指定No.15 墳土在地
152	唐					口縁延展：キザ	口縫：ココナデ 側面：横・カマヘルシヨウ	小松式	墳土在地
153	唐					口縁延展：1条・ツラテ縁延展キザ	ハバ彌ココナデ	小松式	墳土在地
154	唐					側面突起：1条斜面透かし子文	ハケ後ナデ	小松式	墳土在地
155	唐					口縁延展：1条・ツラテ縁延展キザ	ハバ彌ココナデ	小松式	墳土在地
156	唐					口縁内：透け目キザ	ハバ彌ココナデ	小松式	墳土在地
157	唐					口縁延展：1条・ツラテ縁延展：斜行キザ	ヨコナデ	小松式	墳土在地
158	唐					口縁延展：冠縞文透かし子文	ヨコナデ	小松式	墳土在地
159	唐					口縁延展：4.8×1.6斜行短縞文2段	ヨコナデ	小松式	墳土在地
160	唐					口縁内：セキ・1条斜行短縞文2段	横・斜めハケ	小松式	墳土在地
161	唐					口縁延展：4.8×1.6	ハバ彌ココナデ	小松式	墳土在地
162	唐					口縁内：斜行短縞文2段	外周：横・カマヘルシヨウ・内面：横・ハケ	小松式	墳土在地
163	唐					口縁延展：1条・ヘラ彌足跡後端押圧	外周：横・ハケ後ヨコナデ 内面：ヨコナデ	小松式	墳土在地
164	唐					側面直縞文：4本一組の側縞透かし	ナデ	小松式	墳土在地
165	唐					3本一組の側縞直縞文に波状文透かしの側縞山形文	ナデ	小松式日本古 墳土在地	式の側縞
166	唐					5本一組の側縞直縞文・直縞文・斜行短縞文	外周：ナデ 内面：横・ハケ後ナデ	小松式	墳土在地
167	唐					5本一組の側縞斜行短縞文	外周：ナデ 内面：横・ハバ彌ナデ	小松式	
168	唐					ヘラ斜行点文	外周：横・ハケ 内面：ナデ	小松式	墳土在地
169	唐	13.0	12.0	13.7		内面直彩：口縁延展前筋丸	内面横・カマヘルシヨウ	栗林式	墳土在地
170	唐	12.9				側縞：ヘラ彌足跡前筋丸	外周：ヘラジカ	栗林式	指定No.19
171	唐		(9.6)	(28.4)		側縞：ヘラ彌足跡丸、下段2幕の沈縫間に2段の斜行点文、側縞透かし子文 側縞：ヘラ彌足跡・側縞透かし子文透かし後、ヘラ彌足跡文 側縞：ヘラ彌足跡・側縞透かし子文透かし後、ヘラ彌足跡文	外周：ヘラ彌足跡上半までヘラジカ 内面：横・ハケ、頭部ナデ	栗林式	法縫開口・赤面 透かし子文は小松式 の基準 墳土在地

* 在地墳土は、花崗岩由来の石美・黄石・雲母を多量に含む特徴ため鑑別が可能である。

<引用・参考文献>

- 相澤清利 2013「東北地方南部の並行沈縫文系土器と十三塚式土器」『初』第9号 弥生時代研究会 1～20頁
- 相原淳一 2002「天王山式成立期に関する層位学的再検討」『宮城考古学』4 宮城県考古学会 28～48頁
- 青木 滉・藤田至則 ほか 1979「越後平野の形成とその災害をめぐって」『アーバンクボタ』No.17 (株)クボタ 22～31頁
- 青木 学・内田 仁 ほか 2006「中曾根遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 阿部朝衛 1989「大木家所蔵の旧石器」『北越考古学』創刊号 北越考古学研究会 46～49頁
- 甘粕 健・小野 昭 1984「山谷古墳」新潟県巻町教育委員会
- 家田順一郎 1983「藤平遺跡発掘調査報告書」新潟県下田野村教育委員会
- 井口悦男 1982「新潟附近の正式測図以前 一明治27年版2万分1を中心に一」『地図』第20卷第3号 日本地図学会 1～12頁
- 石川日出志 1990「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学』第3号 北越考古学研究会 1～20頁
- 石川日出志 2000a「天王山式土器弥生中期説への反論」『新潟考古』第11号 新潟県考古学会 5～32頁
- 石川日出志 2000b「南御山2式土器の成立と小松式土器との接触」『北越考古学』第11号 北越考古学研究会 1～22頁
- 石川日出志 2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100合併号 長野県考古学会 54～80頁
- 石川日出志 2003「関東・東北地方の土器」『考古資料大観』第1巻(弥生・古墳時代 土器I) 小学館 317～368頁
- 石川日出志 2004「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学』第120号 駿台史学会 47～66頁
- 石川日出志 編 2005「関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年」(課題番号14310189) 平成14年度～平成16年度
- 科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書『明治大学考古学研究室
- 石川日出志 2009「弥生時代墓再葬墓の終焉」『考古学集刊』第5号 明治大学考古学研究室 21～38頁

石川日出志 2012「弥生時代中期の男鹿半島と新潟平野の遺跡群」『古代学研究所紀要』第17号 明治大学古代学研究所
15~31頁

石川博行・北村和桓 ほか 2010「堂の前遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

井関敬嗣・中村五郎 1960「中間津遺跡の土器」『福島考古』3 福島県考古学会 10~11頁

磯崎正彦 1956「天王山式土器の編年的位置に就いて」『上代文化』26 上代文化研究会 9~21頁

伊東信雄 1950「東北地方の弥生式文化」『文化』2~4 東北大学文学会 40~64頁

上田三平 編 1921「若狭及び越前に於ける古代遺跡」福井県史蹟勝跡調査報告第1冊 福井県内務部

上原甲子郎・磯崎正彦 1968「北陸地方Ⅱ」「弥生式土器集成 本編」2 日本書學會 弥生式土器文化総合研究特別委員会
105~109頁

梅宮 茂 ほか 1969「福島県史第6巻考古資料補足考古図録」『福島県史』第1巻 福島県

大木金平 1921「郷土史概論」坪谷嘉平治(1999年復刻版 大木幹雄)

大木金平 1935「康平寛治圓は果して偽作なるか?」『高志路』第1巻第11号 高志会 8~15頁

大木金平 1936「越後山草荷の彌生式土器に就て」『中部考古學會彙報』第1年第3報 中部考古學會 5頁

大木金平 1937「越後山草荷の彌生式土器追報」『中部考古學會彙報』第2年第1報 中部考古學會 3~4頁

大木直枝 1956「川東地方の考古学的考察」『川東郷土史料』新発田市川東公民館

大木直枝・中村五郎 1970「山草荷2式土器について」『信濃』第22巻第9号 信濃史学会 39~60頁

加治川村文化財調査審議会編 1978「山草荷遺跡(A)」「郷土誌」第1集 古代編 加治川村文化財調査審議会

加藤 学 2001「松影A遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤由美子・小林 徳 ほか 2011「草薙遺跡」長岡市教育委員会

金子正典 1999「新潟県三条市内手野道跡・経塚山遺跡」三条市教育委員会
鶴井幸彦・田中里志 ほか 2006「越後平野における砂丘列の形成年代と発達史」『第四紀研究』第45巻第2号 日本第四紀
学会 67~80頁

川上貞雄 1963「山ん家遺跡緊急発掘調査報告書」新潟県横越村教育委員会

京都大学文学部 1960「京都大学文学部博物館 考古学資料目録」第1部 日本先史時代 京都大学文学部博物館

金塚友之丞 1934「埴體餘談」『學友會雑誌』第46号 新潟縣立新發田中學校學友會 3~14頁

金塚友之丞 1935「康平圓・寛治圓偽作論」「高志路」第1巻第6号 高志会 6~14頁

金塚友之丞 1936a「新發田概論(中篇)」「學友會雑誌」第48号 新潟縣立新發田中學校學友會 2~34頁

金塚友之丞 1936b「新發田並村上附近より出土する土器分布図」(私家本)

金塚友之丞・芝中生徒 1936a「郷土餘談22 二本松の石器時代遺跡[2]」「新發田新聞」昭和11年3月29日号 新發田新聞社
2面

金塚友之丞・芝中生徒 1936b「郷土餘談84 薬師山と其附近(一)」「新發田新聞」昭和11年6月20日号 新發田新聞社 2面

橋 正勝 2000「弥生時代中期後半~後期初頭の土器編年について」「戸戸戸B式」を考える「北陸弥生文化研究会」11~32頁

小出義治 1955「佐渡に於ける後期弥生式土器の限界~特にその終末と土師器への展開~」『國學院雑誌』第56巻第2号
62~75頁

小瀧利意・芦川泰市 1963「いたみ堂出土の弥生式土器 一今津若松市神指町東神指地内」「会津史談会誌」第38号 会津史
談会 61~74頁

小林 克 ほか 1990「はりま館遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会

小林行雄 1939「越後A様式」「東京考古學會學報第一冊 彌生式土器聚成圖錄 正編解説」東京考古學會 90~91頁

小林行雄・杉原莊介 編 1968「弥生式土器集成 本編」2 日本書學會 弥生式土器文化総合研究特別委員会

斎藤秀平 編 1937「新潟縣に於ける石器時代遺跡調査報告」「新潟縣史蹟名勝天然記念物調査報告」第七輯 新潟縣

坂井秀弥 1985「越後の弥生後期についての覚書」「新潟県史研究」17 新潟県 9~27頁

坂井有紀・高橋 保 ほか 2000「平田遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

篠澤正史・小島幸雄 ほか 2006「吹上遺跡」上越市教育委員会

篠澤正史 2007「新潟県出土の栗林式土器」「新潟県の考古学II」新潟県考古学会 267~288頁

篠澤正史 2012「下谷地遺跡の集落構造について」「新潟考古」第23号 新潟県考古学会 37~54頁

佐澤正史 2013「新潟県吹上遺跡における土器様式の推移に関する一考察」『弥生土器研究 フォーラム 2013』 101～111頁

佐澤 浩 1996「栗林式土器」「日本土器辞典」雄山閣出版 504・505頁

佐藤友子・高橋保雄 ほか 2009「庚塚遺跡・孤塚遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

下田村教育委員会 1987「下田村の弥生遺跡」新潟県下田村教育委員会

下濱貴子・宮田 明 2016「八日市地方遺跡Ⅱ」小松市教育委員会

杉原莊介 1968「新潟県・六野瀬遺跡の調査」『考古學集刊』第4卷第1号 東京考古學會 77～91頁

鈴木正博 1976「十王台式」理解のために(2)「常磐台地」8 常磐台地研究会 1～16頁

鈴木正博 2002a「伊勢林前式」研究の潮流と教済の考古学－「土器DNA関係基盤」から観た「伊勢林前式」併行の所謂「天王山式系」土器群－」茨城県考古学協会誌14 茨城県考古学協会 65～88頁

鈴木正博 2002b「十王台式」と「明戸式」－茨城県遺跡から見た「十王台1式」に並行する所謂「天王山式系」土器型式の実態－「要真岐考古」24 要真岐考古同人会 39～72頁

鈴木正博 2012「陣場式」に学ぶ－南奥弥生式中期後葉「土器型式」の行方－「福島考古」第54号 福島県考古学会 1～24頁

鈴木正博 2014a「砂山」崩し－いつやるか、今でしょ！－「利根川」36 利根川同人会 45～55頁

鈴木正博 2014b「山草荷2式」に学ぶ－「十王台式」研究法は「山草荷式／天王山式文様帯変遷問題」を超えるか－「福島考古」第56号 福島県考古学会 17～48頁

須藤 隆 1970「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」『文化』33～3 東北大学文学会 72～109頁

須藤 隆 1972「郡山市柏山遺跡発掘調査報告書」郡山市教育委員会

間 雅之 1963「佐渡弥生文化の諸問題」『古代学研究』第33号 古代学研究会 16～20頁

間 雅之 1971「新潟県における弥生文化－特にその様相と問題点－」『新潟史学』第4号 新潟史学会 1～15頁

間 雅之 1972「滝ノ前遺跡」村上市教育委員会

間 雅之 1988a「研究史」『豊栄市史』資料編1考古編 豊栄市 33～40頁

間 雅之 1988b「付編 岌山佑二コレクション」『豊栄市史』資料編1考古編 豊栄市 513～576頁

間 雅之 2016「村上市滝ノ前遺跡の弥生後期の窪穴住居跡と出土土器」『新潟考古』第27号 新潟県考古学会 87～98頁

高桑弘美・佐藤祐輔 ほか 2010「百刈田遺跡第1～4次発掘調査報告書」(財)山形県埋蔵文化財センター

高橋 保 1979「出土土器について」『下谷地遺跡』新潟県教育委員会 44～53頁

高橋 保・齋藤基生 ほか 1979「下谷地遺跡」新潟県教育委員会

高濱信行・卜部厚志 2004「第1章1 青田遺跡の立地環境と紫雲寺地域の沖積低地の発達過程」「青田遺跡 関係諸科学・写真団版編」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

鶴沢規朗・野田豊文 ほか 2003「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相－村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡を中心に－」『三面川流域の考古学』第2号 奥三面を考える会 45～117頁

鶴沢規朗 2009「山元遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

田中久夫・長谷川 正 ほか 1996「新潟砂丘の形成史」「第四紀研究』第35卷第3号 日本第四紀学会 207～218頁

田辺早苗 1991「長松遺跡発掘調査報告書」新潟県埋蔵文化財調査事業団

中部考古學會 1936「創立大會の記」「中部考古學會彙報」第1年第2報 中部考古學會 1～2頁

中部考古學會 1936b「消息 藤森榮一氏」「中部考古學會彙報」第1年第3報 中部考古學會 7頁

中部考古學會 1936c「消息 大木金平氏」「中部考古學會彙報」第1年第4報 中部考古學會 4頁

中部考古學會 1936d「消息 大木金平氏」「中部考古學會彙報」第1年第5報 中部考古學會 6頁

中部考古學會 1937a「消息 大木金平氏」「中部考古學會彙報」第2年第5報 中部考古學會 39頁

中部考古學會 1937b「消息 杉原莊介氏」「中部考古學會彙報」第2年第5報 中部考古學會 39頁

中部考古學會 1938「第二回大會記」「中部考古學會彙報」第3年第5報 中部考古學會 32～37頁

鶴巻康志・田中耕作 1994「金谷遺跡・佐々木山遺跡・上車野E遺跡」新潟市教育委員会

寺村光晴 1953「新潟県中越海岸地方に於ける末期繩文土器と弥生式土器の様相、主として其の移行形態について」(私家版)

土橋由理子・石垣義則 ほか 2009「西郷遺跡・大蔵遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 島居龍藏 1925『有史以前の跡を尋ねて』雄山閣出版
- 中村孝三郎 1995「越後の発掘遺跡」長岡市双書30長岡市・長岡市史編集委員会
- 中村五郎 1955「若松市第四中学校遺跡の遺物」『考古学雑誌』第40巻第4号 日本考古学会 51~53頁
- 中村五郎・穴沢祐光 1958「福島県川原町口遺跡について」『古代学研究』第19号 古代学研究会 20~23頁
- 中村五郎 1959「二ツ釜遺跡の土器について」『考古学雑誌』第46巻第2号 日本考古学会 61~63頁
- 中村五郎・高橋丑太郎 1960「福島県天ヶ遺跡について」『考古学雑誌』第46巻第3号 日本考古学会 89~93頁
- 中村五郎 1983「東北中・南部と新潟」『三世紀の考古学』下巻 学生社 520~540頁
- 中村五郎 1993「屋敷遺跡の縄文土器・弥生土器・古式土器」「屋敷遺跡」会津若松市教育委員会 83~105頁
- 中村五郎 2011「天王山式六十年」「坪井清足先生卒寿記念論文集－埋文行政と研究のはざまで－」坪井清足先生の卒寿をお祝いする会 1~10頁
- 中村五郎・阿部健太郎 ほか 2011「油田Y期土器とその周辺－会津地方の天王山式以前の諸段階－」「福島考古」第53号 福島県考古学会 1~18頁
- 新潟県 1983「山草荷遺跡」「新潟県史」資料編I 原始古代一 考古編 新潟県 78頁・図版484~486
- 新潟古跡丘グループ 1974「新潟砂丘と人類遺跡－新潟砂丘の形成史I－」「第四紀研究」第13巻第2号 日本第四紀学会 57~69頁
- 野田豊文 2003「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相－村上市砂丘遺跡・滝ノ前遺跡を中心に－第V章 2 A. 東北系について」「三面川流域の考古学」第2号 奥三面を考える会 102~110頁
- 芳賀英一 ほか 1988「一ノ堰B遺跡」福島県教育委員会(財)福島県立文化センター
- 畠山佑二 1934「蒲原平野の土器石器について」「初等教育」6月号 新潟師範学校附属小学校初等教育研究会 42~63頁
- 畠山佑二 1991「土器を求めて五十年」「北越考古学」第4号 北越考古学研究会 5~8頁
- 久田正弘 2009「弥生時代の東日本系土器集成－栗林式土器・天王山式土器を中心にして」「石川考古学研究会誌」第52号 石川考古学研究会 1~30頁
- 廣野耕造 1996「石動遺跡」新潟市教育委員会
- 福海貴子 2003「第1節 八日市地方遺跡出土土器の検討」「八日市地方遺跡 I」小松市教育委員会 125~169頁
- 斎森義一 1937「北越後村杉出土の濃青質石器に就て」「考古學」第8巻第10号 東京考古學會 456~457頁
- マ生(松木末吉) 1938「古代越後文化に天孫民族の影響」「東北時報」昭和13年10月2日号 東北時報社 3面
- 馬日順一 ほか 1971「岩代陣場遺跡の研究」福島県本宮町教育委員会
- 馬日順一 1978「入門講座・弥生土器・東北 南東北4ー」「考古学ジャーナル」No.156 ニュー・サイエンス社 19~25頁
- 丸山一昭 1998「松ノ脇遺跡」新潟県和鳥村教育委員会
- 水澤幸一 1998「兵衛遺跡・四ツ持遺跡」新潟県中条町教育委員会
- 森本六爾・小林行雄編 1938「東京考古學會學報 第一冊 彌生式土器聚成圖錄 正編」東京考古學會
- 八幡一郎 1936「越後北蒲原郡山草荷の彌生式土器」「中部考古學會彙報」第1年第2報 中部考古學會 3~4頁
- 八幡一郎 1937「越後に於ける織錦土器」「人類學雜誌」第52巻第1号 東京人類學會 20~26頁
- 吉井雅勇 2013「山元遺跡」村上市教育委員会
- 渡辺朝和・立木宏明 ほか 2004「八幡山遺跡群発掘調査報告書－第11・12・13・14次調査－」新津市教育委員会
- 渡邊裕之・内藤真一 ほか 2003「道端遺跡 II」新潟県教育委員会(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 渡邊美穂子・坂井絵里 2008「王子山遺跡発掘調査報告書」新潟市教育委員会



指定1

55



指定2

66



指定3

123



指定4

117



指定5

14



指定6

2



指定7

60



指定8

48



指定9

40



指定10

46



指定12

142



指定13

70



指定11

119

図版2 市指定土器(2)、山草荷遺跡の調査と景観



指定14

87



指定15

150



指定16

149



指定17

118



指定18

151



指定19

170



大木金平 1875~1952 (市立米子小学校蔵)



中部考古學會 山草荷遺跡見学会 1938.9.25 (大木家蔵)
近藤萬三郎(左端)、八幡一郎(中央)、和島誠一(右端)



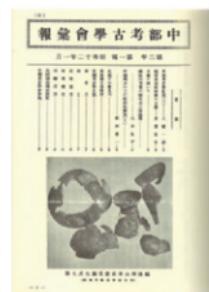
見学会で発掘する八幡一郎
(長岡市立科学博物館蔵)



遺跡近景 (南東から 大木家蔵)



第一年第二報 (八幡1936)



第二年第一報 (大木1937)



遺跡近景 (2017 南東から)



遺跡近景 (2015 南から)



遺跡遠景 (2017 南から)

山草荷遺跡



図版4 川原町口式系土器(1)



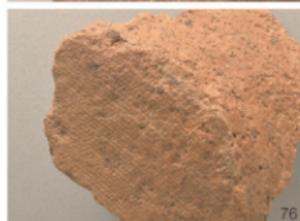


図版6 川原町口式系土器(3)

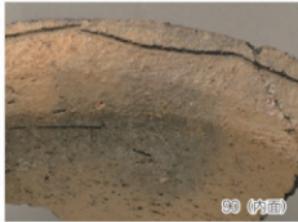


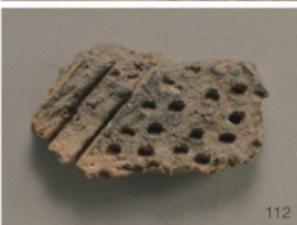




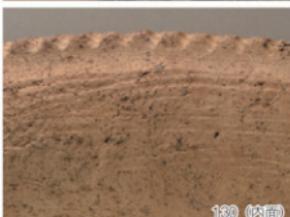
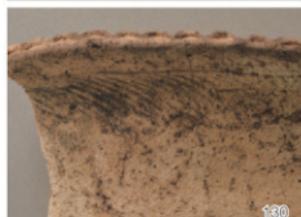


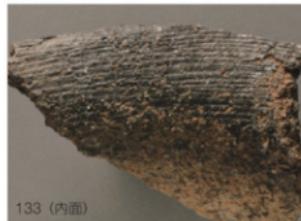
図版10 宇津ノ台式土器 (2)





图版12 小松式土器 (2)





133 (内面)



134



135



136



136 (内面)



137



137 (内面)



137



138 (内面)



139



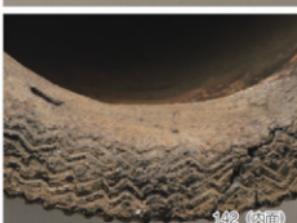
140



141



142



142 (内面)



143



144

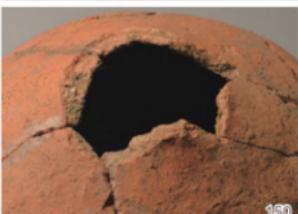


145



146

图版14 小松式土器(4)





160



160 (内面)



161



161 (内面)



162



162 (内面)



163



163 (内面)



164



165



166



167



168



169



170



171



171



171

文 献 抄 錄

ふりがな	やまそうかいせきしゅつどのやよいどき							
書 名	山草荷遺跡出土の弥生土器							
副 書 名	新発田市指定有形文化財（考古資料）							
卷 次	-							
シ リ ー ズ 名								
シ リ ー ズ 番 号								
編 著 者 名	田中耕作 笹澤正史 石川日出志 斎藤瑞穂 野田豊文 渡邊裕之 鈴木 晚							
編集・発行機関	新発田市教育委員会							
所 在 地	〒959-2323 新潟県新発田市乙次281番地2 0254(22)9534							
発 行 年 月 日	西暦2018年3月30日							
ふりがな 所 取 遺 跡 名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 遺跡No.	東経 (世界測地系)	調査期間	調査 面積m ²	調査原因	
やまそうか 山草荷遺跡 やまそうか いち (山草荷 I 遺跡)	にいがたけん しばたし そうか 新潟県 新発田市 草荷 1127~1129番地ほか	15206	592	37° 59' 30"	139° 18' 37"	1936 ~ 1937	不明	学術目的 調査
遺 跡 名・種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物			特記事項		
山草荷遺跡 (山草荷 I 遺跡) 遺物包含地	弥生時代 (中期後半)		弥生土器 川原町口式系(壺・甕・鉢・高杯) 宇津ノ台式(壺・甕・蓋) 小松式(壺・甕・高杯) 栗林式(壺・鉢・蓋)			川原町口式系の 壺には、赤彩が多い。		
要 約	山草荷遺跡は、新潟県の弥生時代中期後半を代表する遺跡である。平成26年1月にその出土土器が新発田市有形文化財に指定されたことから、資料集としてここに全容をまとめたものである。なお、「山草荷遺跡」は学史的な遺跡名であり、遺跡台帳は「山草荷 I 遺跡」である。山草荷遺跡の土器は、東北南部の川原町口式系、秋田県域の宇津ノ台式、北陸の小松式、中部高地の栗林式という東西南北の4系統で構成される。中でも、細い沈線で胴部に大きな渦状文を描く川原町口式系の壺を主体とする。また、宇津ノ台式に小松式の要素が折衷した土器は、本遺跡に特徴的である。							

山草荷遺跡出土の弥生土器

— 新発田市指定有形文化財（考古資料） —

発 行 平成 30 (2018) 年 3 月 30 日

新発田市教育委員会

新潟県新発田市乙次 281 番地 2

印 刷 島津印刷株式会社

「山草荷遺跡出土の弥生土器」正誤表

新発田市教育委員会

記載箇所	誤	正
40頁 18行目	舟形圓	樹形圓
44頁 4行目	藤樋遺跡	藤平遺跡
奥付（抄録） 14段目「主な遺物」欄	栗林式（壺・鉢・蓋）	栗林式（壺・蓋）